

2号

大西博士全集第五卷目次

良心起原論目次

1-1-3

緒言

本論に對する懷疑——本論に於ける批評的方面と建設的方面との論

究の差異

前論

良心とは何なるや——1-1-3

良心と一種特殊の心識——義務の至上権——本論及究の基礎と宗

概——良心の表面的性質——1-1-9

決行前の良心作用——良心の作用に於ける禁止と奨励——良心の

命令、義務——義務の束縛は内部自由の束縛也——良心の判別

作用と感別——善惡の褒貶と快不快の感——善に伴ふ快感と美に

伴ふ快感とは同一ならむ——良心の衝動と道德感——良心の知力

的方面即ち感別——義務の心識と善惡の判別との關係——1-1-17

決行後の良心作用——良心の平安と不安及び悔悟——良心の不安

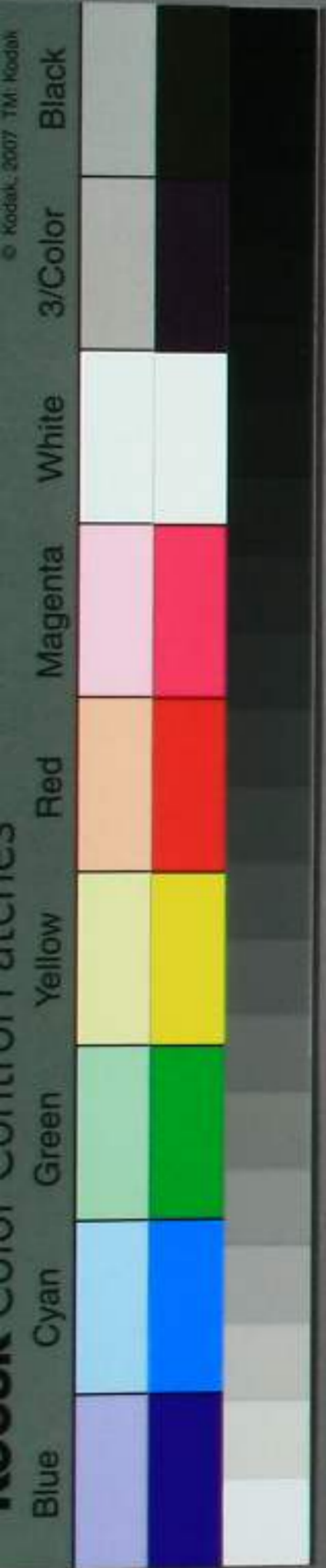
大日本女學會原稿紙

1-1-17-6号

36

6号

6号



大日本女子會原稿紙
201
111

2

36

36

は恐怖の感情と異なり——決行後、良心作用に於ける美善の復讐
 に關する快不快感——道徳的快感と美学的快感との類似——良心
 の平安不安の感と道徳感とは異なり——一九—三六
 良心作用の對価——カントの所謂道徳感——道徳感の對価と良心
 作用——仁愛と公義——動機としての社會的感情と道徳感との差
 別——道徳感の起原を達と社會的感情との關係——二七—三三

本論

良心の起原 三四—三七

本論の困難と希望——分析的証明と能力説との世知——良心作用
 發現の時期と其變遷——良心は社會の製造物るか——良心の起
 原を單に社會に帰するは不當假定の謬見也——如何ある外界の力
 が良心作用を喚起したるか 三四—四二
 ○苦樂と外界の強迫力に歸する後——又詳説——外界の制裁には

此の良心作用を言ふべからむ——此考証には二種の見極あり——

(一) 一個人の一生涯の習慣朕想に厚まるる説——此証は實際の情態

に違へり——(二) 祖先に奉る経験と違ふに厚まるる説——此考証に

對する巨大なる非難 ~~批評甲~~ ~~外界~~ 三——五一

(批評甲) 外界よりの快苦の影法師と善性の心識——此は外界の強

迫に反對して乃ち心しとせるの心識——恐怖と異なる是認の心識

——此考証は乃ち考証 ~~其の特性を説~~ 明し得む——右非難の

三西の點—— 五二——五九

(批評乙) 良心の利他的方面に對する困難—— 六〇——六四

(批評丙) 利己主義其者の立脚地より見ゆる困難——利己主義の善

とする所と此考証の善とする所との相異——此考証の困難の要點

(辯護説第一) 道德的心識の幼稚なる時代に於ける外界制裁の痕跡

と見ての解説—— 六九——七五

(此の説の批評丁) 此説は道德的心識と良心とを別物とする所の也

大日本女學會原稿紙

予の批評の論法に關する疑惑——予が評論の要點——義務の心識に就きて——善惡の判別に就きて——此説の吾人の道德心に及ぼす危険なる影響——

七六——八五

(辯護説第二) 社會事情の大勢一致と道德上の定論——

(此説の批評成) 此説は善惡標準の一致せざる者には應用す可らず

——是亦道德上の破壊説——

八五——八八

○良心の起原を利他的性情(社會的本能)に歸する説——

前考の缺點と他利的性情——他利的性情の起原——他利的性情の

分析——他利的行為の目的と動力——愛情と無私自然の衝動——

他利的性情と良心の起原——ダウインの考説——前考説との比

較——

八八——一〇四

(批評甲) 義務の心識に就いて——社會的本能の発動のみ不断なりと

は言ふべからず——社會的本能は自衛的本能に比して其発動後果し

て容易に想ひ浮かぶものなるか——社會的本能のみ強しと

5

6

はいふやからずー假りに社會的本能の発動を不断なりとするも

其が何故義務の心算を生ずるかー以本能擴張の理由如何ー

ゾアウイン自ら自家の考説の缺點を表白せりー一四一三五

(批評) 善悪の感別につきてー善悪の識別につきてー此説

と前考説とを合せ考ふるも効果無しー一五一一九

○良心を一種の本能と見る考説ーヘブリング氏の説ー其不十分一三九一三〇

○概念的感算と良心の一要素とする考説ー

スパンサー氏の説ー義務心算の二要素一其二外界からの

強迫ー其二概念的感算の權威ー

(批評) 複執なる概念的感算必ずしも權威を有せずー感算

の權威の因由と厚生ー厚生こそ義務の事柄の指摘は良心起原の説

明にあらずー一三〇一三三

○著者が採らんとする考説ー

在末諸考説の不十分ー今一つの混執の思想ー羞耻心説と理想ー

理想とふ語を掲ぐるのみには不十分也。……………一三七—一三三

理想の生起する所以——萬物有目的——生物の目的——人類の月

的——目的の豫想と進歩発達——豫想の過誤と根本の傾向——理

想と良心の發生——社會は理想實現の機關也——理想進歩の由

因——理想と物質的法則との類似——兩者の差異——理想の不

能改造——理想の實在變更力——理想と良心の諸作用——理想

の自覺の徐々開發——予輩の考説と純理哲學上の假定——予の考

説の意味——ダウインの考説との差——良心作用に於ける混合物

言語學上の説に就いて——病的心状に就いて——良心の作用と神

命と解する要りし——

良心の裏面的性質——良心發達の意義——善惡の念は終に消滅す

るをありや如何——良心信用の程度……………一三三—一三七

餘論

36

節倫 倫理學上の論の價值

二八七。

良心起原の考説の道德に及ぼす影響——子の考説と倫理界の關係
盤

誠

丁附 録

4号

良心作用の對境なる動機、意趣並に行為……………二七二

無意識の動作は良心作用の對境ならず——有意趣の動作の分析
——動機の有意識と無意識——良心の是非と意趣全体——行為は
意趣の外面也——自他動作判定の前後如何

8

論集

良心の意義を論ず……………二八七

道德主義に就いて加藤博士に問ふ……………一九六

倫理學は哲學か將た科學か、元良勇次郎氏の論を評す……………二〇八

倫理攷究の方法並目的……………二二〇

其 一……………二二〇

其 二……………二三九

倫理研究の性質……………二四六

倫理研究と其の實用……………二五八

快樂説の心理上の根據を破す……………二六七

再び快樂説に對して

其 一……………二七九

其 二……………二八八

忠孝と道德の基本……………三〇八

大日本女子學會原稿紙

20-1508

6

9

<p>其 三</p>			<p>其 二</p>			<p>其 一</p>			<p>聖書の言と不言</p>			<p>講演第三回</p>			<p>講演第二回</p>			<p>講演第一回</p>			<p>古代希臘の道德と基督教の道德</p>			<p>希臘道德が基督教道德に移りし次第</p>			<p>其 二</p>			<p>其 一</p>			<p>孔子教</p>			<p>儒教と實際的の道德</p>			<p>進歩と道德</p>		
四	五	〇	七	日	日	四	日	二	四	二	二	四	〇	七	三	八	五	三	七	〇	三	六	一	三	四	九	三	三	〇	三	二	四									

大日本女學會原稿紙

34

34

宗教の分裂 454

宗教の前途 464

宗教と道德 470

兒童の教育を論じ並せて婦女子に望む所あり 479

教育の目的 486

一か多か、教育の一要点 495

德育について一言 501

德育上の意見に就いて澤柳文士に答ふ 510

515 520

525

537

基督教的教育と国家

獨想二題

矛盾の一致

36

自力と他力

偶思録

活動

辛苦

隨思隨録

理想

事物

進化



本論より
を懐疑

良心起原論

緒言

良心起原論を小表題を見たるのみにて、既に心中一團の疑を起し、此の如き論は到底帰着する所歟とも、これにてはあらざるかと問ふ者も或はあらず、人成程良心の起原を執いては衆説紛々たるに相違なく、又新しき説明を試みんば甚だ困難なる輩に相違ふべし。然れども此を理由として、此論は遂に帰着する所あり得べからざるものか、猶ほ従らば此が討究を試みんば所謂空論を弄ぶ者なりと一も二もよく獨断し居り論者あらば予はその如き輩に向つては云ふべき言辞を知らざるなり。然しその程まで獨断的又懐疑的思想に用ち籠り居らざる人々は、遠般問題の研究を見て無益の輩と思えざるのみか、又中には此研究に於て予が踏まむべき行路をば予と共に辿るをも敢て厭はざる者もある人よし、其の如き人は無しとせしむ。此問題の研究は免に角予に取りては打捨て置く可らざるものにてありし也。

良心起原論 緒言

大日本女子大学蔵

又6
9206
B44

批評
本論
予か此論を讀む者は良心起原の考説に關する批評的部分と建設的部分との間に其論究の趣に於て頗る相異なる所のあるに氣附くべし。彼より此に移

良心起原論 緒言

大日本學會原稿

恐くは或學者は又云ふらん良心起原論は往々之を推究する人々の思
 程に倫理學の益する所のありにあらざらん良心はその初め如何
 にして生じたればとてそれが爲めに現在の徳義の性質又其價值に毫末の
 変更も来さざらん。果して此問題の研究は倫理學に益する所なき
 若しくは至て少きものありんば果して徳義の價值又其性質に影響する所の
 ありものありんば是れ正しく予が後に陳述せむ所を待つて始めて断定し得
 べき論点か一ふれば姑く假りに右論者の言の如しとす。此問題の攷
 究は他の故を以て（例へば單に吾人の良心てふ一種特別なる心的現象に
 就いて吾人の知識を廣くするの一助となん見ても）決して忽にすべから
 ざることは明らなり。然れども此問題の真に如何なる價值を有するか又予が
 論述の果して是問題の説明するに堪ふかは予が是より開陳せんとす。

所論の全辨に就いて判せんを希はざるを得ず。

予か此論を讀む者は良心起原の考説に關する批評的部分と建設的部分と

の間に其論究の趣に於て頗る相異なる所のあるに氣附くべし。彼より此に移

るに當りては恐くは全く別種の哲學思想に遭遇す了が如きの思ふらん是
 小蓋し批評の部分に於ては其固する所主として彼の所謂英國風の經驗的
 哲學に現出せし良心起原の考説よりが故に假りに其哲學を此自身の立脚
 地に立ちて之を論評したれども茲に新一考説を建設せんとするに當り
 ては右とは頗る異なる哲學的根據を取らるる必要を感じたれども即ち予
 が此論の批評部と建設部との論究の趣に右云ふ如き差異を存すは建設
 部に於ては批評部に於て陳述せし考説とは全く異りたる方角ありして良
 心起原の考説を立てむと試みたが故より。

良心起原論

緒言

ハシと云

良心と
特殊心
徳

前論

良心は何ぞや

路行と會者あり人なき露塵に財囊の遺しあるに氣附しと想像せよ。誘に云ふ「賈の盗み」恐くはそを懐にして走らんと欲念を起すべし。然し又その心と共に一種無類の心識を浮べ来りて其徳念も果すまじきものあり。まじりと覺知すべし。然れども只ふ心中を顧みれば其心識の儼然として其居を占むるありを見ん。之も面せざらんを欲するも面せざるを得ず。之を敵はんと力むるも容易く敵を得ず。若し又その為す勿れと告ぐれば拘らず右の財囊を懐に引走りたるに。心識と云ふ語は以下凡は財を得まくほりせし欲念は其外に満ち足りべし。獨逸語のベグストガて其跡を収むべきも。それが為に抑壓せられし右イレの意義にて用ふ。即ち特殊の心識は恰も復讐を為さんとするもの何にて心に覺知すべし。如く我心中の安堵を奪ひて一種不快の感をは。皆心識の一部なれり。

良心起る次第

良心は何ぞや

註
ハシと云

新編
教義
の
要
義

宿

館

義務の
至上権

ア、我
の
義務
は
如何
なる
もの
か

催起し奉るべし。すなはち響に「為してはあらぬ」と禁めたり心識は今
 「為してはあらぬを為せし」と云ふ心識とあり更り萬感おれか為に壓
 倒せられし折角充たした欲念と遂にその甲斐ありに到らん。世に此特殊
 の心識を名けて良心の感又良心の命令と云ふ又更に形容の語を用ひて
 良心の聲とも云ふ又その聲の最と嚴肅にして無上の權威を以て語すが如
 く思はるゝ故に西洋の神學者等は此に宗教的思想を附加して神の聲とも
 云ふ。
 夫れ世に義務の念と名くすものは即ち此良心の嚴肅ある權威ある聲の發
 表したるものにして如何なる欲念も如何なる感情も皆此義務で一念の
 前には跪くべきあり。義務の至る如之に抗すべき權勢あるよし。義務は是れ
 吾人の胸中を洞歩する唯我獨尊者にしてその吾人に語すや一言の僣辭を
 籍いばその吾人に余すや一臂の壓迫を用ひず。只その吾人に告げて為すべ
 し為すべからずと云ふ。其處は自由の處迫ふ。即ち自らか又づからに負
 けずる處迫ふ。噫、義務は是れ何たるものぞ。カントは呼んで噫、義務よ、此聲

カントは呼んで噫、義務よ、此聲

大日本女子會館

本論改定
の
修正
の
常
義

くべき一念よ、爾の出で来りし源は何の処にお
了かと云へり。

夫れ良心の起原は吾人の發理の心に起り、**一天**

問題あるが、それを茲に解説せんには、先づ良心と

は如何なるものあるかと云ふ、**正**を、今陳べしよりも猶一層詳に論じ置かば

了可らば、良心てハ語は倫理の書に、日常の談話に慣用す、所あるが、其意

義は決して如めり、判然たるものと假定し置くを得ず、殊に倫理學者の論

辨する所を見、往々もと一派一流の學說に牽強附会す、**値**ありが故

に、寧に彼等の中、互に差異を生ずるに止まらずして、普通ハ心識と相

隔離するを、類子甚しきものさ、無き能はず、故に予が茲に良心の性質を

辨明するに當りては、敢て始より一派の學說を立て、それ事實を牽強附

会す了とを為さず、寧ら**意**に日常の言語と云ふは、只ハ外國の言語のみ

普通ハ心識を表出する、**指**して云ふにあらば、他國の言語（殊に最も發達

所の日常の語にありて、**セ**の國語）をも含み居り。

カント「クリテイク
デ、プラク
カシエ、ハ
フ、エ、ン、フ、ト
第九十一頁（ハルテン
ニ、タイ、ン、第、五、冊）

7

良心の
表面の
性質

以て其心識に包含しあるものと非や而してこれを以て予が**研究**の起点とす
 さんと欲す。故に其起点の正否の如何は之を各人の心識に訴ふるより外に
これが判定をなすの道からん。尤も経路を起点とす**研究**のみならず如何
 なる**研究**に於ても最後の判定は之を各人の心識に訴ふるの外には勿論
 ふれども、殊に予の茲に論述せんとす所の如きは、必然の真理と云ふ稱す
 るものより**演繹**しましにあらざりて、押しかべて普通の心識と思はるゝも
 のとば**研究**の起点とすにあり。其起点の正否如何は全く各人の心識の上
 に懸る**正**と知るべし。這般の**研究**に於て取るべき道は、予の茲に取る所より
 も猶ほ更に適當なるものあるを見ざるあり。
 予は且より良心の何れをを説明せんとす。即ち其作用の固有特殊の点を掲
 げて其性質を明にせんと欲す。但し其記原を達を論ずるの邊よりし
 て始めて發見し来たべき性質は姑く措き、茲には只だ（其記原を達の如何
 に拘らざりて）現在の心識を省みて通常良心の作用と見做さるゝものを
 擧ぐるに過ぎず。現在の心識に現れたる事實を掲ぐるに止まりて、其事實の

良心の表面の性質
 研究の起点とす
 以て其心識に包含しあるものと非や而してこれを以て予が研究の起点とす
 さんと欲す。故に其起点の正否の如何は之を各人の心識に訴ふるより外に
 これが判定をなすの道からん。尤も経路を起点とす研究のみならず如何
 なる研究に於ても最後の判定は之を各人の心識に訴ふるの外には勿論
 ふれども、殊に予の茲に論述せんとす所の如きは、必然の真理と云ふ稱す
 るものより演繹しましにあらざりて、押しかべて普通の心識と思はるゝも
 のとば研究の起点とすにあり。其起点の正否如何は全く各人の心識の上
 に懸る正と知るべし。這般の研究に於て取るべき道は、予の茲に取る所より
 も猶ほ更に適當なるものあるを見ざるあり。
 予は且より良心の何れをを説明せんとす。即ち其作用の固有特殊の点を掲
 げて其性質を明にせんと欲す。但し其記原を達を論ずるの邊よりし
 て始めて發見し来たべき性質は姑く措き、茲には只だ（其記原を達の如何
 に拘らざりて）現在の心識を省みて通常良心の作用と見做さるゝものを
 擧ぐるに過ぎず。現在の心識に現れたる事實を掲ぐるに止まりて、其事實の

決行前の
の心作



生記由來に論及すと云は、之を本論に譲るべし。其の故に予が此章に於て所
 障す所は寧ろ良心の表面的性質にして、其裏面の即ち隱微根本の性質は
 (予輩の見たる所にては) 其記事を説明し終つた後、此に於て始めて明にし
 得べしと考ふ。

此部分の陳述は此良心記事論中にて最も面白かりたる部分ありやも知る
 べからず然れども先づ此部分を通過せし後、後に至りて良心の記事を採ら
 んとする時に當り、良心てふ者、此自身の漫然たる如きと云ふ能はざるべ
 し。行路豈に必ざしも愉快ありんや、然れども志す所に達せんには、難歩の陸
 路も、奇趣なき坦道も、共に等しく踏んで進まざる可うあるあり。

上に掲げた了貧者が財産を盗まんとす例にありても知らざる如く、良心
 の作用は之を決行前と決行後とに分つを得。

先づ決行前の方より説き始めんに、良心の作用は決して單純一種のものに
 止らば、良心甚者をば吾人が心の單一特殊ある能力と見做すべきか否かに
 拘らず、又心の能力とは全解如何なるものを指して云ふものに拘らば、良心の

Handwritten notes on the adjacent page, including a large red bracket and various annotations.

良心の命
命令の義
義務の義
良心の命
由の義
由の義

を見る時は一撃手一投足の旁をたも取らずして其場を立去らんとすの
 心を禁むる禁止的心識ありと察する其見を救へんと云ふ奨励的心識を浮かぶる
 を常とす。即ち通常其如き場合には斯くしてはるらぬと云ふ心識ありと斯
 くせぬばありぬと云ふ心識を浮かぶる。故に此禁止と奨励との心識は如
 何あり場合に於ても又た見極にありて均しく孰れも有る者にはあらざ
 るあり。
 去れば良心の作用は決行前に於ては禁止と奨励との二振に表現するもの
 にして而して彼の通常「シテハナラヌ」又「セネバナラヌ」と云ふ語は
 即ち決行前の良心の作用を表す者あり。此作用の心識を名けて良心の命
 令と云ふ。又良心の命令する事柄を名けて義務と云ふ。義務は幾分の束縛
 を意味するものなり。其束縛は外部より強ひて相附くものなり。あらざし
 て内部より我が心のまづから我心に負はする一種特別の束縛する故に或
 は之を道徳上の束縛とも云ふ。此束縛する心識を義務の念又は義務感と
 云ふ。此義務の束縛は今云ひし如く決して外部の束縛と混同すべからず。

大日本女子大学

大日本女子大学

良心の命
命令の義
義務の義
良心の命
由の義
由の義

美善の
判別
良心の
判別
と
感別

にあらざる外部の束縛に全く及して現るべきものあり。義務感の起るに
溯りて云はばいざ知らず現在心識に於ては此兩者は全く別のものと見
做さざる可らば外部の束縛は我自身を固固に繋ぎて我信ずる所を挫かんと
すも我が義務は我として真理自由の保護者たらしむる堪合ふありしか
る也。

良心の作用はその命令と稱するものに止まらず又他の辺あり見ざるを得
即ち日常の言語に或事とシテ人ナラヌ又又はセキベナラヌと知りて是を為
し或は為さずと云ふものあり又或は是をヨクナキ事又はヨク事

と知りて為し或は為さずと云ふものあり此ヨシと云ふヨクナシと云ふは一
種の判別を表す詞にして通常の言語に於ては是れ亦良心の作用と見ら

べきものあり此判別は
一をヨシと褒め一をワ
カ判別と云ふべし。故に或事を褒め又或事を

貶す云ふは是とし又是を貶すと云ふと
同義ありと知すべし。

にして是に知識上のと

感別
美悪の
褒貶と
快不快の
感

のにはあらう。蓋し二と四との加は二
 と五との加ありも少ありと見え如き
 は、或は全く感情の分子あり知識上の
 作用と見て可あらんも、美悪を褒貶す
 了良心の作用は大に之れと異ありて感情を以て満ち充たされたる判別子
 り。此點に於ては醜美を分つ美術的判別に類し似たる所ありて云はれ、双方
 等しく感情に浸されたる判別あり。因より知識上の判別と名くるものも、多
 くは感情の作用の多少之に伴つて、殊に美悪醜美と名くる判別に於ては、感
 情の分子、甚だ著明なり故に、或は之を感別（即ち感じわく作用）と名
 くるも可あらん。

今感別の上より良心の作用を見
 ると、美悪の褒貶に含みれり感性の
 の作用は、一種の（最も廣き意味
 にて）快不快の感ありと云ふを
 り感情に知識の作用の伴はずとの意に

2) 凡べて物の差別を察見するは知識
 の作用にして感情の作用にあらず云
 ふ点ありしては、感別あり語は不都合
 ありに似たりとも、語に云ふ所は美悪醜美
 語は、單に之を察見するばかりにて

1) 然に云ふと云ひつゝ、
 2) 然に云ふと云ひつゝ、

大日本美術會誌

ありて、われ全く混	揚 揚げて、其相異なる所を抑えたりとの評ありし又或
同才、才もこの女	皆者は快意は如何なるも皆同種類にして只強
らぶ、恰も甘味を嘗	弱も差別ありの如、即ち快さの感之れ自身に於ては毫
ゆて覺ゆる快意之	も差別あり云ふも此れは、是れ唯だ愉快なきは快意之
美事に接して得る	小然短の抽象的名称に迷ひし認見より、昔しく同一
快意とは同じく之	の名稱を附するも、其名稱を附せたりしもの、同じ特
を快意と名く此れ	殊、要別の点より、これは云ふ可らず、譬へば同じく色と云
も、各、特殊の所お	ふも、赤と青とは只強弱の差別として現し、赤は赤し
りて、吾人の現在の	て種類の差別として現し、赤は赤し。又譬へば一言に
心識に於ては、決し	物解の運動と云ふも、道達の差別の外に、方向の差別を
て全く同一のもの	有するが如し。或一方向を取らざして、只強弱の
として現し、赤は赤	も別の如きある運動は、抽象的假想に過ぎず、依り此の如
く、如く、美事に接し	く、只強弱の差別ありて種類の差別より快意と
て得る快意と、美行	抽象的假想に過ぎずと思はる。如何なる心理的作用か

大日本女子大学蔵書

別行
兼

テハナラヌと云ふの心識とは、かゝづから別あるものなれば、是れ共に良	才。美を嘉し、悪を悪むの心識は、一の事をセ子ハナラヌと云ひ又一の事をシ	心地は美を嘉みすと云ふ語にて表し、一の心地は悪を悪むと云ふ語にて表	対しては引寄せられ、一に對しては押し返すし如き心地あり、一の	及して、或事柄を口ロシと返す時は、それを離すもの氣味あり、即ち一に	了心識には、かゝづから其事柄の方に引かれ、傾くの氣味あり、而して之に	て、をよむこと、懐か	了良心の作用を見	了、或る事柄を見	今又美悪を褒貶す	し、来らざる也。	一、よものとして現	感とも、并決して同	に對して、答する快		
所によりて判別するの外に違ふかゝりし。	然れども、快感と快感として、同はを現感する	れども、其元は皆同一なりしか、知れずと云ふあり人。	學者は吾人の現在の心識に於ては、權々の快感相要	は、其快感の相異するに、是れは、是れは、好むがより、又或	し、蓋し快感の種類をして相要するしむる原因の如何	のづから別論にして、茲には、辨明するの必要あるべ	一の快感をして他の快感と相要らしむるかは、是れお	一の快感をして他の快感と相要らしむるかは、是れお	のづから別論にして、茲には、辨明するの必要あるべ	し、蓋し快感の種類をして相要するしむる原因の如何	は、其快感の相異するに、是れは、是れは、好むがより、又或	學者は吾人の現在の心識に於ては、權々の快感相要	れども、其元は皆同一なりしか、知れずと云ふあり人。	然れども、快感と快感として、同はを現感する	所によりて判別するの外に違ふかゝりし。

大日本文藝會原稿紙

良心の衝動と美徳

別

心の作用と見よべきものに、
 後者をのみ良心の作用と云ひて、
 前者を庸か云はざるの理由あり
 を見ず。後者にのみ良心と云ふ語の
 意義を限り用ふるは、通常の言語
 の指示に違背せし如くに思はるべし。
 今云ふ所の
 共に善しく良心の作用と見よべき
 良心の衝動と美徳の良心とを相較する
 に前者に於ては我が対する事物に引
 寄せられ、又は押し出され、又は
 心地ありて之に及して後者に於て
 は我が内より押し出し、又は我が
 内より引き止めらるる如き心地あり。
 若し後者を自動と云ふを得ば前者
 を被動と云ふも不可あらずべし。故
 に響には子バナラ又と云ふ良心を
 名けて良心の衝動と云ふべし。又
 美徳を命と云ひしが今更に之を形
 容して良心の衝動と云ふべし。又
 美徳を褒貶する心識と云ふは、其
 感情的の辺に就て云ふは、道徳感
 とも名くべし。
 上東陸一如く感性の辺に就て云
 へば善悪の褒貶は一種特別の快不
 快の

大日本美術會藏書

良心の知
辨別力
の
別

感別にして之を名けて道德感と云ふ。その復駁には感性的の一面のみならず、又知識の辺ありと明あり。一の事を善と云ふ、又一の事を悪と云ふには、特殊あり快不快の感のみならず、其事を善又悪と見わくる知力上の判別あり。右の感覚に伴隨して（寧ろそれと結合して）強と相離し難き一團伴をあり居たり。此知力上の判別を表すには、善悪不可語の外に正邪等の語あり。蓋し一の事も正と云ふ、又一の事も邪と云ふ時は、道德的感別の辺に就いて云ふよりも寧ろ道德的識別の辺に就いて云ふが如くに思はる。此識別は（今云へり）如く）感別と相密着し居れるものにして、一の事物に対して此両様の作用を察起すもの前後は強と辨別すべからず、先づ感別して而して後に識別すべし、將た先づ識別して而して後に感別するが吾人現在の心の識に於ては必か孰れを前孰れを後と定むるを得ず。惟ふに一の事を善と見て、其道德上の性質を認識

判別ありとを指すのみ。如何なる善悪を善又正と云ふか。如何なる善悪を悪又邪と云ふか。如何なる善悪を善又正と云ふか。如何なる善悪を悪又邪と云ふか。如何なる善悪を善又正と云ふか。如何なる善悪を悪又邪と云ふか。

了るには、道德的と名く、一種の快感を感じたことが指導となりて右の認識
 を来すともあるあらん然れども又一の行為の道德上の性質を認識すべ
 が其行為に對する道德感を惹き起すともあるあらん畢竟するに感別と識
 別の前後を分たんは無用の業あり。寧ろ同一の事柄に吾人の感性の辺を
 以て接すれば善悪の感別とあり、知性の辺を以て接すれば善悪の識別とあ
 り。過かすして、敢て別物に對して發すものにあらず、又必ず前後を為し
 て發すものにあらずと云ふを勝りとする。感別と識別との相分離し難き
 は、密に良心の作用に於てのみ然るに、あらざして一般の吾人の心的作用に
 於て然りとも。概ね吾人の心的作用に於て知識の辺と感情の辺との参差和
 合して働くを見れば、良心の作用に於て兩者の相密着して殆ど一團融とふ
 り居るを見るも毫も怪むに足らざるなり。今比喻を以て云はば、善悪の褒貶
 と名く、一種の判別は識別と感別とをあげあへり一條の繩に似たりと云
 ふを得べし。

以上の陳述に於れば、決行前に於ける良心の作用には少くとも二種の差別

* * * * *

善惡の心
機と善
悪の別
上の順序

すべし詠ありと見し。一は義務の心識言を換ふれば義務の衝動と善惡の
 別と識別とにあり。更に此善惡の判別を分析すれば善惡の感
 而して此感別の識別と
 の同らみあり又義務
 の心識と善惡の復返と
 の同らも甚だ密接あり
 関係ありて多くの場合
 に於ては致と前後を分
 ち難日一團餅とありて
 心識に現し来たふり然
 此ども凡ての場合に
 於て必ずしも共に同業
 の強さ又同業の明らあり
 上の感別の識別と
 上に陳したる所に
 於ては亦これと同様あり二様の要素を區別し得
 らざらずの同らものあらん成程一の事を云は
 ナラ又と云ふ又一の事を云ふナラ又と云ふは
 一種の判別には相違なし而して判別したる以上は
 一は感別あり手摺の判別あり手と向ふを得ふ
 らん且又してハナラ又セ子ナラ又と云ふ心識
 を名けて義務の念又は義務の思と云ふ得しと見
 此れを或は知識の作用或は感情の作用と見做
 べきを得るか如くも此ども猶ほ一層深く他人の
 心識に立入りて考ふれば右義務の心識は純粋なり

大日本女學會原稿

止的 心識を 浮ぶる 方強	シテハナラヌト云ふ禁	感を浮ぶるよりも寧ろ	善悪に對して快不快の	如きに於ては其行の	て走らんとす了貪者の	上に云ふ財婁を懐に	からぬ場合あり。例一は	を褒貶才了心識の善	が最も善しくして善悪	禁止的又獎勵的心識	子ハナラヌと云ふ義務	らホシテハナラヌ又七	才を以て現すにハあ
開陳す る所以 ては在 義務の 心識を ば識別 言しく	ル心も免に角有り現在の心識に存在す事相を	ほ一步を進めてそのを分析説明し得るかも知れず	て心識の執着を論究したる程に於ては或は猶	て各名物を附したる方適當あらん此義務の衝動	ましくは其混合件を名けずして別に義務の衝動	お了性質を表出せんに依て之を感別若しくは識別	覺て云ふは敢て不都合ありに似た心も其特殊	むり此衝動を名けて極く廣き意味にて一種の感	受身とよりて感ずる快不快の感とは同じからず	一種の衝動あり。此衝動は外物に接して此方が	ハナラヌと云ふ特殊心識(即ち内より發したる)	あらぶるを明あり。右の心識に固有する所は七子	る知力の判別にあらぶる又單に被動的感懐に

大日本女學會編輯

決行後の作用

く且明かあら人。之と異りて兄弟相知し朋友相

は感別と名けずして之に衝動して別の名を附す。是を至当と考へるあり。

親むか如き行為は彼の所謂の義務の聲所謂の良心の余念を聽いて為すよ

りも寧ろ（多くの人に於ては）其事をヨシとして嘉みずる心あり為す

あり人。此の如く善悪の褒貶の心識が最も著き場合とシテハナラ又セ子バ

ナラ又と云ふ心識の最も著き場合とはそれと之を全く相離して明瞭に其

向の前後を立てて人は至て難し併し強ひて前後を立てると欲せば或点又或

場合に於ては善悪の判別（識別又は感別）を先と見て義務の心識を後と

見ても可なりが如し。何と云へば日常の言談に據るにヨイ事はセ子バナラ

又と云ふは極く自然に聞中水とセ子バナラ又事はヨイと云ふは多少奇

異に聞中す気味あり能はればあり。

決行前の良心の作用は今迄陳したる所の如くあるが決行後の作用は主として感情の働きより成りしが如し。次に其特殊の趣を附陳せん。

決行前に於て義務の心識として現はるゝものに追従して決行後に於て是

大日本女學會原稿紙

良心の平安
及悔悟

り来り作用は、其義務を果し或は果さずと云ふ心識に伴ふ所の一種の快不
 快の感あり。義務を果したる心識に伴ふ快感を良心の嘉賞又は良心の平安
 と名く。又対の心識に伴ふ不快感を良心の苦悩又は其不安と名く。此良心の
 平安又不安は或る人々に取りては、常に他の諸の快樂又他の諸の苦痛を得
 て代る可らざる特殊の趣を有するのみならずまた得て及ぶ可らざる力を
 有てり。よし白又とくより水火を踏むとも、我良心の平安には代へ難しと思
 ふ者あり。如何なる富貴も如何なる名譽も如何なる快樂も以て我胸中の蟻
 了良心の苦悩を匿すに足らざると感ずる者あり。良心の苦悩は其軽き段
 階に於ては「すまぬを為せし」と云ふ語にて表はし、漸々其重きを加ふ
 るに從ひ「良心に耻づる」「良心に咎めらるる」「良心に責めらるる」
 などの語にて表はす。又此苦悩の心地に加へて復々として再び其事をせじとの
 決心を生ずる時は、之を悔悟と名く。然れども既に悔悟に至れば最早普通謂
 ふ良心の作用の範囲を脱し居るか如し。惟ちに良心の作用は悔悟に至り迄
 の心識に属するものにして、其作用の範囲の内、復々と再びせじと云ふ決

大日本女學會原編註

良心の不安

心とも含有とは云ひ難かき事し。

良心の不安
原情
思ふ

良心の不安又不安と名くするものは、他人の毀譽により或は有権者の施す賞罰によりて生ずる不快の感と同一視すべきものにあらざる。但し之と相伴ひて存するものはあらん。然れども其性質の上にては決して相混同すべきものにあらざる。現在の心識にては義務の衝動を覺ゆる外部の威力に束縛せらるゝとの間には、判然たる差別の存する如く、義務を果し或は果さずと云ふ心識に伴ふ快感又苦感と、外部の威力を以て賞罰せらるゝより生ずる快感又苦感との間にも、同じく判然たる差別の存するあり。即ち義務を怠りて(良心に依りて)感ずる不快感はその義務の怠りを此世若しくは来世に於て罰せらるゝとあらんと想像して感ずる不快感と相混同すべきものにあらず。故に世若しくは来世に於て有権者より罰せらるゝことを豫期して覺ゆる所の不安のものは、通常恐怖の感情と名くするものにして、此恐怖の感情は良心の苦感若しくは不安と名くするものと相伴ひて存する事は或はあらんも其性質に於ては決して混同すべ

良心の不安

良心の不安
良心の不安

きものにあらず。蓋し義務てきもの
 識す以上は義務を果し或は果さざるより生ずる快不快の感をも亦外部
 の威力を怖るより生ずる快不快の感とは別あるものとして心識するは
 當然なるばかり。要するに義務て小心識の源泉に就いて云へば兎も角も現
 在の心識に於ては右二種の快不快の感は全く別種のものとして現し来る
 あり。故に良心の起原を探求するは外部より来る賞罰を豫期する希望若し
 くは恐怖の感情の起原を探求するにばあらずして此希望又恐怖とは全く
 異なる（換言すれば現在心識に於ては全く相離して存在し得る）快不
 快の感即ちレハナラヌセリハナラヌと云ふ心識に基ける快不快感の起
 原を探求するあり。されば現在の心識に存する事柄の間隙を旨とする所に
 いては良心の平安を説明して義務を果したるより生ずる快感なりと云ふ
 を以て是れなりとす。若し猶ほ語を換へて此快感を説明するに要あらば束縛
 を脱したる自由の心地に伴ふ快感若しくは衝動を満足せしめたる心識に
 伴ふ快感と云ふを得べし。然れども義務の束縛又義務の衝動の一種特別な

大日本女子會館蔵
 大日本女子會館蔵

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

法行後の良
心作用に於
ける善悪の
意識に於て
有る快感
道徳感

不悦
不快

る如く、その束縛を脱離し又その衝動を満足せしむるによりて生ずる快感も亦そのづから一種特別のものたるあり故に上に以て快感を名けて特に良心の平安とは云ひしあり。

右陣ぶる所によりて見れば、決行後に於ては善悪を果し或は果さずと云ふ意識に伴ふ快不快の感ありて之を良心作用の一部分と見做すべきを明あらんが、決行後の良心作用は之に止まらざして之と混同され易き（實際之を混同する學者も少からず）別の快不快の感の存するあり。予が上巻良心作用の特質として陳べたる所を解せし者は、此決行後の作用の第一の部分が何たるかは、容易く察知し得るありん。即ち此は善悪の褒貶より生じ来る感覚に外ならず。決行前に於て良心の作用に善悪の意識と善悪の褒貶との二部分ありし如く、決行後に於ても亦善悪を果し或は果さずと云ふ意識に伴ふ快不快の感と善悪の行為を褒貶するより生ずる（寧ろそれを含む存する居る）快不快の感との二部分あり。此決行後の第一の部分は第一の部分が等しく専ら感情の作用にして、此は決行前の善悪の褒貶に存する

道徳的快不快感
と美の
との軽微

快不快の感（即ち道徳的感）別種あるものにはあらず。但し決行前に於ては其快不快感が未だ想像の中にある行為に対して生ずると。決行後に於ては其行為の既に成就したるものに対して生ずると。其差別あるのみ。故て其快不快感の種類に於て別あるにあらざり。蓋し我が時に為さんとす。善悪の行為に対して感ずる快不快の感と。又我が既に為したる善悪の行為に対して感ずる快不快の感とのみが同一種あるにあらざり。他人の為さんとす。又は為したる善悪の行為に対して我が感ずる快不快の感も亦其種類に於ては右二者と同一なり。此三者の間に強弱の差別あるを云ふ。種類に於ては右二者と同一なり。此三者の間に強弱の差別あるを云ふ。於ては美別のあるを見かざり。

右道徳的快不快感か自他の差別又決行の前後の差別によりて相異する所あり。其の証は藝術感を以て譬ふを得べし。蓋し彫刻師がみづから神々の像に對して已が覺ゆる快感とは美を樂むの点に於ては全く同一なり。又我想像の中にある神々の像を觀して得る樂みと既に彫刻したる神々の像を觀して得る樂みとの間に藝術感として其種類に毫も相異なる点ありを見か

大日本女子會館蔵

良心
平不
中道
底と
思ふ

良心の平不
中道
底と
思ふ

但た事物に對する感情と想像に對する感情とは其間にかうづから強弱
 區別はあつたらん。又我成就したる彫刻に對する感情には我力のそれを成就
 するに定れりしを悦ぶ等々種々の感想の打錐り居りて他人の成就したる
 もり又我未だ成就せざるものに對する感情とはかのづから別あつて趣もあ
 るふらん。然れどもは唯だ醇乎たる美術感の外に我能を悦ぶ等々の感
 想を加はり居るが故なり。神女の像を觀して得る醇乎たる美術感そのもの
 に於て美譽の存するにあらざるなり。今陳べし美術感と相似て、道德感
 も亦善と嘉し惡を惡むの点に於ては其感の他人の行為に對して生かると
 自身の行為に對して生かるとの別なく、又其行為の決行の前ふると決行の
 後ふるとの別なく、皆同一種のものと見做すべきなり。

右説明したる所の決行後に於て善惡の行為に對して發する道德的快不快
 感は善惡を果し或は果さざると云ふ心識に追従して生かす快不快感と動も
 すれば混同さるし、傾かれども、或は決して混同すべきものにあらす。其混
 同さる可らざるの理由は、後者は善惡を一種の衝動に追従して生かすも

大日本美術會報

の前者は善悪の判別に包含され居るものありし一事に於りても明らる人
 且又上に論せし如く善悪の判別に包含され居る快不快感（即ち道德感）
 は自身の行為たり又他人の行為たるの差別なく総して行為の善悪に對し
 て發する感性の作用なりとも、善惡を果し果さず云々心識に伴ふ快不快
 感は、自身が善惡を果し或は果さざりし時にのみ限る心識あり。固より他
 人が善惡を果し又は果さざりしを見て、彼の人には良心の平安を覺え居るふ
 ん又は不安を覺え居るふ人と想像する事はありとは又想像に止ま
 りて、我身に實際良心の平安若しくは其不安を覺え居るにはあらず。其人と
 相識り相親むとの厚きに從ひ、その人が良心の苦悩を感ずるを見て、その為
 に痛みその為の同情を表す事は或は切あらずべき也。此同情より生ずる所
 の苦痛は、我自ら道德の罪人とありしを覺えて感ずる所の苦痛と決して同
 一視さすべからず。蓋し善惡を果さずして覺ゆる不快の感は、其道
 徳上の過が自身に存する時にのみ限るものあり。今陳述せし所以よ
 りて、善惡を果し又は果さず云々心識に從つる快不快感と、自他の行為

大日本女學會編輯

良心作用の動機
し別行

の善悪に對して發する快不快感とは殊別のものなりを明せらる。然しおが
ら又共に等しく良心の作用と見ると、決行後に於ける良心の
作用は即ち此二様の感より成りしと知すべし。

上東開陳したる所に於ては、通常良心の作用と名くすものには、善悪の褒貶
と義務の心識とありて、前者は決行前に於ては識別と感別とより成り決行
後に於ては專ら感別として存在す。後者は決行前に於てはセ子バナラ又と云
ふ一稱の衝動として現し、決行後に於ては良心の平安又不安と名くす一稱
の感情として現すなり。尚ほ少しく他の方面よりして良心作用の性質を
明にせん。善の動機、其作用の對境たる行為の辺に就いて見ると、要す固より茲に
は如何なる行為を善とし如何なるを惡とすかの間に答ふる必要あり。
然れども吾人の作動の多量の中に如何なる作動に對しては良心として作用
を發し如何なる作動に對しては之を發せざるかを云ふ。而夫は一応論じ置
く必要ありと信ず。併し吾人の行為をよもりを分析して、動機并意趣の何れ
を明にし、又其動機并意趣と良心の作用との關係を詳にすは、一面心理

大日本女子會原稿紙

カントの
道徳感

學に属する研究にして又頗る複雑なる陳述を要するものあれば之を如何に掃きかきして從に附録として掲ぐべきか所見を詳に世人には必ず其附録に就いて見るを要す。

右良心作用の都合として掲げた善悪に対する快不快の感 ~~は~~ 又再考を果さずと云ふ心識より生ずる快不快の感に就いては、猶少しく陳述すべき

とあり。カントは其所謂の道徳感 (ダスマラーリシエ、ゲフュール) と良心

を區別して曰く、良心は古人が道徳の法則に據する毎に古人に再聲を掲

げて之に順ずる ~~ハ~~ (ハムテレンシエ、タイ

と允し之に逆する ~~ハ~~ (ト身七冊二頁三四頁) と見よ。カントが道徳感に就いて云

ふふを允さば ~~ハ~~ 小所其他所々に散見せり。彼此対照するに、其言全く相同し

了實踐的理性 ~~ハ~~ とは云ふ可らず、例へば今引用したる所と「クリライク、テ

の謂ふ、而し ~~ハ~~ ル、プラクテイシエン、ツエ、ル、又、ハム、ト、セ、ナ、ハ、十、頁、又

て道徳感 ~~ハ~~ 否 ~~ハ~~ 人十頁、五頁 (ハム、テ、レン、シエ、タイ、ノ、身、五、冊) とを對比すべ

人の行為が道 ~~ハ~~ し併し此等カントに就いては、猶ほましくは茲に云はばして可からず。

大日本女子學會原稿紙

カント
道徳感
見よ

徳の法則に合し、是しは及すと云ふの心識(蓋し他の合子を交えたる此
 詭辯の心識)より生かす所の快楽しは不快の感を覺ゆるの性能ありと
 さればカントが道德感の名けて良心より區別するものは取りと直すと予
 輩が嚮に良心の中を收めたるものあり。是れたい良心と云語の意義を感は
 廣く或は狭く用ふるの別あるのみにて孰れに用ゆるも各人の勝手なり
 似たれども、通常の言語の指示に従ふカントの所謂道德感あり者も矢張
 り良心の作用中に含まるべきものと思はる。蓋し通常の言語に於て然るの
 みならず倫理學者の口中には快不快の感を以て良心作用の主要の部分とさ
 し思ふ者あり。蓋し此快不快の感は良心作用の他の部分と察着和合して殆
 と一斜を為すが如きの觀あるは良心の作用中其快不快の感の辺と義務の
 衝動の辺とを區別せずして、只其一方をのみ挙げて他を全く省き去るは
 は暗に含め置く學者も少ふあるが如し然れども、その如く義務の衝動
 (即ちカントの語を用ふれば蓋し感の理性が吾人の義務を擧ぐるの心識)と
 良心の作用に含ませざるは快不快の感(即ち義務を省し或は是をさるより

大日本女學會原稿紙

良心作用
道德感

生ずる快不快感又善悪の褒貶を以て表はす快不快感(これを混同して
 其間の善も美別を以てするは通常の言語の指示に合せる者にあらず。又假
 下右兩者を差別するもこれを全く引き離してその一方をのみ良心の作用と
 考ふことも通常の言語の指示に合せるもの云ふ可らざる。カントが其所謂す
 道德感と良心の作用と見做さざれば惟わに其學說の所定に従ひ快不快
 の感と全く德行の動機と除き去らんと力めたるにふらんと然水必も
 吾人の德行の動機は其如くに感情の分子より離別し得べしものにあらず。
 又成すべくを離別せんとて全く快不快の感を良心の作用より除き去ら
 んとすは是れ寧ろ良心を小意義と無理に限縮せしむるにて予輩が通常
 良心と名くするものは決してその如くに限縮せしめたる意義にあらずと考
 ふ。蓋しその如くに全く快不快の感を除き去らば彼の良心の平安又は不安
 又は良心に責めらるる事とて不誣は更に意味ありものとなりしらん。

然らば則ち、
 自ら見よ、予輩が道德感と名くするものとかントの所
 謂道德感とは全く同一の意義にはあらずと知べし。

道德感
謂道德感とは全く同一の意義にはあらずと知べし。

大日本書局出版

仁愛の正義

と名付られたもの (即ち善悪に對する快不快の感) を良心作用の一部分と見做すは決して不当の事にあらず。却て吾人が常の識に合せたの見と云はざり可らず。此道徳感の對境たる善悪の何なるかは予か茲に論ずるを要せざり所ならず。然れども猶ほ更に良心作用の性質を明にせんが爲に通常一般に正事善行と見做すこと、行爲を擧げて少しく説明を爲す所あらんとす。夫れ世間一般に善行正事と見做す行爲を何ぞと同仁愛は公義を指さざるものからん。今仁愛を一の行爲として見ば人の安寧幸福を來さんとの欲求意思を來すの行を云ひ之を心様として見ば人の安寧幸福を來さんとの欲求意思あり心の趣を云ふ。今又公義を一の行爲として見ば人の價值に於て其人を處するの行を云ひ之を口比安寧幸福を來すの語の意義不明瞭の所あるを免す。心根として見ば此行爲は此の語の意義不明瞭の所あるを免す。是も論じ及ぼすを得ざる故に姑く只此世間口實の趣を云ふ語を換ふれ用て了語を假り用ふのみ。

ば公義は安寧幸福の分

大日本女子會館

動機 社会的
徳感 道
差

動機 社会的
徳感と道徳
差との差別

配としてその宜しきを得せしむるものと云ふべし。而して此等（公義、仁愛）の行為又心様は共に道徳的判別の対象とありて、或は正呼ばれ或は善と呼ぶるものあり。されば仁愛、公義は之を心様とするも又行為とするも固より良心の作用と相混がべきものにあらざ。蓋し良心の作用は此仁愛又公義に善若しくは正なる性質を發見するにあり。良心あらば仁愛、公義を見し正事、善行と承認して、之に對して良心の識別又感別（即ち正善なる心識）を發すべし。然れども正善なる心識と仁愛の言とはおつづから別物なり。但し仁義に對しては常に正善なる心識を發する故に、通常の言語には仁義と言葉に既に正善なる意味を含み居り。即ち通常仁義と云へば人の安寧幸福を求むるも又之を宜しきに従つて分配すべし。蓋し善の好に正善なる善義をも含み居り。然れども此兩個の善義は決して同一のものにあらざるあり。

今云へば仁愛、公義に同じては又その動機とふる發達の感情ありて而して是は直接に且善く他人の善不善に同じるものあり。故に之を名けて社会的

大日本女子會館蔵

38

会的感情と云ふ。仁愛の行為と喚起したる最も著しい動機の一は同感（或は同
 情）の性名と云ふものあり。且又之と密接の関係を有する幾多の感情傾向
 のありありて同じく仁愛の行為を喚起する動機と云ふなり。又公義に關し
 てもその動機と云ふ感情ありて主として不義を矯めんとするの辺に現は
 了。例へば不義に對する忿怒の情の如し。然るに此等の感情の多きは予
 が上に謂ふ所の道德感（即ち美惡に對する快不快の感）も亦仁義の行為
 を喚起する一の動機と云ふなり。何と云ふれば仁義の行為に對してその美
 麗正ありて見て而して一種の快感を覺ゆれば其行為を促すに於て必ず多
 力の効力出さるべしなり。然れども固より此道德感と社会的感情とは限
 同べき者にあらざる。蓋し後者は仁義の行為に出づる同情等の感情に外なら
 ずして世に情深いと云ひ友を求むること云ふ如きは即ち此社会的仁愛的感
 情の發出したるものを云ふあり。然るに前者（即ち道德感）は仁愛の行為
 又此行為を促す所の仁愛的感情をよしとする心識にして仁愛的感情それ
 自身が良心の作用にほたらぬ言ひ換ふれば良心の作用は情深く感ずるに

*日*女*會*報*

37

入
了
一
日
同
題
了
。

Red ink scribbles and a circular stamp.

Handwritten text on the adjacent page, including the characters '入了' and '同日'.

本論の
困難と
希望

良心の起源

予嘗て見より倫理學の一難問たる良心の起源を尋究せんとす。その此難問の解釈如何にありては（亦くとも倫理學者中或者の考へた所にては）道徳の基礎と搖動せしめ人生の價值を一衰せしめて吾人の從來敬愛敬慕の信仰崇拝したりしものをば殆ど一片の夢想に属せしむるの殆どありしものなり。今日に至るまで明瞭確實毫も此難問を窺ふべからざる者ありしを見ず。吾倫理の難問多き中に於ては良心起源の問題ほど不朋不富多きはあらず。こゝにこそ明瞭確實精細なる考説の最も望ましくして而もその最も得難き難問少からず。惟よに哲學宗教上の高遠深遠なる問題は多くは此類のものなり。此等の問題は一個人が一時に全く解釈し了すを得ずとす。すも、若し我々分ることもその問題の性質を明かにし其解釈に至る途を明し又其問題に於て應に難所と見べき点をだに指定すを得ず。討究苦心の功は決して空しからずと云ひつべし。蓋し其功の空しと云ふ可

良心の起源

大日本學會編輯部

分折
明と感
力説と
の無致

39

らざりのみならず若し精思熟考以て後々此れ同題の蘊奥を究めば其解説
も察見し得むの望あふがち無きには限らざればし予輩は今以て望を懐いて
良心の託象に論し入りしと欲するあり。

「前論」に於て陳述したる所によりて良心なるもの、只れ知若しく
は情一辺の作用にのみ属せざることば明らる。又此美悪の判別は一方より

見れば感別、又一方より見れば識別にし、知力と感情との作用の密に相結
合し居るものなる故に之を感情にて免れず、識別にも云へり。又義

務の衝動の辺より見れば良心は判別感情の作用に止まらざりて、発動的作
用即ち意思的作用とも含み居り、而して斯の如くに良心の作用に於て知

情意の相結合して其動を表現するを、毫も異しむに足らざれば既に前に
も云へるが如し、素と知識と云ふ感情と云ふ意思と云ふ、只だ便利の爲めに

心性作用の異別の辺を掲げてそれらに附したる名称に過ぎざり、故に別々に
存在するものをば指して云ふにあらざり。故に知力の作用と名くするものも概

ねそれら感分の感情の伴はぬは、又意思の作用と名くするものも知識又

大日本女學會原稿

51

分析の心
知の心
情の心
意の心
徳の心

感情の作用と相分離して存するに	あらず。故に良心と心識の如く複	雑高き心の現象に於ては、知情意の相結合し居りて其中一方の作用にのみ其心識を歸すべからざるは勿論の事と謂つべし。且又固より知情意の外に於て良心の作用を求むべきにあらざる。蓋し良心は極く簡單に言へば	道德的心識とも名け得べくして吾人が心の全体的作用(即ち知情意より成りし作用)に外ならずあり。然し今云ふ如く良心の作用を分析して知情意の三者とすも、それは實に良心の起原の説明と云ふべきものにあらざる。只に良心は心の全体的作用ありと云ふの意に過かす。故に良心の起原を論ずるに當りて、その作用を	用を知情意に分析し	得るべき事を以て、その	の起原を探求し得られ	りと思ふは甚しき謬
蓋し此は做りに通常の心理學に用	ふる知情意の類に從ふ。		蓋し道德的心識と云ふは、善と云ふ又為すべし。蓋し此は	しと云ふ個々の事柄を包みて云ふにあらざる。只に其	事柄を善なりとし又為すべしとする心識をのみか指	して云ふあり。故に良心と道德的心識とを要語同義	として用ひし如く皆此意と知すべし。

大日本女學會編輯部

(別り)

見あり。又之に及してその如くに分し得べからずと思ひて知情意の外に
 猶ほ一種特別あり不可思議なる心の能力ありとせば良心の託言を説明
 し得べからずと考へると均しく認めあり。要するに心の力の能力差しくは
 彼の能力に良心の作用を帰すと其作用の由て集る託言を説明すととは
 決して同一の事にあらざるあり。
 凡そ心の能力とは如何あるものを云ふかこの事は甚だ空漠の議論に陥り
 易き問題にして畢竟あるに吾人に心的作用の存するを見て其作用を託す
 には吾人の心に託す能力あるべからず。又その作用の性質の相異する
 べからずを託す能力も亦相異するべからずと臆測するに過かす。眞實
 心の能力の何れかは心射その物の何れかを知らざる限りは恐らくは説
 明し得べからざる問題あらん。故に良心て小ものは心の一種單獨の能力と
 見做すべし。か時れ教個の能力の協同の働と見做すべし。かの問題は假し如
 何程茲に改定すとも良心の託言の説明に取りては益ありと考ふべきあり。
 今良心をば道德的心識(即ち善習の念并善惡の判別に現る)全心の作用

大日本女學會原稿

82

良心作用
発現の
時期と
其變遷

此見做す時は其作用の現るゝ様ゆへての時又凡ての如に於て全く一
 定不變のものありぬは云ふまでもあり。吾人の成長したる言の心識に於て
 は他人の所有物を盗むを見て直に之を悪しきと感知し爲すまじき事と
 認すべし。或は成長したる心識に於て斯くあると云ふまでにて直に以て
 一個人又人類の最初の心識に於てもその如くありきとは論ず可らず。近く
 吾人孰もか自身又他人に就いて實視す所によりても良心の作用は心識
 全鮮の發達に連れて多少の變遷を経過し行くも又吾人の生れ始よりし
 て既に其の如き作用の存し居らざれば明らる。良心の作用を現すは、
 他人の自己との關係を知り有意識の行為の何たるを自
 ら意識し他人の心情を意向を推知想像し得る上の事あらざればならず。故
 に其作用の性質より見ても心性諸般の能力が或程度に迄發達せざる限り
 は其作用を現し能はざりし事勿論なり。故に又假し良心の起原を論して良
 心一個人として見れば人類全種の様々の経験によりて生記したるものにあら
 ず、吾人各々の生來具有し居るものありと云ふ得とすも吾人の生れし後

附録
 見よ 191 頁を

の有様に於て既にその作用を具一居ルりとの意味にては函か云ひ得が了
 事明あらん少しく嬰児の心的作用に注目すとの決してその如き意味
 にて良心性具の説を主張せがすべし。良心は吾人の心的作用の或程度に
 迄発達したる後に於て初めて現はすものありし事は誰れ彼も承認すべし
 いと見易き事実あらん而して又その現はれたる後に於ても決して一定不
 変の有様に存せがして種々様々たる社会の境遇に接して變化発達し行く
 者ありし事も敢て拒むべき理由ありしを見ず。如何にして吾人は孝行を善きも
 の為すべし。正家盜を悪しきもの為す可らばが事と知りたるかとは生
 れるがらにして知れりにはあらす。先づ師父の教訓朋友の褒貶を待つて知
 れるあり。諺に云ふ朱に交はれば赤くふる。吾人は幼稚の時よりして常に接
 近する事物の如何に拘らざして全く不羈獨立に發育成長するものなら
 ば。現に生れ落つた社会の如何に從つて吾人の道德的意識の程度又其状態
 (評に云へば其意識の強弱又其意識の附着する事柄)を要するは廣
 く古今東西開未開の人情風俗を見れば歴々として予輩の眼前に迫る事實

***大妻會館蔵

43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

良心を
社会の
良心を
社会の

良心は
社会の
良心を
社会の
造物が

あり。 然らば即ち吾人
 人が良心の名 くにわかれは吾
 人の生活の境遇に 社会によりて製造し出されたるものにはあらざり
 吾人が良心の作用を 善くしたものには、外界より吾人の心に印したる痕跡は
 あらざり。 所謂の良心なるものは、^た客観界の一部を以て存在する社会
 の如何に吾人の 習慣の如何にのみよりて説明し得べし。 何れ
 はあらざり。 所謂の良心なるものは、^た客観界の一部を以て存在する社会
 正邪の判別) は社会の風俗習慣制度法律と共に変化し行きて其の
 特殊の淵源根柢を有せざる者にはあらざり。 是れ良心の起源を論ずるに
 当りて必ず先づ起り来べき疑問あり。 現にその如くに考へて良心の起源
 を説明し得べしと思ふ学者も少からず。
 良心は 社会の製造物よりては (右陳べたる道徳的意識の变化の事趣あり)

相子注

此脚註亦同くせよといふ。

單に社
今に律
まほ不
常假
定の標
見也

良心の
作用

見れば(恐くはその起原に因ずる最も思ひ付き易き説明にして而して又
 之を以て(今云ひし如く)充分なる説明と信ずるもの少からず、更に
 深く其問題の要点に立入りて考へれば決してその如くに無造作に説き去
 るべき者にあらざるを知らん。
 抑も各個人の良心をば社会の風俗法律の印象と見て、以て其起原を説明し
 得たりと考へるは、一見直らしく見ゆる所なきにあらざれども、その爾を見
 たる所あるは、但たその説明すべき事柄をば説明はせで窮に假定し居るが
 故なり。蓋し其謂ふ社会の褒貶、風俗制度、法律は良心の存在に先ちて存在す
 るものにあらざして、却て既に良心の作用を假定し、既に善悪正邪の差別を
 含有し居るものなり。師父が其子孫に教訓する所は、師父自身が既に
 己れの良心によりて善又は悪と認め居る事柄をば、綜合してその教訓によ
 りて子孫の心に良心の作用を發託したりとするも、是は決して良心の作用
 の末に全く存せざるものによりて良心の作用を惹き起したるにはあらず。
 今日社会に存在する風俗法律は、既にその物自ら其善の差別、良心の作

★日本女子會館蔵

如る外
思の力
良心の
作用

用の結果おれ、之を以て良心の起原を説明せんとするは取りも直さず説
明すべき事柄を既に假定し居るものあり。故に今日の社会に存在する風
習より良心を取り出し来すは手品師が手品の種を隠し置けり痛の中よ
り筆も提燈を取り出し来すに似たり。

然一は別、良心の起原を今日存在する所の社会の風俗習慣制度法律に帰
して而してそれと以て其起原を説明し得たりと考ふは思はざるの甚し
き事なり。従令に今日社会に生れ落つて個々人の良心は單に社会の養育又先

輩の教訓によりて生じ来るとするも其社会の養育に合^まり居る善悪の區
別又其先輩の教訓によりて発表する(先輩自身の)良心の作用は如何
にして生じたりしかと尋ねおくべからず一社会よりその前の社会に溯り

先輩の心識より其又先輩の心識に溯りて良心の極初の起原を尋ねば遂に
如何なる外因の影響にその原始の發生を帰すべき乎如何なる外因の力
良心の作用を毫も假定せしが外因の力(吾人の胸中に良心てふ一種の

心識を喚起し来りたる乎其の予輩の須らく茲に呈出すべき問題あり。

大日本教育會原稿

外界に
迫るに
苦樂
の
説

（別）

良心の作用を既に包含し居る正義仁愛の念を外に—又此念が或人と（セ
 に所謂善人仁者）の上に有する強大の力を好にしては、何者が最も吾人
 に近く最も吾人に親しく最も吾人を動かし最も吾人を左右するに足るか
 と尋ねれば、怒くは異口同一の答を得る。曰く苦痛と快樂と是れあり
 と。天然は吾人を苦樂する二個の君主の下に置けりと彼らでしかんが其有
 名ふる著書の冒頭に云ひ—如く苦樂はど^事べてこの人を動かす力ある者は
 ありが苦痛のあり知人之を避けんことせむはよく快樂の存する知人之に
 就かんことせむはよし。故に一の行為を勧めんと欲せば、それに快樂を伴隨
 せしむるに若くはよく、一の動作を禁せんこと欲せば、それに苦痛を附纏せし
 むるに若くはよし。嘗て訓は是れ實に長上の權威社会の制裁に依りて成る
 る所以にして、而して嘗て訓の依りて成る所以は畢竟その個々の人の快
 樂苦痛に訴ふるが故^らがや。何故に苦は避くべ^り
 何故に樂は追ふべきか吾人は敢て其理由を問
 はず其説明を求めずして自然にそれを避くべく自

「フリシブルス、オ
 が、モーラリス、^紅レド、レ
 ラス、レ、レ、^レン

大日本女學會出版部

五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

其得法

然にそを追々べき者ともす也。此れ苦學の影響す所跡の如くあると
 見れば、今良心が故は善あり為すべしと念し、彼は悪あり為すべからずと命
 ずるも、畢竟そのに曾て外界の強迫力によりて苦痛を負はせられし、知は之
 を避け、快樂を興へられし、知は之に就きたる経路の結果とは見做し得べ
 らが、手即ち外界より苦痛と快樂とを以て強迫せられたるをの結果とし
 て良心の起原を説明し得らざれば、手捕は委しく此疑問の意味を左に開
 陳せん。

試に一々兎にその極く知時よりして一事情を為すべからずと命し、而
 して若し其命を守らざる時は、必か之を罰し、又一事情を為せと命し、而
 して若し其命を守りたる時は、之を賞する事とし、多年を經過すと想像せ
 る。よその如き仕附の下にある、兎は習慣浸染の久しき、遂に一事情と苦痛と、
 又一事情と快樂との間に離す可らざる関係を作り、彼に實際賞罰を受け
 たる場合にも、只だ其事情を想像するばかりにても、既にその事情に曾て伴
 隨せし快樂若しくは苦痛を消ふるに至るべし。是れ即ち習慣又聯想の作用

大日本女學會原稿

お し 場 合	加 へ ら れ	も 當 罰 と	よ り て 毫	の 威 力 に	宣 傳 外 界	の み に て	儀 し た 了	を 只 如 想	一 の 事 柄	斯 の 如 く	り 而 し て	お し 所 に	の 然 ら し
て 忠 孝 信 義 そ の も り を 快 し と 思 ひ の 物 み つ か ら に 慕 む 求 む	励 み て 快 し と 思 ひ た 了 者 が 後 に は 習 慣 と 聯 想 の 作 用 に よ り	水 中 間 に 寝 ゆ ら れ て 種 々 便 益 を 得 た が 故 に 忠 孝 信 義 の 行 を	も 奴 の 如 く (或 學 者 の 考 へ た 所 に て は) 元 と は 只 如 長 上 に 當 せ ら	了 故 に 金 錢 を 金 錢 の 為 に 蓄 積 す る 守 銭 奴 の 如 く に 至 る に 至 る	も 否 金 の 正 を 思 ひ た 了 ば か り に て も 嬉 し い 心 地 を 生 か す に 至 る	金 錢 に 伴 隨 せ し む に 至 る 遂 に は 金 の 顔 を 見 た 了 ば か り に て	金 錢 に よ り て 購 ひ 得 る 物 品 に 伴 隨 せ し 快 樂 を 得 ば 後 に は 直 接 に	し 得 了 故 に 金 錢 の 快 樂 と の 間 に 密 接 な 了 同 様 を 生 じ て 元 と は	置 く 而 し て 金 錢 を 得 る は 其 結 果 と し て 毎 日 種 々 の 快 樂 を 享 受	品 位 地 名 譽 權 勢 等 を 獲 得 し 居 座 の 五 便 と し て 吾 人 は 之 に 價 値 を	謂 ふ 食 へ り せ ば 飲 め り さ む る 者 と し て 吾 人 は 之 に 快 樂 を 與 ふ る 物	の 壁 あり 元 と 金 錢 の 物 品 が 吾 人 に 愉 快 を 與 ふ る に あ ら ず 所	此 作 用 の 説 明 と し て 改 と 定 例 の 如 く に 引 か る は 守 銭 奴

種子性善 亦自ら見合はせりて他大なる也!

以也早也
この借値ありと思ふに至る。即ち吾人は斯くして遂に徳を徳の

を何と
吾れを才に至るふりと云ふ。

ふく気味わろく又は心地よく感ずる様にあらば是れ即ち一の事を見てか

ろしとし又一の事を見てよしとす良心の作用の既に発現したるものに

はあらば手例へば他人の物を盗みたる時には必か外辱の威力を以て罰

せらるゝ事と定まり居らば遂には只た盗むと云ふ事を心に思ひ浮べたる

ゆかりにても最近發覺せしむれば伴隨し●註疏したる苦痛が託體の中に相

待ひ相合し来りて何と云く竊盗を心より感ずるに至らば守り又

現に竊盗を爲したる時には縦令に實際之を罰せられおる場合にも矢張り

何と云く心地わろく感じ又後れ之を罰せらるゝ氣遣のあり場合にも矢張り

り何と云く恐ろしく感ずるは至らば守り又外より来り居迫り力あり時に

も以前の強迫の結果として心中かたがから一の事を爲し又一の事を爲さ

ざり様は強迫さざり如き心地ありは至らば守り即ち吾人が今は當罰に

拘らば只た良心の作用によりて一の事を善業くは悪と感知するの心持也

大日本実業會館蔵

外界の
良心の
作用

畢竟すに、懲罰によりて受けたる快楽又苦痛を暗に認識するの心識には
 あり、その手、壁にて云はれ、その快楽苦痛の経験の痕跡を、影法師の如き
 のにはあらわらず。吾人が今良心の命令義務の強迫と名くても、元と好
 悪の強力をより受けたる強迫の痕跡が猶ほ今も或事柄に伴隨して存在せ
 るにはあらわらず。今は外界の強迫と直接の關係を覺るが故に自らかみ
 つからに蒙らしむる自由の強迫即ち所謂義務所謂良心の命令云々と思
 へ居るにはあらわらず。
 右の如く外界より苦痛と快楽とを以て押しつゝ、強迫の結果として果し
 て良心の起源を説明し得べき事。此れ外界より苦痛と快楽とを以て一個人
 の行為を禁止若しくは奨励するには種々の方法ありて、或は社会一般又は
 黨類朋輩の毀譽褒貶に成る社会的制裁あり、或は法律の力を以て生命身体
 自由財産の上に課する刑罰即ち法律的制裁あり、或は未來の當罰神佛の加
 護を信ずるによりて生ずる宗教的制裁あり。斯く種々の制裁は、此れと
 右の説明に従ひて、此等の制裁を以て良心の生じたる起源を見做し得るに

大日本女學會編輯部

は其制裁は留學意才に強者が只た己の威力を以て己の好むが俟に
 弱者に被ら才了強迫ふら才了べからず。若し強迫を施す強者にし已既に或
 分ありても善惡正邪の區別を感知してその區別の心識に従ひて我同強者
 しくは配下ふ了弱者。行為を禁止或は奨励し又之を禁止奨励せんが為に
 強迫を施し賞罰を加ふ了をふさばその賞罰を加ふ了小事の中心既に良
 心の作用を微定し居了た故に其に依りて良心の起原を説明し得たりと
 は云小可ら才了才了。か了が故に其の上に掲げたる考説を以て良心の起原
 を説明し得べしとせば其起原は全く強者が己の好む次第に（即ち我
 が好む^子り^外の目的標準なくして）弱者を壓制した了事に求め才了^可ら
 才。若し然ら才了其強者が己の好む（註し其小は自己の快樂）の外に
 行為の目的標準を承認して例へば公衆（狭く云へば一種^族）の幸福
 を以てその如き標準を見做して我が好むが為にはおら下、只た公衆の幸
 福幸福その物の為めに之を貴重すべきもの求めべきものと思はれ其べき
 と云ふも、其既に良心の作用を表示せ了ものこ云はが了可ら故に更

大日本女學會刊行

59

以考説は三種の見様

一人の考説

に溯つてそのべきと云ふもの起りを探求せよ。良心の起原を説明し得たりとは云ふ可らざるあり。其は上にも既に注意し置かれたる所なりが

再び茲に明瞭に置くの要あり考ふ。上に陳述したる良心の起原の考説に因りて猶ほ一ツ點に注意し置くべき

は其考説を二様に取り得べきなり。即ち一は覺も良心の痕跡を有様よりその良心が外界の仕附によりて生起發達し行くの順序次第をば全く一

個人の一生涯中に於て尋究説明し得べきと思惟し。又一は一個人の一生涯中に於ては良心發生の次第を説明する能はず。遠き祖先より久しき経歴も

種々重なりて之を子々孫々に遺傳し來りしを在り併せ考ふるを要すと思惟す。若し次第一の見様を取らば右の考説にては吾人の實驗する所のもの、

中説明し難き点あるを甚明なり。蓋し其考説の根柢を了瞭想又習慣の作用は、その影響する所隨う大ふすも中には相違おけ水也。若しその作用の

影響のみにて説明を試みんとせば、吾人が良心を心識を察知し始むるの時期は個人々々一生涯に取っては餘り早きに過ぐればなり。若し吾人が

大日本女學會原稿紙

43

此経不
能
去
也

希子に一七生れ落ちてより只此嘗罰のみを以て強迫され一小事と苦痛

と又一小事の快楽とを(習慣并願想の作用によりて)相結びつくりに至

子の経験にのみ止まらば(即ち是れ生れつき是れ善悪の心を發生す了遣

傳の性ふくば)決して数年間苦一とは十数年間に良心の作用(即ち嘗罰

に拘らわし或事を善と一為すてし或事を悪と一為すべからずとす

了心識)を生起し得べしと思はれは各假令か一生を費すも善一一個

人の経験す了所以かみ止まらば更に嘗罰を覺了しが心より善を善として

嘉みし悪を要として悪か心は恐くは生起し得からん然るに實際か児か

是亦善悪を判別して良心の作用を現す了の時期は意外に早くして單に十

児自身のみ)ペレス氏記して曰く漸く二歳にふりして児に於てすら

の経験によ)既ん本心を自著して是を見おかり非に就くの歡を發する聲

ルもわと)くべし例あるを見たりて氏女は母に告げられて悪くさ

は思はれか)を為す勿れと云はれし時一度おらず私には善い事か出来ぬ

了ふ)故に)標ん思はれしと云てしと云り此児五歳の時一日母に聲を

大日本女學會編輯部

55

各個人が只	ら此し折に	明	はまた	と	お	かさ	人の	善	が	あ	さ	る	を	
此實罪に淫	を	し	日	せ	う	始	終	善	い	と	を	し	た	い
迫り此て是	は	終	善	い	事	の	出	来	ぬ	は	と	云	て	と
も良心作用	に	良	心	の	作	用	の	既	に	類	了	進	歩	し
の痕跡なき	に	け	あ	ら	が	了	手	右	の	如	き	は	寧	ろ
所より此	違	の	意	外	に	早	き	也	は	之	に	よ	り	て
の経歴によ	又	氏	著	の	見	出	生	後	の	初	三	年	同	に
りて其作用	十	五	年	版	草	=	頁	九	十	三	四	頁	と	見
を漸と察託し	を	漸	と	察	託	し	来	る	と	考	へ	る	は	現
此の見る謂は	此	の	見	と	謂	は	さ	る	可	ら	ず	又	假	令
心の作用の痕跡	心	の	作	用	の	痕	跡	を	所	より	已	れ	の	経
とすも吾人の生	と	す	も	吾	人	の	生	れ	居	る	今	日	の	社
念にあらざりし	念	に	あ	ら	ざ	り	し	却	て	其	凡	俗	に	其
念の深く浸染し	念	の	深	く	浸	染	し	居	れ	る	社	会	を	了

大日本女子會原稿

(二)祖先以
未の経験
と遺傳
とに傳は
るゆ

存せり。今日の社会に生れ出でたは、
 我心に良心てよ心識を喚起し得か
 の社会にありては、争ひ一個人の
 故に前述の考説によりて以て良心
 了りも第二の見採を取りた。方大
 中に良心を全く生起し、説くより
 経験と積む間に良心作用の發生し
 せし人民に取ては、最早生れつきに
 りその傾向ありと説きたる方、説明
 下地傾向は、子と孫と遺傳によりて
 行くふらんと云ふも不可ふか。固
 べきかは、吾人今日の知識を以ては
 免に前祖先に萌芽したる或種類の
 問題あり)か子孫に傳はりて益々鮮
 明に益々強大にありゆく事あるは

大日本女子會館

57

は考証に始まる
巨大な
非説

して人類の出現せしに東経過したる無数の年月の間に求むるに過ぎず	擁りて人類の大生涯をふしたるに過ぎず。良心発生の起点を今日に求めず	考証の最要点に於ては敢て異了所をかきべし。但た個々の人の一生涯を推	備右云ふ所に従て第一の見様を措いて第二の見様を取るとすとも、彼の	あしと考ふ。	云ひ種々様々の臆説を構へ得たるにはあらがれぬ。茲には之を争ふの必要	遺傳すといふも畢竟その同一の事を異様の辺より見たるに外ならず也	者の孰れん	遺傳すといふ	経の組織に	或は、脳并神	水が下りし	敢て疑を答
							は其性質は其子に傳はるべきも、その子も其父の如く、或は例へば、イ	るかと云ふに、親が其一身に得たる性質は、生殖の根本に	点は親の脳系神経の性質が如何にして子の脳系神経に傳は	要点を説明したりとは云ふ可らず。更に説明を要するの	假し脳并神経の組織に遺傳すといふとも、之にて問題の	

或は心臓の自性に遺傳すと云ふ

らる

大日本学會原稿紙

46

B14

58

批評甲
外界より
苦の影法師と
義務と
の心

と發生せしむるもの、性質に於ては毫も異ならず、即ち夫れ良心の形
 跡なき如く、外界の強迫（苦痛と快樂とを以てする強迫、良心の作用を假
 定せしむる無良心の強迫）を以て良心の作用を生起せしむると説くに外
 らざるあり。□□而して若し斯の如く眼鼻舌個人の一生涯に止めずして人
 類全体の人生涯に放てば、果して前述の考説によりて良心の起原を説明し
 得べき乎。予輩は未だ容易に然りと答ふを得ず。蓋し予輩は此考説に對して
 は巨大なる困難を提出し得べしと考ふ。

右の考説に従へば、一の事を善とし為すべしと一の事を惡とし為す可ら
 ずとすれば、曾て其事に關して善惡とよく感受したる快樂又苦痛を思ひ出
 すに過ぎず。即ち今は實際其事の爲に外より快樂又苦痛を興へられざるも、
 曾て善惡とよく経験したる快樂又苦痛が影法師の如くに其事に伴隨して心識
 に浮み来るとは外ならず。云はば善惡と心識は前にも陳べし如く曾て経験
 したる快樂苦痛の影法師の如きものに外ならず。又義務の衝動、良心の命令
 と名くするものは曾て強者より受けたり強迫の痕跡に過ぎざるあり。成程此

大日本教育會館

強き外
思の隆
迫に交
しを
しを
の心
法

別行

痕跡、影法師は吾人を自してその痕跡の伴隨する事柄をば為さしむる一の
 動機とはふりあらん。そを為さしむる様は、その方角に吾人を傾く。或人の
 力はあらずらん。然れども吾人をして之を為すべし。為さねば、心識
 せしめ得ず。予輩は吾と吾とを得ず。請ふ左に其理由を陳述せん。
 今現に社会の獲取し法律の禁止する所を見れば、此れは右謂ふ快苦の経験
 の影法師の伴隨する所と相齟齬する場合あらざ。今日、社会の制裁は吾人と
 右の方角に傾く。場合、彼の影法師は吾人の左の方角に傾く。事あらざ。例
 へば現に社会の總体は奴隷賣買を是とする時に當りて、我一人之を非とし
 又之を非とするの故を以て社会より迫害せらるる想像也。(此れは想像
 は唯だ想像に止まらずして、實際あり得べきをふり) 此場合に於て我良心
 に復ひて奴隷賣買を非とするは、右の考説に従へば、曾て我が受けたる苦痛
 若しくは快樂の影法師に過かざりべし。而して此影法師は社会が實際我
 に與ふる苦痛若しくは快樂を全く反対の方向に我を傾けんとするなり。何
 故ぞか。此れは、右の考説に従へば、吾人一定の事柄に遭遇して之をよし又

右の考説に従へば、吾人一定の事柄に遭遇して之をよし又

このあり得	下りかは妬	く指いし論	せかすとす	も其如き場	合に於ては	何故か實際	社会の強迫	す所は康	く可らずし	了曾て昔に	社会が其一	了強迫の	寺影法師と
はわろし心識すに必し曾て其通り事柄に遭遇	してそれには随つた ^性 樂又苦痛を受けた事あると平也	かすべし。但た寺遭遇す事柄の性質が曾て遭遇して快樂又	は苦痛を受けし事柄と相同 ^係 す所ありて斷想の作用は	りて其より他に移り得るものあるを要す。而して其關係は	寺は既に朝に吾人の心識中に在るかす十散ておし。故に右	の事説を主とし得んには例へば寺掲げた例に於ては必し	いも既に以前	痛又は性樂を受けたとあるを要す。但た表し複雑より思	想の關係によりて曾て或若干の事柄（如録賣買の事おす	るもよし）に就いて外男より強迫されて受けたる快苦の記	體と寺の事柄（如録賣買の事）に結ぶつけ得るの關係あら	は是れなり。故に寺の録賣買の事に關して社会一般の人の見	所と我一人の見所との相異るは我 ^各 他人とが曾て受けた

大日本女學會原稿紙

して存する
 了進の経路を以て結ぶつて了極の界に付するを云ふ也
 方に厭くべ
 可なり也。故に現に社会一般の人加取事を為すべしと思ふ
 日守以影法
 時に我一人は彼事を為すべしと思ふ如きの場合に (在り考
 師元は文
 説に從ふ也) あり得べからざるに於て然れども其也
 張り守の如
 日場合に於ては何故我が為すべしと思ふ方に從ふべしして
 く社会より
 社会の一般が為すべしと思ふ方に從ふ可らざる乎。在り考説
 海迫せら小
 以て於ては進も其理由を察見せざるなり。是れ乎か其考説に對
 て生したる
 して提出せしむべきなり。非難あり。

ものにありか也。然れども何故此影法師の方に從下て現に社会の一般が意
 志とす。所以從ふ可らざる乎。右の考説に於て考ふれば其影法師の
 方、現在社会の加ふ制裁より却て力の強き場合即ち其吾人に於て快
 樂又は苦痛の大なる場合にのみこれに從ふべき也。是れ人否。其如き場合に
 には吾人は實際必ずこれに從ふべし。而してその如く影法師の方却て強
 き場合は固より其方に於てざるべし。然れども影法師の方如何なる場合に

大日本女學會原稿紙

必が強しとは云ふ有らばその弱き場合には如何従ふべき乎同
 うて云ふに至れば外より苦痛と快樂とを以て強されたる強迫制裁の結果
 と吾人の所謂良心との間には決して同一視すべからざる点ありに氣附
 くべし蓋し吾人の良心を名くる心識は吾人と動物の強弱に於て外
 界の強迫と相異するにあらざりて全く別種の權を有するものあり。そのせ
 ばナラ又と命ずる心識と吾人の苦樂とす。所以に或は心識とは決して
 同一のものにあらざり。緩急と良心の命令弱くして社会の制裁に壓倒せらる
 了場合に於ても良心の命令は敢て其權を失はたしにあらざり。只吾人が我
 良心の爲すべしと命ずるを爲すかして爲し易きをに就きたるのみ。吾人
 べき事と爲し易き事とは決して混同すべきものにあらず。如何に外界の強
 迫には反対し難く思はるゝ場合にても吾人の良心はそれには反対せよと命ず
 るをあり。而して右の考説に従ひては、その如き場合に於て良心の命令に従
 ふべしとして外界の強迫に従ふ可からざる理由ありを見ず。右の考説に従へば
 良心の要求と強迫の要求との間には寧ろ強弱の差別は生ずべきも、強弱に

大日本女子會館蔵

恐怖
と異
是は
心は

外身
は
心
は
恐
る

拘らざる者、然らざる者、(或學者の語を證して云へば權の種別)は生
 ずべきにあらず。只た吾人が現實一方に専らし、その強くして他方に専ら
 したる、その弱きのみ。其間にべしべからずして、其別を生ずるのみ。其
 かる、その強き方に向かれば、その弱き方に向かひて、其別を生ずるのみ。
 りお却て (右の考説に從へば) 其然るを云はざる可らず。之を要するに
 右の考説を以ては、良心の判別又良心の命を名くす。心識の特性を説明す
 るを得ざるあり。即ち外身より来たる強迫の如何に拘らざして、良心の命を判
 別に從ふべき場合に説明を為し得ざること。又
 又少しく他の辺より考ふるも、右の考説によりては良心と名くす。道徳的心
 識を説明し得ずると明あらん。今辯論の簡明を保たんが爲めに、専ら社会が
 苦痛を以て一個 (社会の快樂 (壹體) を以て一個人の行爲を誘引す
 人を強迫する邊) には其能力固より少きにあらざれば、總して社会の強
 迫かと名くす。其は (重) 刑罰即ち苦痛を與ふことによ
 凡そ吾人が苦痛

凡そ吾人が苦痛

此れもそのあり。
 迫かともくす。其は (重) 刑罰即ち苦痛を與ふことによ
 凡そ吾人が苦痛

此に對する心の趣は之を嫌ひ避けることなり。苦痛の將に來ると
 するに豫期する時、吾人は恐怖と稱する感情を感ずるべし。而して社会
 を苦痛を以て吾人を強迫し、吾人の行為を箝制若しくは獎勵するは、要する
 に此恐怖の感情に訴ふる以外あり。故に社会が苦痛を以て強迫する行為
 に此恐怖の感情の伴隨するに至るべく、又其伴隨するその密接するに從ひ
 て（既に上に説明したる）心的作用によりて（縦言）社会が苦
 痛を以て脅嚇せしむる場合に、右の行為を恐ろしく思ふに至るべし。其
 場合に於て右の行為に對する感情には、其時の關係によりて、固より多少の
 趣と異にす。所ありて、或は行為を嫌はると云ふ、或は之を心おろく畏しむは
 氣味おろく思ふと云ふ、種々の名称を附し得ぶ。此はあらゆる事象に
 するに恐怖の感情若しくはその多少の變態を指すに好まらば、即ち右事種々
 の名称によりて感情に多少の異別の辺あることを示すと雖も、其感情總て
 根本の性質は懼るといふ心識に外ならず。故に現在外より苦痛を加へり
 此人をば豫期せしむる場合に、或は事柄を恐怖するの感情は右の各説に謂

見 48
 見 48
 見 48

此の趣は之を嫌ひ避けることなり。苦痛の將に來るとするに豫期する時、吾人は恐怖と稱する感情を感ずるべし。而して社会を苦痛を以て吾人を強迫し、吾人の行為を箝制若しくは獎勵するは、要するに此恐怖の感情に訴ふる以外あり。故に社会が苦痛を以て強迫する行為に此恐怖の感情の伴隨するに至るべく、又其伴隨するその密接するに從ひて（既に上に説明したる）心的作用によりて（縦言）社会が苦痛を以て脅嚇せしむる場合に、右の行為を恐ろしく思ふに至るべし。其場合に於て右の行為に對する感情には、其時の關係によりて、固より多少の趣と異にす。所ありて、或は行為を嫌はると云ふ、或は之を心おろく畏しむは氣味おろく思ふと云ふ、種々の名称を附し得ぶ。此はあらゆる事象にするに恐怖の感情若しくはその多少の變態を指すに好まらば、即ち右事種々の名称によりて感情に多少の異別の辺あることを示すと雖も、其感情總て根本の性質は懼るといふ心識に外ならず。故に現在外より苦痛を加へり此人をば豫期せしむる場合に、或は事柄を恐怖するの感情は右の各説に謂

心の内なる
徳の行爲
より
生ずる
善なる
性
徳の行爲

徳の行爲は決して外界の強迫力の強迫からして爾かすにあらざりて吾人みづから之を志し以て然るべきことと見認して爾かすにあらざり。若し自ら内心より見認すにあらざりて單に外界の強迫に服従せば、其服従の所為は道德上の價值を損せざるを得ず。總合して之の強迫が手現に外界の強迫として現はれ来らざれば、若し畢竟すに外界の強迫より来りしものあらば、其言せば其根柢に於てその根柢の性質に於て外界の強迫と敵て要別のもめらば、其強迫力又その強迫力の影響（結果）によりて喚起したる所為は吾人の眼前に於て德行たるの價值を失はざるを得ず。故に若し或行為を善とし為すべしとする心識の由て来りて、全く外より強迫する強迫又その強迫によりて生ずる感情に帰せば、是れ遂に吾人の道德的心識を説明はせ、却て只た之を顛覆せしむるものと云ふべきあり。良心の起源を説明すに、はあらざりて、良心の直に良心たる所以の特性を拒否すに云ふものあり。今云ふ如く、外より来りて強迫の影響に帰す可らざりし所の内より發せし良心の湧き出たり可らざりとは、まことに如何なる意味なる乎。是は後に至らざらん

大日本女子會館蔵

良心の
利他的方
面に對
する困難

(批評乙)

ば富にすゝを得べし、免に角を難せし所に於ては、右の考説(即ち單に
 外より苦痛之快樂を以て個々人を推迫するに於て遂に良心を心識
 と生じしめたりと説く)は到底すゝに左の三點に於て良心託原の考説に
 り得べからざりて、明らうと第一外圍の推迫に歸すべき結果をのみ見て内
 より察すべしとありしを承認せざるの點、第二、今現に外圍の刑罰亦、事柄に
 對しては猶ほ能く恐怖の感情の起り來るを以ては、或は説明し得べしと人
 と是れ其れ事柄を以て可らばと心より直に承認すべしと心識の託原を證明
 し得べしと點、第三、現在の社会の推迫に及しては猶ほ我が為すべきと思ふ
 ことは否き、可らざりし理由を示し得べしと點、即ち是れなり。
 予等は上に陳述したる所に於て既に略ぼ右の良心託原の考説の取りに
 足らば、事を論証したりと信ずれば、猶ほ更に他の點よりして其考説の
 大に非ざる所以を明にせんと欲す。
 外圍の推迫力(即ち社会の制裁)によりて以て能く一個人の行為を左右
 するは(既に良心の作用を言ひ居りし心識を假定せざる限りは)只此を

大日本女學會編輯

山田 新刊 漢書 卷之...

山田 新刊 漢書 卷之... (faded text)

一人自身の苦痛又快樂に訴ふべし故あらざる可らず。何故社会の賞罰に制
 せられて或は行為を為さざる様あり之を為すを恐るしく思ふ様にある
 かと尋ねれば要すに只これに苦痛を憂く事と畏る事とを恐る事とを為さ
 べし。故に獨り外患の強迫社会の制裁とをみ詰る右の考説に於ては訴ふべ
 所はおろつから只これに心にあらざる可らず。言ひ種小れば自己が苦痛を
 避け自己が快樂を求むる心と基礎として良心の制裁の説明を為さざ
 る可らず。然れどもは果して為し得べき事と自ら良心の此事を為せば彼の
 事を為す可らずと命ずれば法して其事によりて自己が快樂を求むるは苦痛
 を憂く事からば故に自ら自ら時として自己の利害を目的とせしめて或は行為
 を為すを要す。予が此良心論の目的は倫理の原則を發揮し、善惡の何
 ら場合を以てし。たゞを明示すにばあらざれば、亦それと全く相離れ
 ぬに詳し。論ず可らざる点もあり。例へば予論に云ふ所の如きは彼の
 利己主義の倫理所謂利己主義の倫理説とは相違小なり。利己主義の倫
 理説を詳す。

故に自ら

理説に就いては「附録第二」に於て少しく論じたり。

大日本女學會編輯部



を得ず其行為は或は遂に自己の利益とありやと知るべからず。然れども之
 を為すの目的は自己の利益を計りにある可らざる場合あり。例へば他人の
 物と盗む勿れと我良心の命可るは、己れがそれによりて損害苦痛を受く了
 故にばあらば盗む勿れと云ふ良心の心識には決してそれ如く自己の利
 害を埋めし来りて之を行為の目的とす。如きをあし。若し各人各が本来
 只利己心にのみ動かされて自己の快楽とありてもは之を求め、自己の苦
 痛とありてもは之を避く了より外に心なき者あらば如何にして愛他的行
 為とば言人の為すべしと見認すに至るべし。若し愛他的行為と見認
 せば、其行為が自己の利益を興ふ了の故あらば可らず。然れども良心の
 命令には、純リ 若し行為の意志が純粋に他を愛すにありせば、彼に
 粹に他を為すは外形上利他的行為とは名くべきも、直に愛他的行為とは名
 めに他を愛く可らず。如何に外形の行為はその形を愛す了も、若し根本の
 了りたる行為の心が自愛にあらば、先づ自愛的行為あり。自愛を唯一至極の
 意ありし居る目的とす。若し如何に愛他を以て其意ある目的とすべし。至

大日本女學會原稿

らずや。若し
 利益を増す最良の道ありと知りて、我利益のため他人を利
 害するに及ぶ。即ち**外利**の行為は利他的と稱す
 也。吾人の
 道德的意識
 には、明々
 白々あり。事
 實を蔽はか
 了可らず。彼
 のエッブアの弊に倣ひて多く牽強附会の説を提出し、来りか了を得か了べ
 し。仁愛の念も正義の心も皆自身之苦痛を忘れ自身之快樂を欲す。感情
 に分析し、了らぶを得ざるべし。證念心かの上に陳述せし良心起原の
 考説に従ひて、今現に外患より苦痛を以て庶迫せられ、場合に、曾て数
 々庶迫せられ、了証の結果として或行為を為すに心わろく感ず。採り

大日本女學會編輯部

ありたりとするも、その行爲を為さざるは（右の考説に從へば）自身ハ
 此によりて苦痛を受くるが故あらざる可らず、即ち其行爲に伴隨して不快
 の感を生ずるが故あらざる可らず。故に其行爲を為さざるは、唯だそれより
 て喚起する自身ハ不快感を生れんが故也。他人に難儀を懸
 けおすは、それハ^ため^に詰る所自身の不幸を招くが故、若しくはそれハ伴隨
 して自身ハ不快の感を生ずるが故あらざる可らず。然れども吾人の良心が
 吾人に命じて他人を苦むる勿れと云ふ時は、其他人の苦痛若しくは不自由
 その物を悪しきものとして之を醸す可らざると命ずるあり。例へば愁苦訴ふ
 るかふき^た實婦も^た虚く^たが如きの行爲を想像せよ、吾人は直に之を悪しき事
 為すべからざる事と思ふべし。而して吾人が其の悪しき事ハ其の爲す可ら
 ざる事^を為さざるは、その事ハ已に^た其^た不^た快^たの^た感^たを^た避^たけ^たん^たが^た爲^たに^たほ^たあ^たら
 ずして、先づ其人をして其事によりて苦痛を受くるべし。あからしめんが爲す
 り。故に吾人が悪事に対して不快の感を生ずるは、假りに右の考説によ
 りて、即ち^た分^たか^た説^た明^たし^た得^たたり^たと^たす^たも、（即ち或事を爲して曾て外界の場

大日本女學會編輯

迫の爲に買はさ水たさ苦痛の結果か不快の感と云りて猶ほ今もその事に
 伴隨して諒が来り而してその不快の感が取も直さずその事を悪しとす
 良心の心識より云ひ得るとすも **我水自身かその事に對して不快の**
感を得了 **故** にはあらで換言す水は自身の不快の感も避けるか爲には
 あらで只他人に苦痛を興ふ **故** 其事を爲す可らずとす **心識は右の**
考説によりては決して説明し得可らばあり 約言せば假りに右の考説に
 ありて他人に苦痛を興ふより行為を悪しと感ずる心識の記原を説明し得
 とすも **それを要しと感ずる** ことが自身に取つて不快の感ふ了故にその感を
 避けるか爲めに其行為を爲すにはあらで其行為か他人に不快の感を
 興ふ了故に **その他人の感** **不快の** 感を悪し記さらんか爲に其行為を爲すべから
 ずとす **心識の記原** (即ち其点に於ける良心の記原) は右の考説により
 ては決して説明し得べからばあり **要す** には若し自身の苦痛に拘らば只
 他人に苦痛を興ふ了から **或事を悪し** として爲すべからばとす **をあらば**
 (即ちその如き辺に良心作用の存在す **をを氣認せば**) **只他利己心の**

大日本女學會編輯

(批評頁)

利己主義の立脚地を以ての困難

を根拠とす右の考説によりて良心を以て心識の源泉を説明し得たりは
 明白ならずと信ず蓋し(右の考説に従一は)只利己心の従僕として生
 したる良心が其主たる利己心に違背しても仍ほ立つき理由あらば亦
 今の論は利己主義を非とするの立脚地よりして右の考説を難じたり所
 得たり故に利己主義の倫理説が吾人の道德的心識を如何に充分に説明し
 て而して其性情の発動すべし必しも自己の利益を最終の目的とすべし
 ことば敢て見難からんことを考ふ己人の生命を棄てても母か子を愛する
 ことが如き必しも自己の快樂を以て最終の目的とすべしと云ふ可らず且又
 自己の快樂を以て最終の目的とせずして他人を利益すべしと云ふ實際あり
 ぬば自ら其の如きことを為すか吾人の徳行の一部なりと云ふ心も亦實際
 ありともありと予望は考ふ斯く考ふ所よりして右の考説を難じたり然
 れども此考説の吾人を満足せしむるに足らざるをば亦利己主義を取つて

大日本女子大学蔵

利己主義の
利己主義の
利己主義の

始めに知ったことはおらず。利己主義その物の上に立ちても痛痒よく右の
考説の不~~足~~分ちる。と首破し獨りあらん。請ふ之を論せん。

利己的性情の存在と利己主義とは必しも相容れざる者にあらず。利己的

性情と先づ實際存在する者を見而して諸の性情の相互の関係を考へて自

己の成りこむ多くの快樂が其性情の働よりして生ずるやうにせよと云ふ

の意に利己主義を解すれば、利己主義は全く利己的性情と相反すと云ふ

可ら~~ず~~、~~但~~其性情の上に立ちて之を統御する者なり。利己主義を取りあか

ら何故に他人を愛するを同一は、最終極の目的は愛情を満足せしむるに

よりて己の快感を得るにあり。然れども愛情それ自身の直接の目的は他

人を利すにありと云て可らず。又實際直接の目的は只だ他人を利す

にありあり。其愛情そのものそれ自身に向ふ所は偏に他人の利益にあらず

か故に、其情に駆らるれば、遂に自利を損ずるに至るをあり。自利を損ずると知

りつゝも其情に従ふの場合少しとせし。利己的性情も、飲食の欲の如く、それ

に従ふに却て自己の最大の快樂を増する場合おれども、其性情の存在

大日本女子大学

75

利己主義
の善れ
と此等徳
の善れと
相異なる
相異なる

才以上は、懐も飲食の欲を充たして快感を得た如くに、自性情を満足せし
 むるに、か自己の快感の一源泉たるなり。但し利己主義は之を統御して自己
 の終極の利益（最大の快楽）を損せざる程の如くに其満足を止せしむる
 を要す。故に利己主義は必ずしも利他的性情の存在と相容れざる者にあらず
 べし。然るに斯く解したる利己主義は吾人を見て唯だ強者に威迫せられし
 行動する者として做すが、唯だ賞罰によりて動かさるる者として做すが、利他的性情
 の自発して吾人を動かすありと見做す。而して其利己主義より云へば、利他
 的性情の発動して自己の利益を増す外には吾人は吾心に従つて行動すべ
 きなり。其利他的性情に従つて行動するが、今云ふ利己主義の倫理説に於ては
 利己主義の善れとは云ふ可からざるも、道徳上善きと正しきとせられたるなり。故に吾輩
 が云ふ良心の判別が其如き行動に對して存せざる可からず。強者の強迫に遭
 はずと、否とに拘らば、利他的性情を満足せしむるに由りて自己の快楽を増さ
 ず。其如き行為に對して吾人は之を道徳上嘉みするの心識即ち良心の作用
 を起さざる可からず。而してその如き行為を嘉みするの心識は吾輩に

大日本女子會館蔵

66

814

曾て他人より受けたる賞讃を追想すに外ならずは、吾人の道德的
 心識、**實相**を穿つるものと云ふ可らず、曾て他人を利益する行為を以て
 他人より辱**賞讃**を受けたるを以て故に、今直接に他人の賞讃を受け
 ば、何れも、何れも、何れも、其行為に對して快感を覺ゆる、是れ其行為を道德上善
 として嘉みたるの心識、**然れども**右説明したる利己主義
 に從つて、一行為の道德上善なる所以は自己の最大快樂を求むるに在り、他
 人の賞讃の有無に拘らば、最も自己の快樂を増すものは最も善と見たり可
 らば、他人の賞讃の現在伴ふもの或は曾て伴ふものをのみ道德上善と云
 ひて他に自己の快樂を増すものありと云はば、その理由あり、然るに若
 し彼の考説に從ひ、一行為を善と見し心識は他人の受ける賞讃によりて生
 じたるものありとせば、最も多く他人の賞讃の附着する或は附着せし（或
 は附着せしもの種類あり）行為をば道德上最も多く嘉みたるの心識を起
 すべし筈あり、故に彼の考説は利己主義を取る人の道德的心識とは相合
 せざる所あり、利己主義を取る人の道德的心識は、總して他人の賞讃は小く

大日本女學會原稿紙

此考説
の因親
の要點

了も自己の快樂を増すための最も大なる者とは最も多く善むすべし彼の考
 説に從へばこの如き心識の託了所以を解す可らざるなり彼の考説により
 て一見悦し説明し得らるゝが如くに思はるゝ良心の作用は實は唯だ良心
 作用の一局部の表面のみ其全體と根柢より穿てしめぬにあらざり也予亦
 は右云ふ利己主義を正當の^倫理説と思ふにあらざり但だ假りに利己主義の
 上に立ちて見ても猶ほ彼の考説の不^十分の者なりとを証せんと欲せしめ
 りみ良心の託了を全く外界より受くる當罰に歸する彼の考説は利己主義
 の之脚地に於ても猶ほ狹隘に過ぐるあり之を要するに外界より受くる極
 迫當譽の如何に拘らざるして或事柄とは道德上為すべき正善ありとす
 了良心の作用は彼の考説によりては説明す可らざるなり而して外界の極
 迫當譽の如何に拘らざるして或行為を道德上正ふる善ありと見し^レそのあ
 りは否む可らざる事實と考す

右論す所によりて觀れば只だ外界の強迫によりて一個人自身の感受す
 る苦痛と快樂との外に別に訴ふる所なくは良心と稱する心識の託了は決

大日本女學會編輯

78
 道徳的良心
 勿雅時代
 外果制裁
 痕跡
 解の
 初

(新道徳)
 (オ)

して説明し得らぬから人彼の考説は吾人が人間たる性質の全解に着目せ
 おして唯だ其一边をのみ取りて解説を試みんとすものなり彼考説は
 唯だ外より来た影響をのみ説き唯だ各自の快感苦痛にのみ訴ふたを正記
 り唯だ自ら自愛をのみみ吾人の行為の動機と見做すが故に良心の起原に満
 足な説明を與へ得ず克く在り考説を分析せば既に其起原に於て既に元
 の假定に於て吾人一人間たる性質に於て無理な説明を為す所多きを
 告知すべき也

平筆が言追駁論したる良心起原の考説には上に陳ぶるが如き巨大な困
 難ありごもその困難よりその考説を救ひ出すの途はなす手その考説を辨
 難又潤色して次の如くには云ひ得べき也
 或論者は恐くは左の如くは辯せん吾人の行為は如何なる時に道徳的性質
 を帯ぶるを尋ねるにその行為の自然の結果(即ち因果の法則に由りて
 其行為より心を生ずる結果)の如何を見てそれに従つて其行為を為し或は
 為さざりし時にあり即ち自然の結果を思しき行為は外果より之を為さざりし様

大日本女學會原稿紙

~~兩者~~
~~伴隨~~

に倫道さす、故に為さるにあらざして、只だその自然の結果の悪しが
 故に為さるに至つて始て、真に其行為を道徳上責ぶべき價值あるもの
 と云ふべきなり。未だ外界の倫道にのみありて行為の方向を定むる間は、
 其行為は道徳上の價值を有すと云ふ可しが、其如き段階にあり人に於ては
 未だ道徳的心識の発現し居らざり。抑も彼の外界の倫道制裁ありその
 は、只他人を以て或行為に外あり附隨せしむる偶然の結果に過ぎざりて、
 其行為その物の性質より生じ来り自然の結果にあらず。例へば他人の所有
 物を盗みて其人に不自由を感せしむるは、其行為の自然の結果にして、而し
 て其竊盜の行為の爲に自身が周囲に繋かれ懲戒を加へらるは、偶然の結果
 果なり。又偶然の結果の如何に拘らば、只だ右自然の結果の如何を見てそれ
 に従つて些作進退を定むる者が、真に道徳的行為を為す者あり。然れば
 も社会の制裁は、總して自然の結果の悪しき行為に刑罰を課すは、故にその
 如き行為は偶然の結果（即ち外界の倫道より来り来る苦痛）が伴隨して先
 づ其苦痛にありて、以て未だ知能なく人を以て自然の結果の悪しき行為を

大日本女學會編輯部

為さしめざりし。然るに一個人の知見漸く開発して東国結果の關係に明
 らくなり、行為の自然の結果を認むる様になり、又それ従つて持身動を定
 むる様にあらば、去るに至つて始めに道德的行為を為す様にありしと謂ひ
 つべし併しその如く道德的行為を為す様にありても自身一個人の経験又
 先祖代之遺傳し來りたる経験によりて、今に猶ほ自然の結果を思し、行為に
 對しては以前より外界の強迫を暗に理に想ひ出たすであつべし。是れ蓋し外
 界の強迫を経験したる痕跡が其強迫の曾て居たりし行為に今も猶ほ
 伴隨して暗に心中に浮び來り、故あり。而してさる暗に心中に浮び來り、
 前の強迫の痕跡が取も直さず吾人の良心の命令、良心の威と名くすもの
 即ちべきこと云ひせねばならず、又云ふ心識あり。此心識は今は一見全く外界
 の強迫と相同係す所のなき様なりども、其實外界の威力の痕跡に外あり
 ず、云はばその影響法師の如きものに外ありず。其の如く曾て自然の結果を思
 ふ行為に伴隨し居たり所の外、外界の強迫の痕跡が今に猶ほ吾人の心に残
 り居り、故に最早、今は外界の強迫方に左右せらるゝを止め、行為の自然

大日本女學會編輯部

70

（其抄）
丁）

道徳的
心法と良
心

とを別物とするの也。

の結果を見て坐作進退を定かす様にありても矢張り自然の結果悪しき行
 為に對しては「してはあらぬ」と云ふ心識を伴はしめ、自然の結果善しき行
 為に對しては「せぬはあらぬ」と云ふ心識を伴はしむ、即ち善惡の衝動を
 伴はしむるあり。斯の如くにして吾人の良心は生起せしむるにあらざるか
 否かと云ふ者あり。其説の說明は爲し得ずかと思ふ者あり。右の如くは彼
 の良心起原の考説を解説せば、一見識に造作もなき様に、其
 解説に由りて以て眞に其考説をばその困難の中より救はれざるを得べし
 と思ふ論者も或はあり。然れども亦しく其解説の何たるを考ふれば
 其は決して今予輩の同題とする所の答ふるものにあらず。其見人其解説
 は彼の考説を救は出さずもかにはあらざり。其考説の到底維持し難きを告
 白し其考説の範囲に於ては決して許容す可らざる他の論拠を既に窮取し
 居る者あり。抑も右の解説に従へば、行為の自然の結果を善と見又惡と見し
 作用は素々
 リ良心とは別物もあらざり。何と云ふれば其解説にては良心は只加

人為偶然の結果（即ち外界の逼迫によりて受へられた快樂又苦痛の痕跡）に外よりか故に、吾人の行為の性體に就いて良心の示す所は只此其行為（蓋しとはそれと類似の行為）に當りて外界の逼迫の附着し居たりまこと云ふに止まりて其行為の自然の結果の如何に及ぶものにあらざればあり。右の解説に従へば、吾人が行為の自然の結果を見ずして、只た吾人の為偶然の結果（即ち刑罰等）をのみ見て、それ以後つて我行為の方向を定むる間は、未だ道德的心識を表現せざりて、一旦其行為の自然の結果に氣附き、それによりて我行為を定むる様にありて始めて道德的心識を起したりと云ふべからず。茲には行為の自然の結果の善悪は何れを指して云ふかを問ひ、究めおぼし。その何れを指すに拘らず、自然の結果の善悪を見れば、其行為をば道德上善又は惡とす、是れ良心てふ心識なり。然らば則ち自然の結果の善悪を見て、其行為に對する良心の作用は行為の偶然の結果より賞罰によりて生じたものにはあらざりて、吾人を論ずるべし。故に若し右の解説に従つて、行為の偶然の結果より賞罰によりて生じた者とし

大日本學會原稿

720

道徳的
行為と
良心
との
関係
と
自家
意識
との
関係

て良心の起原を説明し得たりとせば、その良心てふものは自然の結果の善
 悪を見ても、その行為に對するの道徳的心識とは別ありとも、ありが可らば
 又右の解釈に従へば、行為の自然の結果の善悪を見て、それに従つて行為の
 方向を定むる如く、他人の道徳的心識の存するべからば、是れ外因の強迫によ
 りて生じたる伴隨物に過かば、良心の作用は總令て全く無くとも、吾人の
 道徳的心識には毫も影響する所なく、又吾人が行為の道徳的性質には毫も
 損する所なく、則ち道徳的と云ふと良心的と云ふとは全く別あり
 とも、と云ふ可らば、是れ果して今云ふ如く自然の結果の善悪を見て
 吾人の行為に對する道徳的心識と良心の作用とが別ありとも、ありが如何に
 了作用によりて今云ふ行為は道徳上善悪の判別を為す乎。行為の道徳上の
 善悪を判別する作用の起原は如何に問題に答へが、同は良心の起原を説
 明し得たりと云ふ可らば、何と云ふは予學が討究の問題たる良心てふも
 のは善悪の判別より離れたる作用にあらざりて、その判別を含む作用あり
 ばなり。(是れ予が前論に於て開陳したる所以より知るべし)今又假り

良心の判別あり

大日本女子會館蔵

83

この文章は、
論議の
中心
である。

此行為の自然の結果の善悪に一定の説明を附して其自然の結果の他人に
 苦痛を與へることは其厚生之道を害すものは甚苦痛を與へることは其
 生之道を害す事に於て悪あり言ひ換ふれば他人の苦痛を與へるは厚生を
 ものが既にわらざるものありその反対はよきものありと云はん歟蓋し爾が
 云はれ彼の考説に於ては決して許容す可らざる範圍に踏み込めしにて一
 個人自身の快樂を以ては厚生にあらざれば他人の快樂を以ては厚生を以て實際
 他人の行為の目的とするべきものあり又之を目的とするを以て善とし又其他人
 の快樂を以ては厚生を以ては善とすはよきものあり希ふべきものなりとす心識の
 こととを假定し居らば不可らざる約言すれば他人の快樂を以ては厚生を以て物
 が自然に善きものにして其自然に善きものを目的として之を生ずるの意
 志を以ては行為が道徳上善ありしものありと云ふことを假定し居らば不可
 らざる然れども之を假定すれば彼の利己主義に根拠する考説の範圍内に於て
 は決して為し得可らば不可らざる故に上に提出したる解釈は彼の考説と其
 困難より救へ出さるものにあらず其考説の在脚地に在りて決して許容す可

この文章は、論議の中心である。

大日本女子大学

ら か ら 論 点	と 密 取 し 居	と あ ら 知 了	心 上 の 解	親 に よ り て	も 彼 の 良 心	純 原 の 老 説	の 到 底 維 持	し 得 ら れ が	と を 彼 の	老 説 は 遠 に	維 持 す 可 ら	か 故 に 予 望	は 他 に 向 つ
此 解 親 に 云 ふ 行 為 の 自 然 の 結 果 と 其 の 偶 然 の 結 果 と の	已 引 も 只 だ 一 見 し て 思 は る 、 如 く は 判 然 た る も の に は あ ら	す 蓋 し 行 為 の 自 然 の 結 果 と 名 く る も の は 、 原 則 の 規 律 に 従 つ	て 其 行 為 よ り 必 然 に 生 ず る 	より 直 接 に 生 ず る 結 果 も な ら ず 、 其 行 為 か 他 人 の 意 志 の 上	に 働 か て 而 し て 其 他 人 の 意 志 に よ り て 生 じ た る 結 果 も 亦 等	しく 行 為 の 自 然 の 結 果 た る 性 質 を 帯 ぶ と 云 は が ら 可 ら 	へ は 他 人 の 所 有 物 を 盜 み て 其 人 に 難 義 を 懸 く 、 と を 其 行 為	(即ち窃盜)より自然に生ずる結果と云はれ、其人の難義と	殊 う こ も の 、 中 に は 其 人 が 只 た 其 身 に あ り て 得 る 不 自 由 を	の み 合 む べ き に あ ら ず 	と 致 さ る も の を 得 ず 、 種 々 の 作 動 と 為 す も の を 得 ず し て 而 し て	其 感 情 作 動 に よ り て 生 か る 因 を も 亦 其 難 義 の 中 に 含 め が	了 可 ら ず 、 此 等 の 因 を も 、 最 初 の 原 因 に 了 窃 盜 の 行 為 と の

大日本書局出版

疑或
論評の
批評の

別

感 せ し ゆ ら	り て 外 よ り	責 罰 を 以 て	を あ ら し め し	辨 明 す べ し	一 つ 予 罪 の	に 先 ち 猶 ほ	責 を 求 む に	て 良 心 の 託	方 南 に 向 つ	是 より 他 の	了 可 ら ぬ 也	責 を 求 め よ	て 良 心 の 託
と ら ん 量 二 極 の 結 果 の 差 異 に 就 いて 道 徳 上 所 要 と し の 点 は	み 結 果 と 名 け て 良 心 に 利 然 た る 已 則 を 立 つ 可 ら ぬ は 明	に 抵 觸 し て 宗 盜 を 為 し た る 者 自 身 が 難 儀 を 造 り し は 偶 然	難 儀 を 造 り し と 其 自 然 の 結 果 と 名 け た ら ば 批 評 す べ し は 得	は お ろ と 得 さ る べ し 是 に 由 り 	者 に 負 は し む に 不 自 由 因 苦 等 也 宗 盜 の 自 然 の 結 果 と 云	原因 に よ り て 他 人 の 意 志 に 衝 き て 而 し て 其 意 志 を 行 は し し 其	遂 に 他 者 自 身 が 難 儀 を 造 り し に 至 り し 也 宗 盜 の 行 為 が	の 念 想 を 惹 き 起 し 若 し は 社 會 一 般 の 權 限 を 所 と す り て	し た る 者 が 宗 盜 と い は れ た ら ば 人 と 其 人 と 判 定 を 同 じ と す る	宗 盜 の 行 為 の 自 然 の 結 果 と 名 け る 可 ら ぬ 故 に 又 宗 盜 を 為	に 衝 き こ り て 自 然 に 生 じ た る は か ら ぬ 也 宗 盜 の	ま り 居 ら ぬ 也 夫 等 の 因 苦 は 宗 盜 を 為 す る 行 為 が 其 人 の 意 志 の 上	間 に は 他 人 宗 盜 を 為 し た る 者 よ り 見 て 他 人 の 意 志 が 接

大日本文藝會館蔵

こゝ快感甚 自然偶然と云ふは別ありし、寧ろ一は自身、困難一は他人

痛に良心の 困難と云ふは別にあるより。

紙を七折す。考説とば予輩の上ま非難したる所を見て、或人は恐くは疑う

て云ふふらぐ、其非難の論法は、彼の考説に於て是、是てふ心識の記原を

の制裁の結果ふ了使不使の感に啼び、対しては、其説の以て良心の記原を

説き明すに及らざるを示さん為に、志てはふらぬ、又せぬはふらぬてふ

心識即ち義務の衝動を堪へ来りて、此は決して外界の制裁によりて苦痛

と快楽とを感受したる過去の経験の結果にあらざり、断定し、又彼の考説に

於てぬばふらぬてふ心識(即ち義務の衝動)の記原をば外界の強迫に帰

して今日吾人が良心の命令と稱するものは父母長上政府社会(語す所は

強者)の命令、その威力の痕跡に好まらぬと説くに對しては、其説の以て良

心の記原を説き明す、是らざるを示さん為に、善悪の觀念を掲げ来りて

其觀念の記原は決して外界の強迫に帰す可らば、其言すに、はあらざり

手、是れ恰も右方の側面を撃たれば左方に脱れ、左方を撃たれば右方に

大日本女子會報

予が評論の要點

脱了、に似て、若し双方一齊に撃たれれば、何れか如に加脱れんとす。若し
 水はあられぬ、てふ心識も善悪、てふ心識も共に均しく外畏の強迫制裁に生
 じたるもの、と説かば如何せん。且つ爾が説き得ざるの理由あり。あ
 らずやと。□ 然れども疑團は、是れ全く予輩の論旨を明にせざるより生ず
 るあり。予輩の論旨は「水はあられぬ」てふ心識の紀原と外畏の強迫に歸す
 るをも又善悪、てふ心識の紀原と外畏の強迫に歸す。是も共に均しく立ち
 得べからざるを考説あり。云ふにあり。其考説の要點に於ては、彼も此も更
 に異なる所なく、共に良心の託命を外畏の制裁（言ひ換へれば外畏あり一個
 人の快感苦痛に訴ふる強迫力）に帰するに外ならず。但し一は主として快
 不快を感じ、その上より一は主として威力を感じ、その上よりして説明を
 試み、るに過ぎざるあり。□ 右の疑團は全く予輩の論旨を誤りたるものな
 り。此も、猶ほその如きの誤解を防がん為め、左に予輩の論旨の最も要する
 了所を成すべく、簡明に陳述して予輩の意を一層明にせんと力するも決し
 て冗長に過ぐさず、誹はあからんと思惟す。

大日本女學會原稿紙

88
89

義務の
心識に
就いて

先づ収めおらぬ（即ち可し可らぬ）こゝ心識の方より云はんは若し右の
考説に説く如く此心識は全く外界の感迫より生じて暗にその感迫を理想
せしむるなりその感迫の痕跡若しとは影法師とも云ふべきなりは過か
らば外界の感迫の存在せしむる如く（ましてその感迫と相交する如く）にはその
心識の伴ふべき正當の理由なしと云はかり可らぬ。外界の感迫の全く附ま
ずはかり物に觸る右の心識の伴ふは且れは過去の慣習の然らしむる所
にして若しその如く所以を首破して其慣習を脱す者あらば平等は其者
に向つては等し然す可らぬと云ふべき理由なし却て其者の為す所は（右
の考説に從へば）当然の正と云はかり可らぬ。外界の感迫の伴ふる事
物（ましてその如く相交する事）に對して「ねばらぬ」こゝ心識の存
在は且れは慣習より生じたる迷に外ならずと見れば至るも右の考説に從
は之を非ありと云ふべき理由なし蓋し只れは慣習に由りて生じたる迷に過
かかると見れば後にも猶ほ或事を為すべからぬと思ふは曾て弱者が強者
の感迫に容易したるの餘り其感迫の最早存せし後まては長り戦々

大日本女學會原編註

勢

90

由來の快得
と道徳的
心識の消滅

々たりに針を刺す。譬へば恐るべき物に出逢はたすや況かその物の既に過
 き去りたる後までも猶ほ戦慄し居るに異ふら。恐るべき物の過ぎ去り
 たる後には恐るべきの必要なき事を若し其小況にして覺知するを得ば其物
 の過ぎ去りたる後までも戦慄し居たりし事を自ら馬鹿らしく思ふ事
 人惟も古の如く現に外患の威迫なき事振をばせぬば、如く思ふは是れ
 唯一片の迷誤に過ぎずと悟り、その如き（所謂の道徳的）束縛を脱して、又
 在外患より苦痛を以て海濱せらる、俟に更に服従し、多く有るも却て事
 然のまゝ云はざる可らず。溜々たる天下は擧て我を攻撃するも、我は我が跳
 むべき道を踏まんふと、氣張るは、野法師に嚇みたる畢生の勇を振ふに
 似て、愚の極まりと云はざる可らず。然らば則ち、吾人が公道と云ふ正義と云
 ふ義智と云ふ心識は、その由て来りし所と看破すべし。其に過かきし夜半の夢
 の如くに全く消滅せしむるを得ず。予輩は敢て曰ふ、吾人の道徳的心識は果
 してその如くに消滅せしむるべし。乎。是れ實に予輩が所見の外に、自ら
 して、故点に至るは予輩は各自自ら心識に訴へて決するより外に、其

大日本書局出版

91

善悪の
判別
就きて

終の善を得る道みからん。若し外因の強迫に拘らざりしとすべし。及して
 は吾人は或行為を為さねばならぬ。又は為してはならぬと云ふが如き事
 不可らずと直に思ふ者あらば、その如き者は右の考説を採らば、何れ不可
 ならぬか知らん。然れども、若し外因の強迫に拘らざりしとすべし。及して
 して七福は吾人は時ありて或行為を為さねばならぬ。又は為してはならぬ
 であり、只此一片の迷により、只此習慣の結果に爾か思はれぬ。習慣の影
 響を好にして其行為に於て爾か思ふべき理由ありと考ふる人は、予輩と
 共に右の如き考説には決して満足するを得ざりし。予輩と共に右の考説
 を見て吾人の道德的心識の起源を説き明し、是れ却て只此心識の存
 在を否むものありと思はれ、これを得ざりし。予輩は此論よりして吾人が
 良心の作用ありしとしてはならぬ。又「せねばならぬ」云ふ心識は只此好
 悪の強迫によりて生じたものならざる主張す。
 次
 心に「善悪」云ふ心識の方に就いて云はん。彼の考説に従へば、此心識は吾
 人の良心の制裁によりて快不快の感を経験せし結果に非ざらん。若し或事

大日本女子會報

柄に對して現在外界の制裁おきにもほは右の経緯の結果として其事情を何
 とおく心よく著しくは氣味ゆるく感ずるあらば之を善悪の心識と名く了
 あり。故考説に云ふ如く外占りの強迫を受けし経緯の結果として或事實を
 何とおく心よく又は氣味ゆるく感ずれば其快感又不快感は吾人をしてそ
 の事情を為さしめ又は為さしめおる多少の動機とはあらん。然れども其快
 感不快感ハ必ずしも強さとのほ云ふ可らず。故に其動機も亦如何あり。堪
 合にも強さとのほ云ふ可らず。幸にして其快感の強からば外界の強迫に
 反對しても猶ほ吾人は其快感に從ひ即ち善しと見り所に從ひて行かあら
 ん。然しおから其快感は必がしも強さがよし。又吾人は成るべく之を強くと
 りかおし之は右の考説に從つては決して云ふを得。譬へば一人は過去に
 経緯したる外界の制裁の強かりし為に今は外界の制裁より離れり。且又
 現に社会が快樂を以て誘ふに及しても過去の制裁の結果より故の何と
 おく心よしして其動機に從つて或事情を行ひ。又一人は現に社会が快
 樂を以て誘ふ方を却て強く感して之に從つて即ち社会の制裁に從つて

大日本女學會雑誌

~~現在過去~~
の性質に
たけは是
非を
区別

或事柄を行ふとせし致。前者の行為を是として後者のを非とす。如き事
 はあるべからず。即ち彼の考説に従ては右兩者の間に是非の区別を立つ
 るの理由を發見せざらば。設て前者の快感と後者の快感とは其種類に於
 てのみ差別の存するにあらざりて其種類に於ても亦相異なりとす。も免
 じ南無同じ高下是非の区別を立つるの理由は (右の考説の論地より見れば)
 (は) 決してありしよしき也。要すに右の考説に従へば吾人が善又は悪と
 名くし心識も畢竟すに曾て外男より強迫を以て感せしめられたる快不
 快の感の痕跡に外ありざりて而して快不快が今現に外男の強迫によりて
 直接に感せしめらるし性不快感と相異し所は只だ一は之を惹き起す事柄
 に現に外男の強迫が伴ひ居り、一は伴ひ居らざるのみ。而して
 何故今現に外男の強迫によりて直接に感せしめらるし性不快感よりも
 往時には曾てその如き強迫が伴ひしか今日最早 伴ひはば了事柄なり
 て感ずる性不快感の方を賞しと一價值ありとす。まかば右の考説に於て
 は決して説明し得べからざる也。或人は云はく曾て外男の強迫が伴ひ

大日本女學會出版

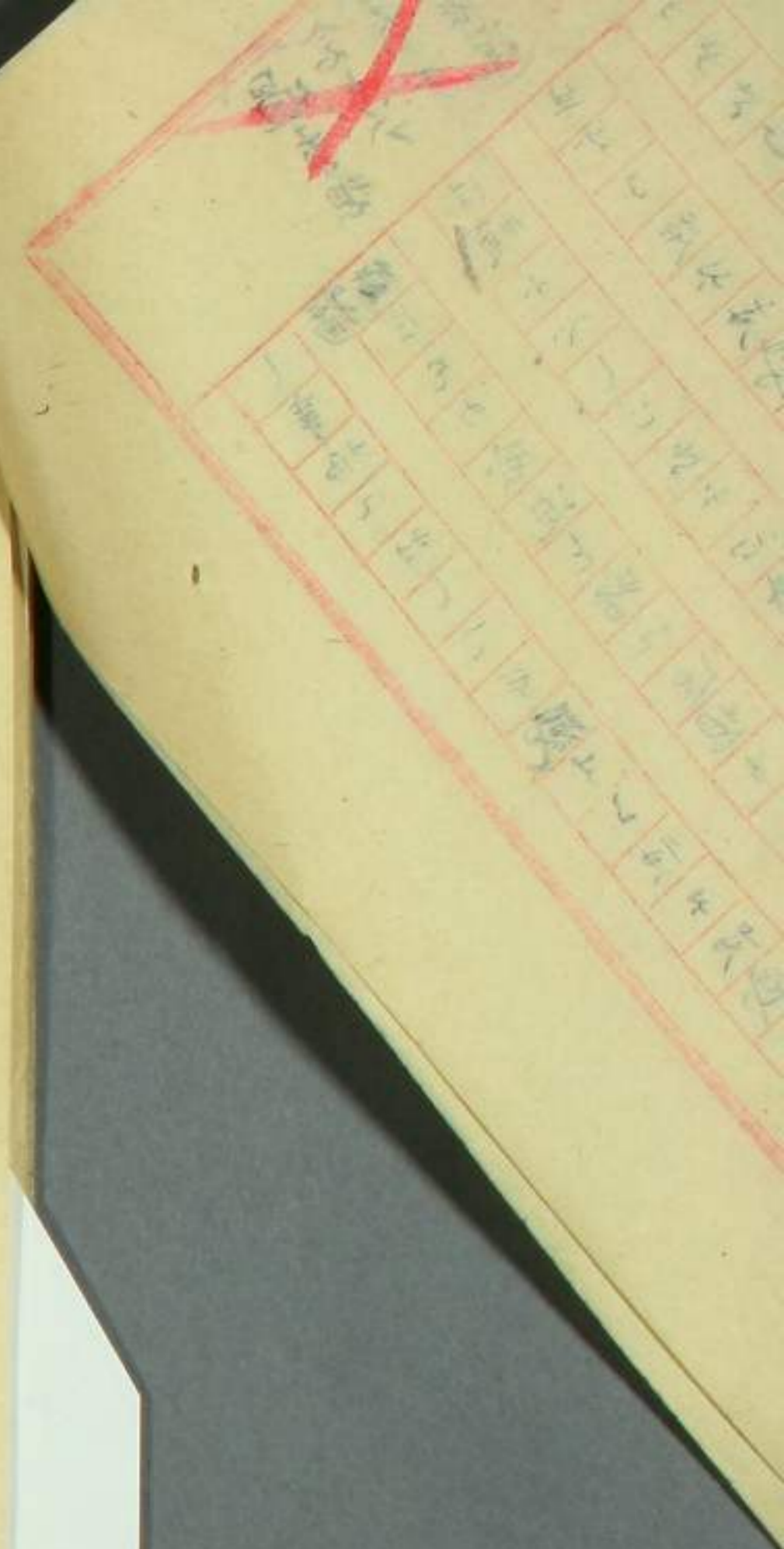
~~過去の想~~
~~念のつ~~
~~と~~
~~壊~~

し事柄に對して感ずる不快感には其感迫を経験せし結果として今
 猶ほその感迫を暗に追想する感想の折混し居る故に其不快感に對して
 は順ふべしと云ふ心識を浮べ而して之を覺りて現に奸男の感迫より直に
 生ずる不快感に對してはその如くべしと云ふ心識を浮べかして只尤ま
 のあたり奸男の強力をもて復はせらるるを覺るのみ是れ即ち兩極の
 性不快感に價值の差異ある所以なりと然れども右論者の云ふべしと云ふ心
 識は更だ右の如き感迫の経験の結果を有する人々にのみ對するべし
 にして若くは一般に對するべしにあらざる例へば或事柄に對して
 人は現に奸男の制裁あるも猶ほ能く何となく不快の感を浮ぶるも乙
 人は之を浮べかと思像せよ然る時は甲に對しては其不快感に他の不快
 感(即ち現に奸男の制裁によりて生ずる所のもの)に比して一種の價值
 (即ちべして心識)を有するべし人言ひ極みれば現に奸男の制裁によ
 りて生ずる不快感に反して猶ほ事柄を為すべしと思ふべし然し乙も
 亦同じく雨か思ふべき蓋ふりとは云ふ可らず又乙がその如く思ふに至る

大日本女學會原稿紙

此説の
道徳心
修養
無心
に
有る
有る
有る

の経験（外男、威迫の経験）も有せがればこゝ之とあるしとは云ふ可ら
 ず即ち一人が威事を善と思ひ他人が爾か思はざると孰れを見と非とも
 云ふを得ざるべし。又如何も人々を善と思はぬは云ふを得
 ざるべし。寧ろ彼が善説に従へば善と思はば思ふに及ばず
 孰れを見とも非とも定むべき理由なしと云はざるを得ざるべし。要するに
 彼の善説に従へば善も悪も共に一個人の善又悪に止まり又時々の
 に善又悪と思はるゝに止まりて善も一定の標準ありと云ふべし。故に能
 る所彼の古代希臘のソフィスト等が稱へたる極端の道徳的懐疑説寧
 ろ破壊説に陥らざるを得ざるべし。今更に予嘗て論点を約言せば若し
 吾人が或事を善又は悪と思ふの心識をば（彼の善説に云ふ如く）全く外
 因の制裁によりて生したる結果と見ればその事を善又は悪と思ふの心識と
 今後も尚ほ誰れんとすとの念慮即ち道徳心を養ふの念慮は減減せし
 るを得ず。又我が善と見悪と見をば其一人の善悪にあらざりし萬人の善
 悪なりと思ふの心も消滅せざるを得ず。故善の心もあり得ずは吾人が未だ



(辨道) 恒才三

社会事 性の大徳の一致と 道徳上の定論

我 ~~心~~ 心 (即ち善悪を判別する心識) の由て来る所を知らざる向の事

して若し一 ~~日~~ 之を知らば空華を見て実の華と思 ~~ひ~~ 緇を見て蛇と思ふと一

般 ~~心~~ 迷悟は忽にして失せ去らざるを得ざるべし。 ~~口~~ 吾人の道徳的心識

は果して ~~断~~ 断の如きもの又断の如くふり果つべき者 ~~也~~ 断 ~~終極~~ 終極の疑同は

(前に ~~云~~ 云ひし如く) 古人各自の心識を顧るより外に之を ~~決~~ 決すべし ~~迷~~ 迷す

か ~~べ~~ べし ~~若~~ 若し我心識を顧みて正すに断の如きものあり ~~と~~ 考ふ ~~人~~ 人あらば

予輩は其人に向つては ~~最~~ 最 ~~早~~ 早 ~~辨~~ 辨論す ~~可~~ 可の用ふし ~~蓋~~ 蓋し ~~辨~~ 辨論の得て説伏すべし

限り ~~に~~ なら ~~ず~~ ず ~~也~~ 也

右の如く予が彼の良心起原の考説を評して其説の結局は遂に道徳上の懐

疑論に陥らざるを得ざる云ふに對して或人は恐くはその考説を ~~辨~~ 辨 ~~度~~ 度して

之の如く云ふならん ~~右~~ 右の考説に従ふも道徳上 ~~我~~ 我 ~~分~~ 分の ~~定~~ 定論を立て得ざるに

は ~~あ~~ たら ~~ず~~ ず ~~其~~ 其考説に於ても善悪の判別は ~~只~~ 只 ~~た~~ 全 ~~人~~ 人 ~~の~~ 時の ~~に~~ 従つて ~~異~~ 異変し

て ~~憂~~ 憂 ~~も~~ 一 ~~致~~ 致 ~~す~~ ず ~~所~~ 所 ~~の~~ あり ~~も~~ あり ~~に~~ は ~~あ~~ たら ~~ず~~ ず ~~固~~ 固 ~~り~~ 今日我等が見る善悪の差

別は我等又我等の祖先が外患の判裁を経験せし ~~に~~ によりて漸 ~~と~~ 漸 ~~と~~ 生 ~~し~~ 来り

114

したるものには相違おけぬ。其外男女の別は一人一人に取れて至く相異れ
 ばそのにあらざれば一社会に於ては略ぼ同一の趣ありて而してその同一
 の制裁を経験して得る結果にも亦略ぼ同一の趣あるべからず。只此一社
 會の制裁を經驗して得る結果に於ては、強者が弱者を壓制するの趣には
 多少相同しき所あるを見れば、此等相同しき所より生じたる経験の結果
 が即ち道德上の立論を云ふべしものあり。然し強者が弱者に制裁を施すの
 趣には種々相異れり事情の爲に古今東西を遁して至く同一不變なる所と
 ては寧ろ少からざるを得ざるべし。故に實際古今東西を遁して道德的判別
 の至く同一不變なるものにては決して多からざるにはあらず。併し其が
 り若し一社会に於て其社会の多數者が一致して善悪の判別ありばその社
 會の道德は之によりて成立するを得ん。決して破壊に陥るの恐れなし。其多數
 者の新見に及りたる者は恐らくは多數の勢力によりて漸々其方同化せらる
 るに至らん。吾人が通常善悪の判別に一定の標準をかゝり可からざるべし。至
 く右の如く一社会又は人類を通じて極く大群の一致ある事を要求す。

大日本女子學會原稿紙

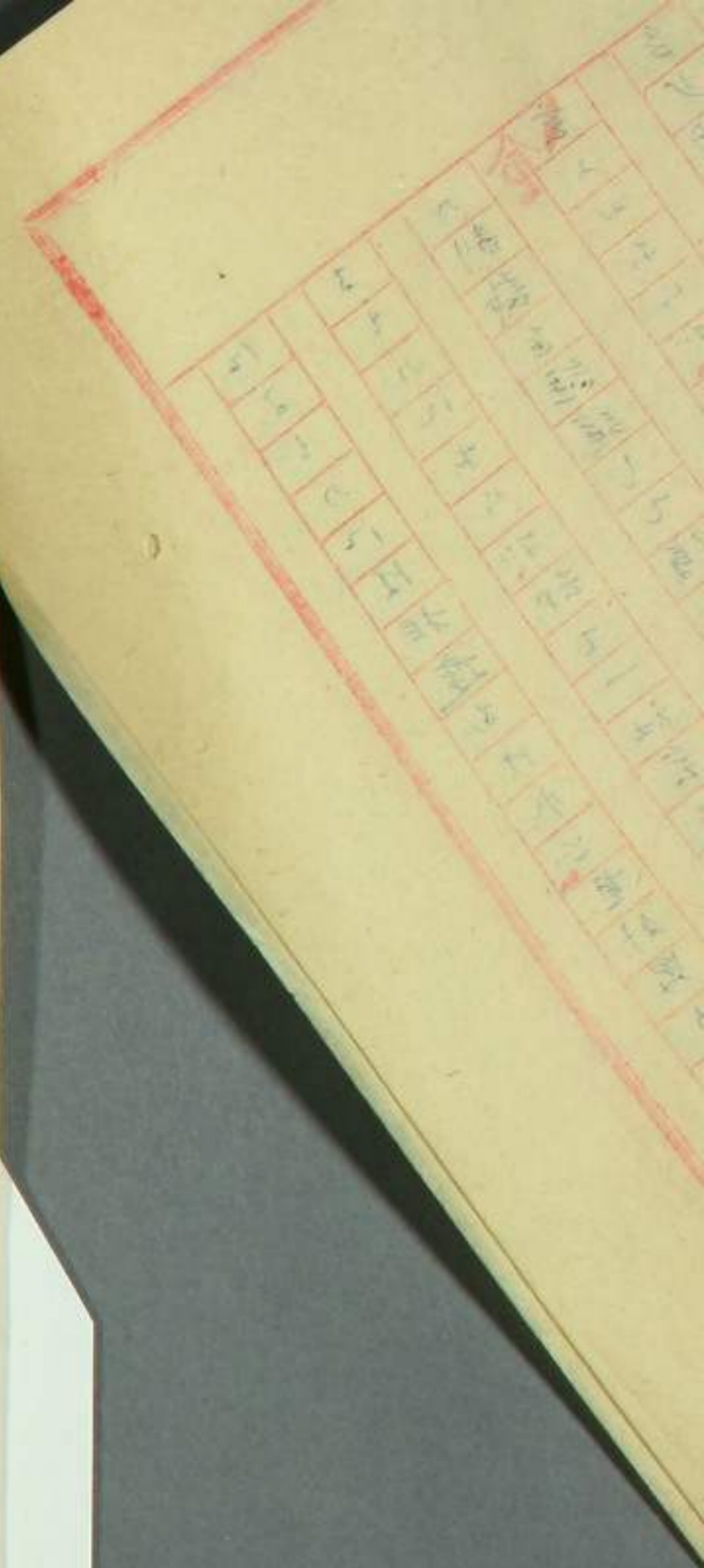
(大日本女子學會原稿紙)

此批評成

統の
別り
非
者に休意
用お
あ

には好むらば決してその他の一致を求めざるを得ず又求めざる必要なし善悪
 こそこの素より萬古不易の相ありにあらば只此社会の情態の一致する
 所に於て初めてその善悪の判別に一致の存するを見ざる又その如き一
 致を措いて他に求め得べし一致のありべき理ありと
 早して右難獲者の云々如くは人類最初の時代より其の如く強者を
 壓制したる一趣に東西相一致する所ありかは一向題も此れ先づ難論
 として簡明ならしめん為此は姑く難獲者の云ふ所に任し置かん
 今難獲者自身の言によつて考ふとも只此善悪の判別に多少大伴の一致あり
 りと云ふまでにて其一致の外にあり人々も長し一致すべき筈ありと
 ば云ふを得ざるべし一致を責め得ずは實際既に一致し居る者に限りて未
 だ一致せざる者に迄も及ぼすを得ず固より甲乙相見了所を異にする時は
 うちつけに彼は故に從ふべしとは云ふ可からず相見了所を異にする以上は
 彼は故に從ふを得ざるべし然れども其の故を以て甲乙共に均しく是より
 とは云ふ可からず甲の是にして乙の非あり或は乙の是にして甲の非ありべ

大日本女學會原稿紙



是
善道徳
上の
徳
位

善理由全くと考ふると又総合して吾人の今日の知識を以ては甲乙の良
 非を判断し能はかと思し若し明に善悪の最終の標準を見とめて之を個々
 の場合に応用するを得ば兩者の是非を判断して一は道理上他に従ふべき
 善ふりと決定し得べしと考ふるとは是れ全く相異なり所見より若し前者の
 所見に従ふば善悪の判別は全に一個人限りのものと考ふると考ふると可らば即ち
 道徳上の破壊説と考ふ可らば而して右論議者の云ふ所は右の前者の
 所見に陥らざるを得ざるなり若しスペンサー氏の云ふ如く吾人の今生或
 はベレガム又ミルの云ふ如く吾人の最大幸福を汝も道徳の最高の原理
 善悪の最終の標準を立て吾人は悉く（誰れ彼れも差別なく時の古今に
 か東西を問はずして）之に従ふべき善のありとし若し之に反する行
 為をば善と信するものあらば是れ其者の見所の過小にして物の道理に
 於ては決して爾が見るべき善のみにあらず即ち其者の為す所は総合の
 善観上には正しくとも客観上には善にあらざり断言するを得ば是れ成程
 善悪の判別に確乎不振の根拠を與へたるものとして謂つべし然れども右論議

善悪の判別に確乎不振の根拠を與へたるものとして謂つべし然れども右論議

利他的性
情 (社会的
本能) に厚
き後

前考迄
の缺點と
利他的性
情

者か彼の考説を辨復す所にては決してその如き新言を爲すを得ず

以上の論によりて予輩が難したる彼の良心託原の考説の到底維持し得

可らざるものたるを知りて是らん。則ち吾人は皆性来只か自己の苦感を避

け自己の快感を求むる爲に一切の身心の作動を爲す者なりとの假定を置

き而して吾人はその如き者なりが故に、外界より淫者の威力を以て快感の

感に訴へらるゝが依に吾人其行為を制馭せられ而して久しくその如き制

馭を経験すに向に遂に良心と名くこころ識を發生せしめたりと説くは畢竟

オコに偏僻狹隘の見たるを免れざるを知らず。右論述したる所は隨

分複雑なる難なるも、然るも如き複雑なる難を須むべし其考説

のみづから好んで眼鼻を狭くし、爲に無益の困難を招くの嫌ありを認む

るに難からず蓋し彼の考説は吾人の性と見做すべしもの、只だ一端をの

み揚げまはりて之を以て良心の託原を説明せんと試みるものなりが故に、

これ附着す多く困難に陥らざるを得ず。何故に吾人を見て、性 兼他人の

大日本女學會編輯



苦痛を痛むの心ある者と做さば、何故に他人の苦痛を減せんが為め、
 作動を起すの性あるものと做さば、手此性ありてを吾みて、人類の最初の
 有様をば人々敵同士の世の中居いと考ふれば、是れ只此木ッ、
 然る等、
 以て浮出でたる想像に過ぎず。人類の如何なる往古の時代に漸り、
 又如何なる野蠻の状況に下りても、今日吾人の知識の達する限りには、
 未だ木ッ、
 又等、
 其の云ふ如き人間の情態ありを見ず。何れ免れぬ親子の關係の如
 き、是れ木ッ、
 然る等、
 人類のみが相互に他の為めに作動するの性を有するにあらざりて、
 既に禽獸に於ても此性あり。其雌雄牝牡の關係、
 其母子の關係、
 其相群を為すもの、
 其關係を見れば、
 彼等禽獸すらも決して敵同士の寄合にはあらざり。
 人間豈に獨り他の為に悲み、
 他の為に涙を流すの性あるらんや。吾人實に此性あり。吾
 人實に他の為に涙を流すの性あり。但し進化の段階によりて、
 其性情の榮動する範囲に廣狭あり。或は親子間に限るあり、
 或は一族に限り、
 或は一村一國に及ぶあり。而して吾人が如何に如く他と哀樂を共にするの心的作用を

大日本女子會原稿紙

大日本女子會原稿紙
 姓名
 年次
 部員
 備考

利他的性情の起源

性情と假り来らば、少くとも右二個の欠点は補は得べきが如く思はれず。蓋し此性情は内より發して他人を目的とするものなれば也。然らば則ち果して此性情を以て（或は此性情と外因の強迫あり来り結果として発せ以て）良心の起源を説明し得べき乎。是れ次に予輩の論せんとする問題あり。

此問題に入るに先づ一言吾人の利他的性情の起源に就いて陳べん。予輩は茲に利他的感情又衝動を名けて性情と云ひしが、或人は同く云はん之を性情と名くても故て非難ありにはあらざれど、且性情は最初より吾人の存するものにはあらざりて如何にかして習て生じたり者にはあらざるか。此利他的性情を以て良心の起源を説明せんとせば、更に溯りて其性情の起源をも探るの必要はあきかたし。今假りに其言はば、吾人の性情の起源を尋ねて更に原始の性情に溯り、而して又猶ほ更に上の原始の性情に溯るとす。も早晚起源の探求し得可らざりし處に至りて止まざるを得ず。而して此探求を停止すべき境界は吾人今日の知識に於ては決して遠きにあらず。却てその餘りに近きにあるを憾みざる可らば、今予輩の問題たる利他的性情は更に溯

米簡教が
墨汁の加筆
不明とを
訂正考

リて其証書の探求し得らざりしを了す生物進化の上より論ずれば其
 性情は如何なる証因にありて生じたもの乎是れ生物の性情論に於
 て未だ其尤不明なる点ありして之に因しては予輩は確たる論定を為す
 を得ず但し一切の利他的性情は素に此牡親子の性情より生じたもの
 ありとの臆説を立て得ざりにはあるがれども是は決して利他的性情その物
 の起源を説明したるにはあらず只此牡親子の同に發生する利
 他的性情を以て一切の利他的性情中の最も原始するものとし他は皆之
 より用ゑ変化したるものなりと云ふ過が是れ即ち利他的性情全鮮の起
 原を説き明かすにはあらず却て之を以て（詳に云ふはその中の一節を以
 て）全く原始する者と見做すべし又假令其性情の起源を闡明し得べ
 しとすても茲には應つて之を論ずるの必要を感ずる人若し利他的性情を以
 て良心の起源を説明し得ば良心起源の論は既に決りしものを見ても可
 り而して利他的性情の起源 **詳**
 下等動物に於てすら利他的性情の起源は闡明し難しとせばまして人類に

大日本女學會原稿紙

利他的性情の分析 (別也)

於ては姑く之を以て原始なものと見ても敢て甚しく不可なりとはお	らぬ故に姑く茲には人間と稱せられたる性質に於て既に利他的なものは社	会的性情を	含み居ると	考ふべし	今茲に利他	的と名く	性情を具既	に奈達した	る状態に就	いて分析す	るに三個の	要素を察見	す第一他人
同に於ては凡て心的作用の複雑高きものなり後、此性情	も亦類々複雑なるものなり是れ居るは勿論なり故に吾人が茲	に利他的性情と名くものには固より單種の差別あり人	間に於ては凡て心的作用の複雑高きものなり後、此性情	も亦類々複雑なるものなり是れ居るは勿論なり故に吾人が茲	に悲仁愛と名くものには比せば、下等動物に於ける利他的性情	の作用は甚だ單種なるに相違なし、下等動物同に利他的性情	の現すものは如何なる関係の中、於てかと思ふに、先づ	此牡雄雄の關係又親子の關係次に相群を為す者の關係又次	に個々の動物が特別に親長を共にするの關係の四種を指稱	し得べし、此牡親子の情の深きは下等動物に於てすら驚くべ	堪へたるものあり、又群を為すもの、同じ一般に相助くるもの	性情を察すよりみよらば、特別に個々の動物の間に相群の相	親むる情を起して殆ど友愛と稱しつべき關係を成すものあり

大日本動物學會原稿紙

の悲み悲
 喜びを
 喜びの心次に他人其者を悦ぶおもむく心
 即ちその者と共にふり又其者の事をも念頭に浮かぶことだに悦ぶ思ふ心
 第三に他人の為にすることを
 求むるの心あり此三者は皆相互の關係の密なものである殊にその關係の密なる第二と第三とを合して通常之を愛情と名け第一を別にして同
 感又は同情の性と名く第二と第三とは殆ど相離す可らざるものにして若し或人も悦ぶの心あらばおのづから其人を悦ばざる事をも悦ぶべし故に自然とその人の為を計るの心を生かべし右第三の要素を押し擴むれば人類一般又ふも廣く云へば凡べて有情の者とその有情の者たるの故を以て幸ひせんとするの心即ち

世に所謂博愛の心と云ふ
 所謂「カイドウイ」の謂ひなり
 第二の要素を高尚にす
 世に博愛と稱するものは其愛情の対境
 れば人間を人間として
 たり人を悦ぶの心より寧ろ其人の為にす

り
 幸ひせんとするの心とす
 世に博愛と稱するものは其愛情の対境

107
~~108~~

利他的性
情の目的
と動力

してその感か其行為を喚	愛情との差別を陳ぶる所を考へてし	不快の感を覺し居りて而	と養ふる所をふり附録	識を顧るに自身に快又は	此行為を喚起するに於て第二又第三の要素	ある一種の動力あり。此動力	力に動かさるる吾人の行為を喚起する時の心	右三個の要素を合したる利他的性情は、是れ吾人の行為を動かす能く	らくとするの心は即ち惻隱の心と稱するもの也。	のみより頻りに著し、其程度によりて喚起するを得べし。他人の苦痛を除く去	みよりては喚起し易からず、他人の苦痛を除く去るの作動は同感の作用に	より著しく能く大なる故に、他人の快樂を増すの行為は、是れ同感の作用に	の悲れと恐むるの心（即ち同悲の情）が他人の喜びを喜ぶの心（同喜の情）	て愛人の情と云ふを得べし。第一の要素たる同感の作用に於ては、通常他人	の心と云ふ。此心は情愛と共に愛情の最も抽象的なるものにして之を名付	向むるの故を以て悦ぶし。	を求むるの心が著大なる部分と在り居るが如	言は獲ふれば凡てこの人
-------------	------------------	-------------	------------	-------------	---------------------	---------------	----------------------	---------------------------------	------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	-----------------------------------	--------------	----------------------	-------------

大日本女學會編輯部

託す動力の一部とあり居るは疑を容れざらん。若し自身に苦痛
 を感ずるをよく従つて他人の苦痛を見よと之を想像し言得ずるをよく
 ば決して同感的行為に出でざるべし。謬に我身をつみて他の痛れさを知れ
 と云ふ如く更に同情の行為に出でんには先づ自身に曾て苦痛を経験せし
 をありて而して他人が苦痛を愛したるをよく時之を見て自身にも同じく苦
 痛を感せざる可らず。且又他人を戀愛してその人の為には百年の生命も惜
 しからざると思ふ時に我身自ら其人に対して快感を感ぜずればあらざる
 して此心識が愛他的行為を喚起する動力の一部とあり居るは決して否む
 の理由ふからん。是を以て或者は愛他的行為も畢竟するに自身の快樂の爲
 めにするものありと云ふ。或は行為の動力と其目的とを混同したる謬見
 あり。行為の目的と其動力と同一融合するを固よりよきにあらざる。然れども
 其動力とあり居るもの必しも其目的にはあらざる。自身に苦痛を感して而して
 その苦痛が一の動力とありて我行為を起す場合にも、我行為の目的は依然
 として他人の苦痛を除くを以て得。即ち他人の不幸と氣の毒に思ふ。

大日本女學會取組

愛情と
血の衝動
の衝動

の人を助けんとす。行爲に於ては、その苦痛を見たりて、我が同感して
 得る苦痛が、我行爲の一の動力（行爲を起す一の心的作動）とあるべき
 も、我が感ずる苦痛を避けんとなす。が、我行爲の目的には、あらず。其目的は、他
 人の苦痛を去るにあり。又我愛する者とは悦ばしむるは、我に取て、快樂の
 一原因にして、その快樂を感ずるに、我が我行爲を起す一の動力とあるべきも、
 我快樂を増すと、が、行爲の目的に、あらず。我が愛する者に、快樂を興ふる事は、
 其目的より、其如き場合に於ては、行爲の動力は、譬へば、車の並流力の如く、其
 目的の車を達せんとす。停車場の如し。且、又世に愛情と稱するものは、
 吾人の心的傾向若し、は、傾向と名くべきものにして、其特殊の性質とす。
 所は、その傾向の対境に向つて、吾人の傾き動くにあり。若し、其対境に到達す
 るを得て、其傾向を満足せしめば、よ、に一種の快感を生かす。此れ、必しも、始
 より、其快感を得んとの目的を以て、傾向を起し、には、あらず。先づ、傾向あり
 て、而して、後之を満足せしむ。時に、始めて、快感を覺ゆるあり。傾向の目的
 は、只、其向ふ如く、趣くにあり。恰も、羅織の北に向ふ如く、吾人の性情に、其は

大日本女子學會原稿紙

小の傾動は自然に其対象に向て行く。即ち傾動には内より自然に或外物に
 向かへてその向て行く趣あるあり。何故かは知らぬも内より自然に
 或物の方へ寄り近づく心地あり。と云ふが是れ傾動の傾動たる性質に
 して而して故の「寄り近づく」て小心地は我自身の快感を心に浮べて之
 を目的とするに先ちて存在し得るものあり。然れども一旦その寄り近づく
 て小心地（即ち傾動）の対象に達してその傾動を満足せしめたる上は其
 満足の結果として必ず快感を生じ来る故に後述復れ同様の場合に於てそ
 の傾動を満足せしめんとす。時には曾て感しれた快感を想ひ出して之を
 亦むるの心識も固よりあり得べきあり。言へば換ふれば想ひ出た快感が本
 来の傾動に加はり来りて行為の「動力」とするとも固よりあり得べき不
 り。其比きと小意にあり得べきのみならず吾人の「複雑なる性情の衝動」に於て
 は却て右兩種の要素（即ち傾動の自発と快感を求むるの心と）が「密に
 相和合し居る」場面の多きを見る。然れども彼と致とは其性質に於て決し
 て混同すべきものにあらざり。故に故傾動を以て根本の性質とす才所の愛情

大日本女學會原稿紙

カウインの考説

利他的性情と良心の起原

別

を一切捨去りて皆自利心（即ち我自身の快楽を以ては厚生を有心識に目的とする心）に萌芽するものなりと云ふは甚しく僻事たる可らば愛情の対境は何如すや一人自身にあらざりて他人にあらばり

右場於て利他的性情を分析は少しく議論の岐路に入らば如き親戚

れども其性情の何れをも明にせ人か為には茲に一応其心理的分析に入

る必要ありと思惟したり。『諸君今析したる利他的性情によりて以て良心の起原を説明し得べき乎古の性情は良心の起原に對して何なる關係を有する乎皇ル予輩の次に攻策せむとす。問題あり。

利他的性情を以て良心の起原を説明せんとす。考説の最好の例と見れば

きはカウインの「ダウイン著「フィッセン」外「ウマレ」第三章を見よ。如

の説く所を以て人アウインが社会的本能と稱するものと云ふに利他的性

がアウインの考情と名けしものとは全く同一義のものにはあらざれば

ふこ所に於れば茲に提出せんとす。諸点に取つては敢て其同一區別を

吾人に社会的とをす。カウインの社会的本能と名くもの

大日本女學會原稿紙

能

能
 其作動は他の事
 能に較ぶれば
 も同断よく表現
 するものあり故
 に一旦その作動
 の需用を満足せ
 しむるも決して
 それにて全く其
 跡を収めて唯た
 暫しふりとも信
 と忘れ果てた
 か如きものとは

も、予が利他的性情と名けしものも良心の記号の説明と為さん
 とす。上はたは其要旨とす。所以に於て是と相異らざるが
 故に予は外ア内イの説を掲げて、予が茲に **批判** せんとす
 考説の最好の例を見做したり。
 茲に本能と名くすものは **(尤も老翁に明晰な定義は下し難
 ければ)** 多力複雑なる作動を天性 **心** 為す **物** 能ふりと云ひ可
 ぶる鳥が巢を作り、小児が母乳のすべを知り居り如きは即ち
 本能あり。又最も廣く意味にては、**餓** えて食を求め渴して水を求
 むるも同じく本能が作動ありと云ひて不可あらん **社会的** 本
 能は吾人類の性是たる所以して他人の安寧若しくは厚生を
 以て其有心識の又は無心識の目的とすものあり。然れども本
 能の働は何如に始まりて何如に終了かは明に区劃するを得が
 るべし。蓋し本能とは至解如何なるものや如何にして生起せし
 むのありかとのことは、予猶ほ甚だ不明なり。同題に属すればあり。

90

9

...



自ら蓋し自己の存在を目的とす。食欲の如きは一時は如何にその需要の激烈
 たるも若し一旦之を満足せしむれば暫時は全く忘れ果てたり。加ふるもその
 復た之を念頭に浮ぶることも為し難く。他人の存在を目的とす。社会的
 本能は縦令の一旦其作動を現し了りても、その後に全く其跡を収むることも
 忽ち復
 ら心識に現し来り得るものあり。例へば親が子を愛す。心の如きは食を得て一旦
 食欲を忘るゝ如く、忘れ果つものにはあらざり。且又社会的本能は假令一時他の激烈
 なる本能の爲りに壓倒せらるゝとあるも、忽ちにして復た其頭を擡げ来りて已を
 満足せしむるべき作動を促すあり。故に若し心中種の作動を思ひ浮べ之を比
 較するに知力を有する迄に吾人の精神の榮達したる時には、同断なく榮動せんと
 を求むる社会的本能は吾人の作動を促すに於て大に力あるものとて現し来る
 べし。而して其本能の榮動は是れまた一種の傾向と稱す可きものにして、内より自
 然に或る事柄に向つて作動を發起せんとを促すものあり。故に其榮動は吾人加性
 の要素とも謂ふべく、又その内より押し出たて或作動を爲さしむるの心地に就
 いて云へば、一の衝動とも謂ふを得べし。此榮動の不断なる本能（即ち社会的本能）

東京專門學校原稿紙

119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200

の要が (アウの脱以後)
 吾人の所謂善務の心識 (ありてし
 て心識) の根元より或る事をせぬ
 は去らぬと覺わすは吾人の本能が其
 作動に出でんを求むるの心識以外
 あり即ち良心の命令と名くすものは吾人の不断ある本能の要求に業しれども
 の以外に
 らか (附) 生得 (或は或るか習得) の本能が存在する心識を意味するものに外
 観事二を ありかか如し此本能は識して吾人が行為の指導とありたものあり心
 見ゆ何 吾人は或はその心を顧みざるをありありせし極大は極才なりもの...
 故危難に と言ふそのべいして語は故に譬喩の語とみ見ざるからず却て殆ど
 殆ど人 其真意を表すにありあり此等の動物若しその如き作動を為すべく
 を見れば は見れば其の善務の善務を為さざるあり是れ彼等の所為より不正なるあり
 故は水は (テセトオウマニ第一冊第八十八頁二一〇一三十八頁七一三頁版)

東京専門学校原稿紙

力脚注等、亦頁、方、共、(3)

114
 吾人の所謂善務の心識 (ありてし
 て心識) の根元より或る事をせぬ
 は去らぬと覺わすは吾人の本能が其
 作動に出でんを求むるの心識以外
 あり即ち良心の命令と名くすものは吾人の不断ある本能の要求に業しれども
 の以外に
 らか (附) 生得 (或は或るか習得) の本能が存在する心識を意味するものに外
 観事二を ありかか如し此本能は識して吾人が行為の指導とありたものあり心
 見ゆ何 吾人は或はその心を顧みざるをありありせし極大は極才なりもの...
 故危難に と言ふそのべいして語は故に譬喩の語とみ見ざるからず却て殆ど
 殆ど人 其真意を表すにありあり此等の動物若しその如き作動を為すべく
 を見れば は見れば其の善務の善務を為さざるあり是れ彼等の所為より不正なるあり
 故は水は (テセトオウマニ第一冊第八十八頁二一〇一三十八頁版)

自ら、^{手。}ぬと覚知す。見れ他あり。吾人の社会的本能は、其活動の要求の不断なるは、
 他の活動の要求の唯一時あり。本能に比おれば、吾人の行為を指定すに取れて
 一層の重みあるが故あり。試に社会的本能が活動せしむるを求めしに拘らず却て
 他の活動の唯一時あり。本能の方向に従ひたりと假定せよ。此の如き場合に我が心中
 を顧みれば、活動の只一時あり。本能よりも尚ほ一層明瞭に想像に浮べ得べく又
 断え、活動を促すべき社会的本能が忽に其頭を握り来りて吾人のそれに従つて
 活動せんを求めて止まらざるを覚ゆべし。之に及して活動の只一時あり。本能の
 要求は、(右の場合に於ては) 既に一旦を満足せしめたる後より故に再び心識
 に浮べんとす。も容易に浮ぶるを得ず。却て全く其跡を収めて向如に逃れ去り
 しかの如くに思はるゝ。或る人。此時に於ては、何故活動の不断なる。本能に従はずし
 て却てその唯一時あり。本能に従はずしか。強て我と我心を異しむばかりあり。此
 時に於ては、活動の唯一時あり。本能の要求に倣ひ及して、活動の不断なる。本能
 に従ひたらばよかりし。或る人。誰しと思ふ。或る人。而して斯く思ふ心に彼所謂
 良心の不安の存するあり。又斯く思ふ心の強くなるに從ひ、之に良心の責め、又は

東京専門學校原稿紙

自ら、ぬと覚知す。見れ他あり。吾人の社会的本能は、其活動の要求の不断なるは、
 他の活動の要求の唯一時あり。本能に比おれば、吾人の行為を指定すに取れて
 一層の重みあるが故あり。試に社会的本能が活動せしむるを求めしに拘らず却て
 他の活動の唯一時あり。本能の方向に従ひたりと假定せよ。此の如き場合に我が心中
 を顧みれば、活動の只一時あり。本能よりも尚ほ一層明瞭に想像に浮べ得べく又
 断え、活動を促すべき社会的本能が忽に其頭を握り来りて吾人のそれに従つて
 活動せんを求めて止まらざるを覚ゆべし。之に及して活動の只一時あり。本能の
 要求は、(右の場合に於ては) 既に一旦を満足せしめたる後より故に再び心識
 に浮べんとす。も容易に浮ぶるを得ず。却て全く其跡を収めて向如に逃れ去り
 しかの如くに思はるゝ。或る人。此時に於ては、何故活動の不断なる。本能に従はずし
 て却てその唯一時あり。本能に従はずしか。強て我と我心を異しむばかりあり。此
 時に於ては、活動の唯一時あり。本能の要求に倣ひ及して、活動の不断なる。本能
 に従ひたらばよかりし。或る人。誰しと思ふ。或る人。而して斯く思ふ心に彼所謂
 良心の不安の存するあり。又斯く思ふ心の強くなるに從ひ、之に良心の責め、又は

自ら、ぬと覚知す。見れ他あり。吾人の社会的本能は、其活動の要求の不断なるは、
 他の活動の要求の唯一時あり。本能に比おれば、吾人の行為を指定すに取れて
 一層の重みあるが故あり。試に社会的本能が活動せしむるを求めしに拘らず却て
 他の活動の唯一時あり。本能の方向に従ひたりと假定せよ。此の如き場合に我が心中
 を顧みれば、活動の只一時あり。本能よりも尚ほ一層明瞭に想像に浮べ得べく又
 断え、活動を促すべき社会的本能が忽に其頭を握り来りて吾人のそれに従つて
 活動せんを求めて止まらざるを覚ゆべし。之に及して活動の只一時あり。本能の
 要求は、(右の場合に於ては) 既に一旦を満足せしめたる後より故に再び心識
 に浮べんとす。も容易に浮ぶるを得ず。却て全く其跡を収めて向如に逃れ去り
 しかの如くに思はるゝ。或る人。此時に於ては、何故活動の不断なる。本能に従はずし
 て却てその唯一時あり。本能に従はずしか。強て我と我心を異しむばかりあり。此
 時に於ては、活動の唯一時あり。本能の要求に倣ひ及して、活動の不断なる。本能
 に従ひたらばよかりし。或る人。誰しと思ふ。或る人。而して斯く思ふ心に彼所謂
 良心の不安の存するあり。又斯く思ふ心の強くなるに從ひ、之に良心の責め、又は

前考定との比較

答めよといふ名称を附すれど、要するに皆衝動の不断なる本能を満足せしめよ
 より生かす心識に外ならず。則ち良心も亦くる心識は吾人が過去を想ひつゞけ
 の想念を思ひ較びしにいつて、衝動の不断なる本能の衝動を置きよりして生じた
 結果に外ならず。一言に云へば、良心は衝動の不断なる社会的本能の要求に生じ
 たもの也。
 右はかアウツの良心の起源を説明すよ。要旨は、其れを説明すは、
 同題に、今、解答を要す。抑もかアウツの多説に就きて予算の最も注
 目すべきは、吾人の本能の衝動（即ち或意味にて衝動又は傾動とも稱すべき）
 のによりて、此の良心の起源を説明せんとす。此の点に於て、蓋し此点か吾人の説の
 骨髄と云ふべき如にして、吾人の所謂衝動の衝動
 の起源を多少説明し得るかの如くに思はる。予算は、吾人の（即ち云ふと、
 は、ふらぬと云ふ）心識に附する衝動は、言語に於て、何と云ふれば、
 心識には、三は、内より衝き、動かし、抑へ出たりて、或行為を為さしむる
 か、如きか、心地あり。故に此点に於ては、社会的本能若しくは利他的性情を以

目録に良心の作用を分析するに當りて、
 を附したり

予算の前の横に

16頁を
 見よ



右の如きか、心地あり。故に此点に於ては、社会的本能若しくは利他的性情を以
 一衝動と云ふべき如くに思はる。予算は、吾人の（即ち云ふと、
 は、ふらぬと云ふ）心識に附する衝動は、言語に於て、何と云ふれば、
 心識には、三は、内より衝き、動かし、抑へ出たりて、或行為を為さしむる
 か、如きか、心地あり。故に此点に於ては、社会的本能若しくは利他的性情を以

批評、甲
義務の心
機にこそ

て良心の起原を説き明さんとした考説は、かの獨り難した(針叟の制裁を唯一の標準とした)考説に比すれば、多少問題の說明に堪ふか如き所ありと思はる。是全く上にも既に一言し置きたる如く、内より業起衝動たる本能を假りまゝに、かの針叟の影響をのみ諸の偏頗たる考説の結晶を避けたるが故あり。夫れ彼の偏頗たる考説を看目する所は、専ら針叟の制裁又其制裁の訴ふる所たる恐怖の念により、故に其考説に於ては、良心の權威を由て來る所を説くに、全く後者の威迫と比して、オコシの針子も、之に及して、吾人の本能を基準とした考説の最要點とす。所は自來の衝動に由る故に、良心の權威を説明するに吾人の内より自然に業起する性も本能を以てオコシを得るふり。而して此衝動又要點は、吾人の生來具存する所に是て不可ふからん。

斯の如く本能の業動を基準とした考説は、針叟の倫理論に於ては、諸の考説に比ぶれば、頗る勝る所あり。故に之に於ては、以て吾人の問題を解説し、オコシか如くは、思ふ人もあり。然れども、是れを決定して完全の說明とは云ふ可からず。只社会的本能にのみ義務の衝動を歸せんとす。オコシの一点に於ても、既に従ふに諸論を狭くす。オコシの

性本能
勝る所あり
是の
勝る所あり
勝る所あり

て良心の起原を説き明さんとした考説は、かの獨り難した(針叟の制裁を唯一の標準とした)考説に比すれば、多少問題の說明に堪ふか如き所ありと思はる。是全く上にも既に一言し置きたる如く、内より業起衝動たる本能を假りまゝに、かの針叟の影響をのみ諸の偏頗たる考説の結晶を避けたるが故あり。夫れ彼の偏頗たる考説を看目する所は、専ら針叟の制裁又其制裁の訴ふる所たる恐怖の念により、故に其考説に於ては、良心の權威を由て來る所を説くに、全く後者の威迫と比して、オコシの針子も、之に及して、吾人の本能を基準とした考説の最要點とす。所は自來の衝動に由る故に、良心の權威を説明するに吾人の内より自然に業起する性も本能を以てオコシを得るふり。而して此衝動又要點は、吾人の生來具存する所に是て不可ふからん。

した後にその思い浮かべらるゝの点即ちその想念さるゝの点に於ては大に自衛の
 ものと異りて、何時にてもその明かに思ひ浮かぶを得たりと。果してその如くあ
 り手、社会的才能の活動を浮かぶとは全射如何なるを云ふべき乎。惟かに其活動
 を喚起したる境遇を想像して、而して之を想像すると共にその境遇に伴隨する感
 情をも浮かぶ（多くの場合に於ては只に薄々）浮かぶ出たると云ふに非ざらば
 べし。抑も吾人の最も思ひ浮かぶ易しとするものは知識上の事柄なり。知識上の事
 柄を婦女とせざして、直接に感ずる感情を浮かぶとするは、吾人の殆ど為し得ざりし
 所なりが如し。又假令知識上の事柄の婦女によりて或る感情を思ひ浮かべ得たる場合
 にも、其感情は決して知識上の事柄程、容易に又明に思ひ浮かべりしものなり。其
 多くは只に薄々と思ひ出たるとして、過かたか故に凡そ一の事柄を記憶し得
 る、想像し得る、思ひ出たし得る程度は其事柄の社会的美しくは自衛の名に於てし
 性望に懸らざして、明瞭なる知識の予を會むの多少に懸る。然れば自衛の才能の
 活動も、若し知識の予と相結合するを多く且密する時は、その想念し得る程度
 は決して一歩も社会的才能に譲らざる者にあらず。而して自衛のものは既に社

東京専門學校印刷部

情を浮かぶ... 知識上の事柄... 社会的才能... 自衛... 想像... 感情... 知識... 社会... 才能... 自衛...

社會的
本能の
強弱と
本能
の
強弱

社會的本能に比して知識的分子を含むもの少しとは云はれず、故に若し今云
 ふ点に於て區別を立てんと欲せば、社會的とは云はれずして寧ろスペンサー氏の説に
 所謂「インテリゲンチヤ」概念的な語を假り来りたり方勝らんと思はる。夫のスペンサー氏の説に
 就いては後に辨かす所ありしべし。
 且又社會的本能と其他の本能とを強弱の点に就いて比ぶると、前者の強弱は總して
 後者の強弱より強しとは云ふ可らば却てその弱き場合少きにあらざらん。蓋し其
 如き場合の少きは故に仁愛の行為に出でたり却て私慾我慢を逞くしたり
 者多きにあらば而して若し吾人の義務の知識（即ち或事をせぬはあらぬと
 覺る知識）は吾人の**本能**の強弱衝動也なりとすべし。要求より生じたりとすべし
 其知識は本能の社會的なり又は社會的なる如く拘らば、但し其衝動也なりと
 する要求の強きものに於ては皆附屬すべき筈なり。故に若し社會的本能と他の本能
 とを一瞬に相面立すとすべし能はずして、後者が前者より其強弱の即ち強き場合に
 は、本能は自ら心識は前者に附屬するより寧ろ後者に附屬すべき筈なり
 人然らば則ち義務の知識も亦強き本能に強き衝動に社會的本能の要求に如くとはせずして

東京專門學校原稿紙

社會的本能に比して知識的分子を含むもの少しとは云はれず、故に若し今云
 ふ点に於て區別を立てんと欲せば、社會的とは云はれずして寧ろスペンサー氏の説に
 所謂「インテリゲンチヤ」概念的な語を假り来りたり方勝らんと思はる。夫のスペンサー氏の説に
 就いては後に辨かす所ありしべし。
 且又社會的本能と其他の本能とを強弱の点に就いて比ぶると、前者の強弱は總して
 後者の強弱より強しとは云ふ可らば却てその弱き場合少きにあらざらん。蓋し其
 如き場合の少きは故に仁愛の行為に出でたり却て私慾我慢を逞くしたり
 者多きにあらば而して若し吾人の義務の知識（即ち或事をせぬはあらぬと
 覺る知識）は吾人の**本能**の強弱衝動也なりとすべし。要求より生じたりとすべし
 其知識は本能の社會的なり又は社會的なる如く拘らば、但し其衝動也なりと
 する要求の強きものに於ては皆附屬すべき筈なり。故に若し社會的本能と他の本能
 とを一瞬に相面立すとすべし能はずして、後者が前者より其強弱の即ち強き場合に
 は、本能は自ら心識は前者に附屬するより寧ろ後者に附屬すべき筈なり
 人然らば則ち義務の知識も亦強き本能に強き衝動に社會的本能の要求に如くとはせずして

後りに不
断也
故義務
の心識を
生ずる
也か。

卒に單に若し衝動の極は本能の要求にありと云ふを去りとす。畢竟すに一本能
 の衝動極めて極き場合には其衝動が多人数の要求を言す了又は言せざるに拘ら
 ず。必らず若し心識を覚知すて言ふる人。然れども若し果して吾人の道德的心識
 に契合す了るを去りて、悔れ老人の本能の中には多人数を言す了にも拘らず自己一
 人の利益を計るに傾くものは決して去しと云ひ得る乎。或人は云はん、義務力
 心識の純潔を説明すに取つて緊要す了は、本能の衝動は只れ一時の脆弱に由
 らず、其衝動の不断さるるが在かに云ふにありと。然れども社会的本能の衝動を見て
 殊更に不断さるものとし、其他の本能の衝動を見て不断さるものとしたるは已
 別は、決して正確ならずかたしは既に上に論したる所あり。然し假りに社会的本能
 の衝動を持に不断さるものに見做すも、其不断は女性習を以て義務の心識の純潔
 を説き明し得んは、予等の見ら所にして、到底望むべきものにあらざ。請ふ以下高厚細
 しく之を論せん。試に甲より本能の衝動を不断さるものとし、乙より本能の衝
 動を不断さるものとし、而して其兩者の要求の間に争ひ起りし場合にありて想
 像せよ。假し乙より本能は不断に衝動せざるものたりても、其衝動すにありては甲

東京専門学校原稿紙

此の衝動は、其の衝動の極は本能の要求にありと云ふを去りとす。畢竟すに一本能
 の衝動極めて極き場合には其衝動が多人数の要求を言す了又は言せざるに拘ら
 ず。必らず若し心識を覚知すて言ふる人。然れども若し果して吾人の道德的心識
 に契合す了るを去りて、悔れ老人の本能の中には多人数を言す了にも拘らず自己一
 人の利益を計るに傾くものは決して去しと云ひ得る乎。或人は云はん、義務力
 心識の純潔を説明すに取つて緊要す了は、本能の衝動は只れ一時の脆弱に由
 らず、其衝動の不断さるるが在かに云ふにありと。然れども社会的本能の衝動を見て
 殊更に不断さるものとし、其他の本能の衝動を見て不断さるものとしたるは已
 別は、決して正確ならずかたしは既に上に論したる所あり。然し假りに社会的本能
 の衝動を持に不断さるものに見做すも、其不断は女性習を以て義務の心識の純潔
 を説き明し得んは、予等の見ら所にして、到底望むべきものにあらざ。請ふ以下高厚細
 しく之を論せん。試に甲より本能の衝動を不断さるものとし、乙より本能の衝
 動を不断さるものとし、而して其兩者の要求の間に争ひ起りし場合にありて想
 像せよ。假し乙より本能は不断に衝動せざるものたりても、其衝動すにありては甲

あり本欲より却て激烈なるをあるべし (見ればその考説を採る者も予輩
 と共に承認す所ありん) 而してその如き場合に於て甲は本欲に反して
 本欲の激烈より (然るに一時あり) 奮動して行爲を定めたりと想像せ
 よ (是れ又あり得べき事) 一何人し事なす所ありん) 且時以ては乙は本
 欲の一時の要求は全く満ち足りて暫一の間は其痕跡を以て止むが如くあら
 ん。然るに之に反して甲は本欲の不断の要求は、障礙を委ねたるの故を以て久し
 く其人をして心に満ち足りかすの思を懐かしむるあらん。而して此の如き事を度
 と経路したる後に復甲乙の本欲相争ふの場を起しし時は、過去の経路出たが故に、
 若し復た乙は本欲に從ふれば、矢張り再び満ち足りかす心地を久しく覺えが
 たり得べしと承認す所あり。然るに一方の本欲にはせぬば、故らぬと云ふ心識を
 伴はしめ、他に反する伴はしめかすか如き巨大なる差別の何故生し来りかは予の
 解せしむる所あり。假令度々の経路によりて甲は本欲の要求を不断たりと知り
 たるは、とて何故乙は殊更に義務の心識を伴はしむるに至りし乎。甲は本欲とて

東京専門學校原稿紙

あり本欲より却て激烈なるをあるべし (見ればその考説を採る者も予輩
 と共に承認す所ありん) 而してその如き場合に於て甲は本欲に反して
 本欲の激烈より (然るに一時あり) 奮動して行爲を定めたりと想像せ
 よ (是れ又あり得べき事) 一何人し事なす所ありん) 且時以ては乙は本
 欲の一時の要求は全く満ち足りて暫一の間は其痕跡を以て止むが如くあら
 ん。然るに之に反して甲は本欲の不断の要求は、障礙を委ねたるの故を以て久し
 く其人をして心に満ち足りかすの思を懐かしむるあらん。而して此の如き事を度
 と経路したる後に復甲乙の本欲相争ふの場を起しし時は、過去の経路出たが故に、
 若し復た乙は本欲に從ふれば、矢張り再び満ち足りかす心地を久しく覺えが
 たり得べしと承認す所あり。然るに一方の本欲にはせぬば、故らぬと云ふ心識を
 伴はしめ、他に反する伴はしめかすか如き巨大なる差別の何故生し来りかは予の
 解せしむる所あり。假令度々の経路によりて甲は本欲の要求を不断たりと知り
 たるは、とて何故乙は殊更に義務の心識を伴はしむるに至りし乎。甲は本欲とて

此本條 理由 如何

而してその如き激烈なる不満 (乙より本能を満足せしめざる限りは何時にても
 断えず激烈なる不満) と甲より本能を満足せしめざるより起る不満 (即ちその
 本能を満足せしめずば言返り経験に占りて乙より本能を満足せしめたる後には
 必ず之しくならずしと知り居る不満) とを比較せば其兩者の相違は時に占りて
 孰れの方に吾人の行爲を要求する最も強き勢力を帰すべき乎其の
 如き時に占りて孰れが勢力第一かは権力が最も強きものを断定するは合宜論議し
 りたる分りしを説き論じたり見ては、更にむつかしき判断と謂はば可らず。強
 と孰れを定めて國威を掲げ難からんを正論。又彼を其間に幾分の差等を発見し
 得とすも、一方には (即ち本断する甲より本能に日) せぬばあらぬと云ふ義理の
 心識の伴ひ、他方一方 (即ち不断する乙より本能) には其の如き心識が伴はず
 と云ふ程の巨大なる差別があるべしとは (カアウインの考説を論じたる同日)
 決して是は小かすあり。

且又カアウインの言に「吾人が文化に進み、小種族の社会
 となすに後、最も第一なる道理の上より見ては、吾人各
 種族の社会」

相合して

東京專門學校原稿紙

第一冊第九十之頁

此本條 理由 如何

而してその如き激烈なる不満 (乙より本能を満足せしめざる限りは何時にても
 断えず激烈なる不満) と甲より本能を満足せしめざるより起る不満 (即ちその
 本能を満足せしめずば言返り経験に占りて乙より本能を満足せしめたる後には
 必ず之しくならずしと知り居る不満) とを比較せば其兩者の相違は時に占りて
 孰れの方に吾人の行爲を要求する最も強き勢力を帰すべき乎其の
 如き時に占りて孰れが勢力第一かは権力が最も強きものを断定するは合宜論議し
 りたる分りしを説き論じたり見ては、更にむつかしき判断と謂はば可らず。強
 と孰れを定めて國威を掲げ難からんを正論。又彼を其間に幾分の差等を発見し
 得とすも、一方には (即ち本断する甲より本能に日) せぬばあらぬと云ふ義理の
 心識の伴ひ、他方一方 (即ち不断する乙より本能) には其の如き心識が伴はず
 と云ふ程の巨大なる差別があるべしとは (カアウインの考説を論じたる同日)
 決して是は小かすあり。

且又カアウインの言に「吾人が文化に進み、小種族の社会
 となすに後、最も第一なる道理の上より見ては、吾人各
 種族の社会」

相合して

加自国の総べての人との近 (縦合ハ親しくは相識らぶる者にも) 社会的本能又
 同感性情を押し及ぼさぬはふらぬと云ふをを知る。 (此處は精神の) 第一耳目
 人の業達か此点に到達すれば其後吾人が同感の情を押し横めて凡べての国民又
 凡べての人種に及ぼすには其れ自然ふらぬ (只此の如きと設けたる) 障礙物あり
 ぬか」云へり。 (此れと社会的本能が實際に及ぼさるる) 自
 到達せしむる処 (即ちその本能業達せんとすを亦わたり) には此れを押し及ぼさ
 ぬはふらぬと云ふ心識を何故吾人は起し得る又起すべし乎 假りば社会的本能によ
 りて此事を為さぬはふらぬと云ふの心識を生じたりとすも、それは只此の本能の
 働く所 (即ちその業動せんとすを亦わたり) の範囲内に於てのみあり得るに
 て其範囲外に於ては事柄に違ひなく収めらぬと云ふ心識を附着せしむべき
 理由ありと見す、即ち収めらぬと云ふ心識が社会的本能の前立ちて其本能の
 当に撞壊すべしと範囲を指示し得る。 理由と見ざる蓋し社会的本能の業動に
 よりて始めて生起す心識がその本能の業動に先立ちて其本能の及ぼさるるに近
 も及ぶべし道理ありし故に一言に云へば、社会的本能の既に業動す事柄

東京専門學校原稿紙

1) 此圖点は予の附したる所

此の如き業動は、吾人の生活に於て、常に起るる事柄に對して、
 心算の如き、或は、
 此の如き業動は、吾人の生活に於て、常に起るる事柄に對して、
 心算の如き、或は、
 此の如き業動は、吾人の生活に於て、常に起るる事柄に對して、
 心算の如き、或は、

自家の考柄の

己が社会的本能のみにては良心の起原を説明するに足らざるは尙ほ他は
 アウレの自ら云ふ所を以て推知し得らるべし。其言は曰く「吾人を以て判断し
 感はしむる原因は固より一にして是らがるも一般に云
 へば吾人は容易に道德的現持を低下を判別し得るあり。其
 此第一冊早稲大文庫
 己が社会的本能のみにては良心の起原を説明するに足らざるは尙ほ他は
 アウレの自ら云ふ所を以て推知し得らるべし。其言は曰く「吾人を以て判断し
 感はしむる原因は固より一にして是らがるも一般に云
 へば吾人は容易に道德的現持を低下を判別し得るあり。其
 此第一冊早稲大文庫

東京専門学校出版部

己が社会的本能のみにては良心の起原を説明するに足らざるは尙ほ他は
 アウレの自ら云ふ所を以て推知し得らるべし。其言は曰く「吾人を以て判断し
 感はしむる原因は固より一にして是らがるも一般に云
 へば吾人は容易に道德的現持を低下を判別し得るあり。其
 此第一冊早稲大文庫

此圖は早稲大の...

(批評) 美善の 感別 についで

規律の爲事あり方は社会的本能に基きて他人の安寧に同一且吾が同輩の利益と
物の道理とを以て後論とありしものなり

良心の紀律を論ずるの章を讀みて右の言に至り「道理とを以て」の一語に遭遇
したる時には、恰も其語の天外より落り来りしが如く此思ひたり。此道理ありし
は、ガアウの考説に於ては如何なる地位を占むべきの事乎。予は之を審みたり
能はず。蓋し社会的本能の発動する心識、此自身かぬばぬて心識として現
し来ると云ふより外に、其本能の発動に從はぬばぬて道理と云ふものありと
云はじ。是れ良心の託蒙の論に全く新一頁の頁を以てし。彼と此とは全く
異れり。見 地 謂ひつてし。

且又右云へる所は吾人が良心を名くしたる心的作用を只我我の衝動即ちぬばぬ
ぬと云ふ心識のみ見做しての事なり。良心を唯我我の心識と云ふ見做すは
決して其当を得たりものにあらず。良心の作用の中には是れ美善の語にありて
表する識別又感別をも含めざる可らず。而して此等々感別又識別が如何にして社
会的本能と一は利他的性情より生起したるかば、平常の其の解し難しとす所

東京専門学校原稿紙

心識の
所生ず
しは

良心の紀律を論ずるの章を讀みて右の言に至り「道理とを以て」の一語に遭遇
したる時には、恰も其語の天外より落り来りしが如く此思ひたり。此道理ありし
は、ガアウの考説に於ては如何なる地位を占むべきの事乎。予は之を審みたり
能はず。蓋し社会的本能の発動する心識、此自身かぬばぬて心識として現
し来ると云ふより外に、其本能の発動に從はぬばぬて道理と云ふものありと
云はじ。是れ良心の託蒙の論に全く新一頁の頁を以てし。彼と此とは全く
異れり。見 地 謂ひつてし。

美悪の
識別に
つ

より。今姑く感別の上的のみ執いて云ふ。何故唯だ社会的本能若しくは利他的性情を満足せしめ又はせしめざる事柄にのみ是れ美悪と云ふ一種特殊の感別の附着し来りて其他の本能若しくは性情を満足せしめ又はせしめざる事柄には其感別の附着し来らざる事柄也。此れも共に本能若しくは性情と云ふ見れば其中に右の如き差別を生ずべき根拠あるを我見せざる。則ち社会的本能又利他的性情の活動には何故美悪と云ふ一種特殊の感別の伴ひ来りしかば、又たその本能又は性情たるの性質よりしては、決して説明し得らざる事なり。蓋し一本能を満足せしむるに依りては、其れが快感を生ぜずとせば、唯だ本能の満足として見らざれば、猶ほ他に着眼すべし。其の如き快感を生ぜずとせば、唯だ本能の満足として見らざれば、猶ほ他に着眼すべし。且又美悪の識別に就いて云はば、社会的本能若しくは利他的性情によりて其識別の要素を説明すべし。困難は、今感別に就いて云ひし所よりも、極は更に大なるべし。

治正に

美悪の識別に就いて云はば、社会的本能若しくは利他的性情を満足せしめ又はせしめざる事柄にのみ是れ美悪と云ふ一種特殊の感別の附着し来りて其他の本能若しくは性情を満足せしめ又はせしめざる事柄には其感別の附着し来らざる事柄也。此れも共に本能若しくは性情と云ふ見れば其中に右の如き差別を生ずべき根拠あるを我見せざる。則ち社会的本能又利他的性情の活動には何故美悪と云ふ一種特殊の感別の伴ひ来りしかば、又たその本能又は性情たるの性質よりしては、決して説明し得らざる事なり。蓋し一本能を満足せしむるに依りては、其れが快感を生ぜずとせば、唯だ本能の満足として見らざれば、猶ほ他に着眼すべし。其の如き快感を生ぜずとせば、唯だ本能の満足として見らざれば、猶ほ他に着眼すべし。且又美悪の識別に就いて云はば、社会的本能若しくは利他的性情によりて其識別の要素を説明すべし。困難は、今感別に就いて云ひし所よりも、極は更に大なるべし。

如實と
前未記
と合
教無

善悪正邪の識別が如何にして只だ一種の感情若しくは衝動の如きもの、みより
生し来りしかば予輩の決して解し得ざる所あり。それを解せんには必お若人の心的
現象の種は他の邊に着眼せざる可らず。上に云ふ如く義務の衝動と社会的本能の
衝動とは、その共に衝動たるの邊に於て、多少類似の裏あきにあらざるべし。その
ら全く後者より前者の生し出でたりと云ふを得ず。唯んや善悪の識別又感別に
於てを

上來論述したる所により、親ハ、外界より感迫を以て一個人の恐怖の急自衛的
性情に訴ふるの邊よりして良心の起原に満足ある説明を與へ得ざるのみならず、
内界より自発する利他的若しくは社会的本能を成り来りて、矢張り良心の起原
を満足に説明し得ざるを明あらん。則ち孰れの本説も平等の問題に最後の説明を
與ふるべしにあらざるをば、上來の論述に於て明にし得たらんと信ず。一の本説
は他の本説より、幾分か勝りたる所は、あるあらん。然れども孰れも未だ説明の最
要處を捉らば得たるべし。にはあらざるべし。人感は云はく、然らば西説を會し来り
て、双方の論據より一略に説明せば如何と、此へ此き疑問を起す者は、予輩が右二様

東京専門学校原稿

善悪正邪の識別が如何にして只だ一種の感情若しくは衝動の如きもの、みより
生し来りしかば予輩の決して解し得ざる所あり。それを解せんには必お若人の心的
現象の種は他の邊に着眼せざる可らず。上に云ふ如く義務の衝動と社会的本能の
衝動とは、その共に衝動たるの邊に於て、多少類似の裏あきにあらざるべし。その
ら全く後者より前者の生し出でたりと云ふを得ず。唯んや善悪の識別又感別に
於てを

の考説を非難して良心の起原を説明するに足らずと断したりし論を未だ^見分
 に會得せざる由のあり。若し之を會得せば兩説を別々に見らば又相合(見るべき
 輩の諒念には毫も差響の亦すを知らず。摩特或人をして或行為を為さしめん
 爲に唯在外界の感迫を以て其人の^怖念に訴ふるのみならず其人の惻隱の心
 愛他之情社會的本能に訴ふるを得ば其行為を喚起するに於ては一層の効力ある
 に相違なし。只だ親に訶責せらるゝを恐るゝ小兒あり小愛情を以て怯ばら^小
 又は其親の命令は二重の重みを有すと云ふを得べし。蓋し内方(の衝動と外方
 の感迫と相合する時は行為を喚起するに於て二重の効力あるべけれは亦^然ル
 ども是れ只だ或行為を喚起する効力の強くあると云ふ迄にて其強くありたる
 動力よりして如何にして善悪の識別感別又義務の心識の生ずる^をを説明するに
 は足らざるあり。之を説明せんにには内方(の衝動又外方(の感迫の内に良
 心の起原を説明するに堪ふる要素あるか否かを尋ねざる可らず。予輩は上に論
 述してその如き要素ありと断定したり。その如き衝動本能と感迫と相合したれば
 とい。如何で良心を起せしめんや。その如き心理的化^をは予輩の毫も了

如史書門學校取部

善悪の辨を感迫の相合して起すべし。蓋し内方(の衝動と外方(の感迫の間に
 相合する時は行為を喚起するに於て二重の効力あるべけれは亦^然ル
 ども是れ只だ或行為を喚起する効力の強くあると云ふ迄にて其強くありたる
 動力よりして如何にして善悪の識別感別又義務の心識の生ずる^をを説明するに
 は足らざるあり。之を説明せんにには内方(の衝動又外方(の感迫の内に良
 心の起原を説明するに堪ふる要素あるか否かを尋ねざる可らず。予輩は上に論
 述してその如き要素ありと断定したり。その如き衝動本能と感迫と相合したれば
 とい。如何で良心を起せしめんや。その如き心理的化^をは予輩の毫も了

此の書は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

良心と
 魂の存在
 と見る事
 後

132

解し能はざる所あり。成程、酸素と水素とを合せば液体の水を生ずべし、然れども是
 凡決して別の元素を生せしめたるにあらず。良心はそれと見ゆる所に於てのみ
 外界の強迫又社会的本能と相異るにあらずして、それを形づくる要素に於て相異る
 り。要素素の中に於て外界の強迫又社会的本能より生れ来りしものと見ては決し
 て説明し得ざる所のものあるあり。是れ予輩が今迄右二種の予説を難したる論
 旨あり。若し此論旨を會得して、孰れも予説に於ては良心の起原を説明し得べし
 うすと知了したる上に、魂は其両説を合しおぼえて良心の起原を説明し得ざる
心と同不は、懐く陸よりするも天に昇るを得ず、海よりするも天に昇るを得ずと知
りたる後に、**魂は海陸よりせば次て天に昇るを得ざる**也」と同不か如し。
 右 **ダアウイン** の説に従へば、良心は社会的本能より発生したる者あるが、それとは十し
 と異りて、良心はれ自身を一種の本能と見做すにあり。然れども若し良心はれ自身
 を一種の本能と見做す正が取りしとせず其起原を説明したるものありと思はば、
 それは甚しき謬見あり。假りに良心を一種の本能と見做すは、その如き者等ある本能
 は更に魂は第一なる本能よりして永くの經歷を積み生きたるものにはあらず

東京專門学校原稿紙

Handwritten notes on the right page, including a vertical title in red ink: (精神生活の発展と教育の進歩)

高等複雑なる作用の存在は、唯だ吾人を去るに存続するものとして見做すによりて、理解し得たりと云ふを得べき。予輩は存するものと云ふるあり。予輩はそれを理解せんが爲には、猶ほ他に考説の立つべきものがある可らずと思ふ。又良心を一事能と見做して可なるかに就きては、頗る疑ふべき能はず。又予能とは全射如何なるものを出さかとのをよみ未だ頗る不明なる問題の一あり。兎に角、精神の心識又是非善悪の感別を助成するに於ては、不化を夏同種族の動物に於ては全く同一不変なる本能と同じ意味にて本能と名く可らざるをに明あらん。

上にスピンサーの所謂「**想念**」の表を見よ(三つにせよ)

その語を指けたる所ありしが、今茲に少し之の誤に就りて論ずる所あるべし。其誤に從へば、吾人が義務の心識と名くものには、二個の要素ありて、一は身事を爲すに於ては、或る心持、一は或る感覺(フイリング)が他の感覺の上に存する權威あり。強迫の心持の起原は、スピンサーの論ずる所にては、全く政治的、社会的、又宗教的制裁に

其の外界の強迫の二要素

134

120

東京専門学校の印刷

Handwritten text on the right page, likely a continuation of the philosophical discussion. The text is written in vertical columns and includes various annotations and markings.

解せざる可ら
その感覺はその如き意義に解すべし。

す即ち外界より**右等**の制裁を以て或行為を強迫さる、**非常**ある故に久しく其強

迫を経験したる後には、**實際**外界の制裁あり場合に**右**の行為と強迫の心持とを

相伴はしむるに至るあり。但し單に外界の強迫に制せられて、**莫強迫**より生じ来る

結果を恐れて或行為を為し或は為さざる間、**因**より**果**にその行為を道德上優値

あるとの云ふ可らず。**抑**真正なる道德的行為はその行為より生起する自然

の結果か或人自他をして生を原せしむるに是るか否かを見て之を為すに至て

始めて成立すと謂ふべきあり。**ゆ**か**ゆ**その如く行為の自然の結果を見て其行為

を為し或は為さざるの段階に進みたる後は、**後**外界より**同様**の行為を**強迫**せ

此たる経験あるが故に、**矢張り**之を為すに當りては多少の強迫の心持を込め来る

つし是れ小即ち義務の心識の一要素とあるとの云ふと、**口**今際つし類分のスワン

カ一例の説に同じしは更に**論評**するの要あるべし。**何**とおれば其説の根據とあ

所の思想は既に論に辯難したりたりと信すればあり。且又吾人の義務をふ心識の

起原を全く外

121
195
東京府立第一中学校

其二 概念的
的 感覺
の 權威

果の制取強迫に歸し能はずるを以てス、ニサー氏自ら説く所にても明あらん。如何
 とおれば此は義務の心識に二個の要素ありとし而して少くとも其中の一の起原
 は外界の強迫に歸せざればなり。然らば斯くス、ニサー氏が其起原を外界の強迫
 に歸せざる要素即ち此の所謂感覺が他の感覺の上に有する權威とは如何なる
 かの云ふ事、又如何にして生起せしものある乎。
 此の説く所に従へば、生物の進化の上にて後に同化したる複雑なる概念的感覚
 は夫人の生活上意なき^且つ驚き要素をば^充たす^に適當なる所の作動を喚起するこ
 のにして、夙く
 より存在せる
 單一なる感覺
 に比して、行
 爲の指導とし
 て常に一層大
 なる權威を有
 する
 ス、ニサー氏は夫人の曾て感受したる感覺の再び夫人の心識
 に浮び来るを概念的感覚と名けて、之を外界の現在の刺激により
 て直接に喚起する、五官の感覺の如きものと區別せり。而して概
 念的感覚の相似たるものと更に結合して、個々の概念的感覚より
 猶ほ一層一般^{一般}なるもの、猶ほ一層^{抽象}のものと云ふるをば、複理
 念的感覚と名く。蓋しこは概念的感覚の猶ほ更に概念的と云ふは
 七の云ふ^はなり。人若し過去の某々の場合に経験したる感覺を信ず

東京專門學校校務部

時長き夫人の強迫を以て夫人の心識に二個の要素ありとし而して少くとも其中の一の起原
 は外界の強迫に歸せざればなり。然らば斯くス、ニサー氏が其起原を外界の強迫
 に歸せざる要素即ち此の所謂感覺が他の感覺の上に有する權威とは如何なる
 かの云ふ事、又如何にして生起せしものある乎。
 此の説く所に従へば、生物の進化の上にて後に同化したる複雑なる概念的感覚
 は夫人の生活上意なき^且つ驚き要素をば^充たす^に適當なる所の作動を喚起するこ
 のにして、夙く
 より存在せる
 單一なる感覺
 に比して、行
 爲の指導とし
 て常に一層大
 なる權威を有
 する

下より上へ正統の精神を具へて
上より下へ正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて
正統の精神を具へて

感覚の
権威の
自由と
有る。

複雑の又想念上の山の上より山却て単一の又現在の山の上に後不々々場合決して少
しとせず。老人の單一自然なる性情の発動は過去の経験を相比較し將來の出来
事を推量して為す所の行為(即ち複雑の抽象の想念上の感覚によりて指導さるゝ
行為)より山、老人が學生の目的を達するに於て若しくは社会の利益を増進するに
於て遂に勝利する正あしと云ふ可らず。例へば深夜燈を掲げて刻苦勉勵するの餘り
身を傷り世を矢うするは眼を傷すか後に眼に就くより山、若く複雑なる想念的感
覚によりて指導せられたる行為も山、然れどもかゝる場合にハスベニサーハの所
謂る學生の目的を達する上より見れば複雑なる想念的感覚より山、寧ろ睡眠して
身体の直接の現在の又單一の要求に従いたる方却て勝利と云はざるを得ず。是
ハスベニサーハ自ら承認する所あり。又假りに今痛痛したる点を外にして
承ふる山、或感覚が他の感覚の上に権威を有する所は其想念的性質にありと云
ふを以て決して其権威の差がある説明とは見ざる可らず。想念的でない性質を以て自身
の中に其感覚の権威を生ずる起因ありとは決して思はざるあり。假りに想念的
感覚は他の感覚に比して権威ありとする山、其権威には感覚の想念的でない性質より

東京專門学校原稿紙

此の論は、
 他に日田
 其の統
 世の統

他に日田
 其の統
 世の統

し痛ほ他^に 慥き因中のあるありて、而してその想念的て不性質は只だ見^由の
 一著き記号の如きものに過ぎざるにはあらざ^らか。是れス^にセ^にセ^にセ^にの角ら言ふ
 所によりて、察知し得らるゝか如し。此の言に曰く、蓄積したる経験は吾人に次の
 事を知らしむ、即ち遠き^且 遠き結果を指し示す感覚によりて指導する、は即ち坐に
 満足せしめ得べき感覚によりて指導する、よろし^通 通^常 學生の道に利ありとの事
 是れあり^と。是によりて觀れば、畢竟するに「ス^にセ^にセ^にセ^に」の說にては、或感覚か他の
 感覚の上に権威を有する所以は、その吾人の生を厚くするに利あるの性質に在る
 と云はざる可らず。然らば、則ち想念的なる^否とに拘らず、學生に利ありと思はる
 感覚は皆権威を以て、^即 即ち義務の性質を帯びて^也、吾人の心識に現れ来るべき、若し
 らん^に。今之を所に往く^に、假りに學生に^利あるの感覚は、其他の感覚の上に権威を
 有し、又其権威が取らざる吾人の義務である心識の一要素ありとする。こは毫も
 義務である心識の起原を説明したるものと云ふ可らず、只だその義務である感覚が
 如何なる事柄^に、感覚に伊隨するかを指定したるのみ^に、固より若し、在るス^にセ^にセ^にセ^に
 の護にして、誤る可く人^には、倫理の大法を發見する上に、^此 此^には、重大の價值あるもの、
 あり。

東京専門學校原稿紙

137

善美事柄の指導
 學生の
 心起原の
 起原の
 起原の

125

予の採り
んこと考
て

らん。然れども今予輩の問題とする所を解^釋するに及びては、價値ありと云ふ可ら
ず、何と云ふは予輩は更に同じて、如何にせよ、原生に利あるの感覚が他の感覚の上
に権威を有するに至りしかと云ふを得べければあり。若し此向に答へて、右の感覚
は本来権威を有するものにして、其権は決して他のものより生し来りたるものに
あらずと云ふは、是れ正しく義務の心識^{（少くとも義務の心識）}中右の権威ある法に
て表する部分^{（を）}を見根本の性質に於て決して他あり生したるものにあらず、即ち
原始特殊なるものとして認めざるあり。若し爾が認めずして、猶ほ更に其起因を究め得べ
しとせば、如何なる起因を提出すべき乎。要するに上に論破したる二三の考説の外
に、猶ほ別に考説を提出し来らずば、エマエカ^{（氏）}の所謂、概念的感覚の権威ある
ものは良心の起源の説明として、^{（高尾）}亦價値あるものあり。エマエカ^{（氏）}は予輩の
求に應じて別に考説を提出し来るべき乎、予輩は之を知らざるあり。鬼に角氏の其
著「^{（明）}」エマエカ^{（氏）}に於て論したる所のみにては、決して良心の起源を考
に説し得たるものとは云ふ可らざるあり。

予輩が論述の問題たる良心の起源に關して最早予輩の自説を明示すべき場合に

東京専門學校原稿紙

（付せん）

新學社
予輩が論述の問題たる良心の起源に關して最早予輩の自説を明示すべき場合に

在来諸
考證の
不十分

今更
混雑の思
考

141

迫りと思惟す。上陳陳述したる所は、是迄数多の学者が良心の起原を説明せんが
 爲に提出したる考證の價値を判定するに、あるが予輩の見方所に、は其中未だ一
 七次で十分ある良心起原の説明は、見做し得べきものありか如し。且、其数多の學
 者がある問題に向つて提出したる考證は、其數決して少きにはあらざらん。其の
 依つて立つ所の根本思想を尋ねずば、要するに、予の知れる所に、は上陳陳述し
 たる考證又予輩の自説として、後に掲ぐる考證の外に、出でずと云ふあり。固より
 用語の不同又陳述の鮮明によりて、様々の考證として、現をすもの、趣はあらんと雖
 も、其主要根本の思想を尋ねば、全く別個獨立の所見として、其數決して多くはあ
 らざるか如し。若し、果して右陳述したる良心起原の考證は、未だ一山以て終極
 最後の説明と見做すを得ず、一山以て説明の主要要を得たものにあらずとせば、
 予輩は此問題に向つては、畢竟如何なる位地を取らべき乎。予輩の自説として、如何な
 る所見を提出すべきか、是れ即ち論述せんとする所あるが、其最後の論述に移る
 に先づ、猶ほ一つ良心起原の説明に關して、動もすれば、出で現する所の誤謬混雑の
 思想を除き去らざる可らずと云ふ。

東京市立図書館蔵

127

其の考證は、其數決して少きにはあらざらん。其の依つて立つ所の根本思想を尋ねずば、要するに、予の知れる所に、は上陳陳述したる考證又予輩の自説として、後に掲ぐる考證の外に、出でずと云ふあり。固より用語の不同又陳述の鮮明によりて、様々の考證として、現をすもの、趣はあらんと雖も、其主要根本の思想を尋ねば、全く別個獨立の所見として、其數決して多くはあらざるか如し。若し、果して右陳述したる良心起原の考證は、未だ一山以て終極最後の説明と見做すを得ず、一山以て説明の主要要を得たものにあらずとせば、予輩は此問題に向つては、畢竟如何なる位地を取らべき乎。予輩の自説として、如何なる所見を提出すべきか、是れ即ち論述せんとする所あるが、其最後の論述に移るに先づ、猶ほ一つ良心起原の説明に關して、動もすれば、出で現する所の誤謬混雑の思想を除き去らざる可らずと云ふ。

不名の
廉恥心
の理想

廉恥心の中に彼の所謂廉恥心若しくは名を惜むの心を掲げ果してそれと良
心との間に幾ら幾ら差があるか。若しくは同様の事あるを指摘して、而してそれによつて
以て良心の起原を説明し得べしと考ふる者あるか如し。然れども、**明瞭**に分析せざるよ
り生ずる思想の混雑に過ぎず。蓋し名を惜むてふ心は、一は他人より受くる毀譽褒
貶に感應し、一は自身の品位価値を重んずるより来るの心**識**あり。今先づ他人の毀譽
褒貶の一方に就いて見ると、去人がそれにて感應するの心あるは去人の行為を刺激喚
起するに取つて一大動力たるには相違なし。若し其動力あかりせば、世人の行為は
其色彩の大部分を失ふべし。然れども他人の毀譽褒貶とは如何なるものぞ云
ふ乎。既に其中に良心の作用を含み居るにはあらざる乎。何故或行為を褒め若しく
は貶すと向は、思ふに其行為が多少道徳上為すべき若しくは為す可らざる又
は美若しくは悪あるの性質を帯ぶるか故にはあらざる乎。若し其良心作用の分子
を彼の所謂他人の毀譽褒貶と見らざれば、**其**毀譽褒貶は畢竟するに
強者若くは唯だその強者あるの故を以て言ひ換ふれば弱者が其意に任じ若しくは

廉恥心
の理想

可論者の中には彼の所謂廉恥心若しくは名を惜むの心を掲げ果してそれと良
心との間に幾ら幾ら差があるか。若しくは同様の事あるを指摘して、而してそれによつて
以て良心の起原を説明し得べしと考ふる者あるか如し。然れども、**明瞭**に分析せざるよ
り生ずる思想の混雑に過ぎず。蓋し名を惜むてふ心は、一は他人より受くる毀譽褒
貶に感應し、一は自身の品位価値を重んずるより来るの心**識**あり。今先づ他人の毀譽
褒貶の一方に就いて見ると、去人がそれにて感應するの心あるは去人の行為を刺激喚
起するに取つて一大動力たるには相違なし。若し其動力あかりせば、世人の行為は
其色彩の大部分を失ふべし。然れども他人の毀譽褒貶とは如何なるものぞ云
ふ乎。既に其中に良心の作用を含み居るにはあらざる乎。何故或行為を褒め若しく
は貶すと向は、思ふに其行為が多少道徳上為すべき若しくは為す可らざる又
は美若しくは悪あるの性質を帯ぶるか故にはあらざる乎。若し其良心作用の分子
を彼の所謂他人の毀譽褒貶と見らざれば、**其**毀譽褒貶は畢竟するに
強者若くは唯だその強者あるの故を以て言ひ換ふれば弱者が其意に任じ若しくは

東京帝国大学出版部

一、世の中は... 心は... 徳は... 行は...
二、世の中は... 心は... 徳は... 行は...
三、世の中は... 心は... 徳は... 行は...

らん。是ハ蓋シ假令い過つて為したるにレヤ。其如キ過を為すと云ふハ最早其方
ハ漢度ありと知れるガ故也。即チ不注意にも為すまじキ事ヲ為しと云ふを道
徳上幾分カ善業^{ある}ハ心あるガ故也。因^{いひ}テ曾テ他人に毀られて一旦大に取れた
るトモ、後に省みては毫も取つて不^{いひ}理由なく却て其他人の虚名カ過り去りて自
分には少しも疚しマ所ナシと知るをよしとあらす。然れども、此^いハ後に更^いク省みて
る所の心にして、他人に毀られてを恥^いぢたる時に於て既に爾カ知り合^いふには
あらす。若し其時に於て爾カ知り合^いふば恥づるより、心^念を催すあらん。口口
要するに廉恥の心、名を惜むの心又は羞惡の心と称するものは既に多少道徳的心
識の存在を假定し居るし、にして

次に
下
く

理想の實現
也

之によりて以て其心識の起原を説明せんとするは是れ唯だ思想の混雜を暴露するのにあらず也。但し羞惡の心が久しき経験又久しき遠傳によりて強と自動的に強と無意的に傷くも弱ふきにあらざ。然し其起原を云へば法して毫も道德的心識を含まざる毀譽熟階(即ち強者が私り目的を達せん爲に弱者を使甲するの方便)に生じたるものとは云ふ可。強者か私り目的を達せん爲に弱者を使甲するの方便たる毀譽熟階に對しては弱者は恐懼の念を生ずるに止まりて羞辱の心を生ずるにあらず。羞辱の心を生ずるには他人の命令強迫に迫らず自ら是認服脅すべき所の我位位の理想を明に或は暗に有しなざる可らず。此理想に不似合あるは理想より一般下る事を爲したりと自覚する所に彼の羞恥の心又は羞惡の心と稱するものに含まる。恥と云ふ心識を生じ来るなり。

論して次に至れば既に暗に予輩の自説を以て然したるが如きの思あるなり。或は言ふ所ある所にては今云ひし理想てふものを其人の心に作り出す事が如何なるか。或は言ふ所の起原あると云ふ所は其説に云ふ所とは敢て非難を試みるの理由あるを見ず。然れども其し明た理想てふ事を掲ぐるに止まりて猶ほ更に一步を進めずは良

東京專門學校原稿紙

之によりて以て其心識の起原を説明せんとするは是れ唯だ思想の混雜を暴露するのにあらず也。但し羞惡の心が久しき経験又久しき遠傳によりて強と自動的に強と無意的に傷くも弱ふきにあらざ。然し其起原を云へば法して毫も道德的心識を含まざる毀譽熟階(即ち強者が私り目的を達せん爲に弱者を使甲するの方便)に生じたるものとは云ふ可。強者か私り目的を達せん爲に弱者を使甲するの方便たる毀譽熟階に對しては弱者は恐懼の念を生ずるに止まりて羞辱の心を生ずるにあらず。羞辱の心を生ずるには他人の命令強迫に迫らず自ら是認服脅すべき所の我位位の理想を明に或は暗に有しなざる可らず。此理想に不似合あるは理想より一般下る事を爲したりと自覚する所に彼の羞恥の心又は羞惡の心と稱するものに含まる。恥と云ふ心識を生じ来るなり。

人の斯くあふ	るに立ち去	ふるか同は	か竹ふる意味	若し理想とは	何とあふば	この人と思惟	との識を免れ	たるに過ぎず	其名称を附し	の作用に新し	はせていたま	系を説き明し	心の作用の起
強迫性世帯の	百ハナ九年版	批判するありと	ふ事ハば我等銘	いして我等銘	こはるに理想	能く或事を為	明せんとする	氏は類に風儀	る感の生ずる	心の生起する	畢竟するに	引惟ふに	の語に云ふ
理想を掲げた	がニトは良心	とスラム、デ	の持する理想	の優位を度量	を掲げ果る	友はあふと云	の吹去る心	の影響、但先	の瞬間にあ	は理想と實際	にはありざる	ハフディング	云ふアイデア
しが其良心	の起原を論し	エーテイア	に照りして	も今般階に進	如く初は	心を奮起し	社会の刷新	の年全等を	とエーテイ	と實際との	キハルセニ	又ダニト	の義あり
を形つくる	て外界の強迫	をハナ	の生活を		は単に世の	を説くに至	の指定に及	を説いて	ハフディング	ハフディング	キハルセニ	ハフディング	

おぼろ

おぼろ

東京専門学校原稿紙

心は生起するに先立って、理想を掲げ、その理想を達成するために、行動を起こす。この理想は、個人の理想であり、社会の理想であり、国家の理想である。理想は、人間の心を導き、行動を促す力を持つ。理想を掲げ、その理想を達成することは、人間の使命である。理想は、人間の心を豊かにし、人生を有意義にする力を持つ。理想を掲げ、その理想を達成することは、人間の幸福の道である。

ぬ若しくは新
 々あるか善ふ
 りと覺知する
の
を指して
 理想と云ふと
 答ふ所の外お
 くば是れ只た
 言説を更へた
 る迄にて良心
 と心論の起源を説き明したるものと云ふは云ふ可なり。若し其起源を説
 き明さんと云ふば理想と云説を揚ぐるに止まりしめて猶ほ一歩を進めて理想と
 不觀念の存在する理由を説明せざる可らず。故に只た理想と不觀念の生起するを
 以て良心の起原と見做すの説は未だ真に其起原を説明し得たるものにはあらず
 して但た良心起原の一考説を聞くに當つて其**方角**を指示するに足るのみ。是は決

には最も緊要最良高貴なるものを何と云へば**此れ**も又道德
 的生涯の理想觀念と云ふと云ふ可なり。其言小曰く**命全的**
用ひ既 之を完了したると謂つべし。エーライアーは白二十
 一頁、ナハハ十六頁**般若**し其善の學者偏は一歩を進めて吾人が
 理想の觀念を作り得る所以を説明せずば予の見所にては是れ
 決して良心の起源を明にしたるものと云ふ可なり。ブリン
 ト氏の所謂**無窮**の目的たるものは予が後に開陳する所と吾人に
 於ては多少相類似する所あるか如し。

東京專門學校原稿部

此の理想は... (faded text)
 ... (faded text) ...

理想の生
起す所

理想として觀念の生起す所以を尋究して茲に一考説を建設し以て良心の起るの
明を試みんと欲するなり。

予は是より理想として觀念の生起す所以を説明せんと欲す。其説明の根據と爲す
所の思想は、**古**より東西の哲學者が多く唱道する所に於て、予は茲に之を良心起る
の論に借用せざるを得ず。予が次に説き出す所は或は一躍して純理哲學の境界に入る
が如き趣ありて、或人々は此に難かん。然れども予が所見の歸着する所
を知らずと欲せば、暫く忍んで予が説く所を聽かん。予を請はざる可らず。

老人の生活行為の理想は、**只た**架空の想像にはあらず。その通常所謂の想像より、**正**
則するものは、老人が**此**に對する善美しくはあらず。わが心識あり。此水
どれば、何れも其の如き理想の生起する也。と尋ねるに、予亦是を以て吾人が我
本来の目的に達せんとするより起るものありと考ふ。茲に**本来の目的**と云ふものの
法として架空の想像にありず。老人の眞實に其根據を有せり。目的として觀念を確
し。他人事あり起る所以を説明する能はず。老人は何等かの目的を掲げて之を成就せ
むと力むる者あり。其事を以て眞目的とすか。は人によりて同しかりずと云ふ所

東京專門學校原稿紙

理想の生起す所
理想として觀念の生起す所以を尋究して茲に一考説を建設し以て良心の起るの
明を試みんと欲するなり。
予は是より理想として觀念の生起す所以を説明せんと欲す。其説明の根據と爲す
所の思想は、古より東西の哲學者が多く唱道する所に於て、予は茲に之を良心起る
の論に借用せざるを得ず。予が次に説き出す所は或は一躍して純理哲學の境界に入る
が如き趣ありて、或人々は此に難かん。然れども予が所見の歸着する所
を知らずと欲せば、暫く忍んで予が説く所を聽かん。予を請はざる可らず。
老人の生活行為の理想は、只た架空の想像にはあらず。その通常所謂の想像より、正
則するものは、老人が此に對する善美しくはあらず。わが心識あり。此水
どれば、何れも其の如き理想の生起する也。と尋ねるに、予亦是を以て吾人が我
本来の目的に達せんとするより起るものありと考ふ。茲に本来の目的と云ふもの
法として架空の想像にありず。老人の眞實に其根據を有せり。目的として觀念を確
し。他人事あり起る所以を説明する能はず。老人は何等かの目的を掲げて之を成就せ
むと力むる者あり。其事を以て眞目的とすか。は人によりて同しかりずと云ふ所

目的論

目的論の中心は、行為の目的性にある。行為は、その行為の目的を達成するために、手段を選ばずに行われる。この目的性こそが、行為の本質である。また、目的論は、行為の価値を、その行為の目的の達成の有無によって判断する。これは、行為の目的性から導かれる必然的な結論である。

万物の目的

事を目的として成就せむと努めざるは亦し。或は其目的とする所の首尾は、
して隨處隨時に更趣を異にする。若しある人、然らば、其人は何事かを想ひ、
て之を實行するの性能を有す。目的を想ひ、遂げて之を實行せむとする。是れ人間社
会に於ける千種業態の現象を生起せしむる原動力なり。社会の目的、目的として、
外にしては説く可らず。倫理道德の事に於て、然りとす。
意に老人が目的を有して、それに向つて行動するのみならず、
皆、
にあり、
其一部分を動かせば他の部分を動かさざる可らず。一部分が其一定の
在せんに他は却りか又其一定の状態に在せざる可らず。故に此宇宙その物
の存在するの法則とす。其の存在する以上は、それを組成する諸物が、
に對して、
云ふは、
にのみ存在するにあり、其存在は相對あり。此れは存在に、
彼を、
其存在に

東京專門学校印刷部

生物の目的

然るに、何故に彼が此の極部外を以て組成する^{法則}のあつたは知らず、但だ其
 存在する以上は各部分^{その}の充足すべき處を全群の中に^{有する}と見做すを得べし。而し
 てその充足する可き處が其部分の目的ありと云ふを得ん。各部分の^{目的}は固より自
 立の^{目的}にあり、個々の部分の相関聯して成す世界の存在に懸かるなり。各部分
 なくば素より全群なし。此れど、全群なくば其個々の部分もなし。全群は個々の物に
 先たず、個々の物も亦全群に先たず。去れば今云へる意味にては、烟は上り、水は流るゝ
 が其目的ありと謂ひつゞし。
 然るに、^{目的}は生物界に於ては今一層爲るべき意味を以て説くを得。生物は
 伴機を具へて^{生長}するものにして、其生長の一段階は次の段階に到るゝ準備と出
 り又之れに到るの傾向を有す。桃の種子は生長して桃の樹となり、桃の花を開き、桃
 の実を結ぶ。桃には桃に具はるる^{生長}の^{状態}又段階ありて、他の物の生長の^{状態}又
 段階と異なる。即ち桃の種子には之を形作る物質若し其物質結合の趣に特殊なる所あ
 りて、^{環境}に接するは一定の^{状態}を取り、^{一定}の生長の段階を経過するの
 傾を有す。此れ所謂る桃の性なる者あり。故に適當の^{環境}に接して生長の段階を経

東京專門學校印刷部



此れより、生物の生長は、^{環境}に接するに依りて、^{一定}の^{状態}を取り、^{一定}の生長の段階を経過するの
 傾を有す。此れ所謂る桃の性なる者あり。故に適當の^{環境}に接して生長の段階を経

7 的 人 類 目

此せば、見性を全うしたりと謂ふべし。而して其生長の一段階にあるは、その到らむとする次の段階に到るを以て其目的とするといふを程ん。然らば今云ふ意味にては、桃子の目的は桃樹とあるにあり。べての生物は今云ふ程の意味にては皆其目的を有すといふべし。可ふ人。今云ふ目的は上に云ふ如くより、一層進みたる意味にこの目的あり。

人類は一種の生物あり然らば草木の類とは異なり。心識を具へ自覚を有する生物あり。桃に其特殊なる生長の段階ありといひ得べきか如し。但た老人は心識を具へ自覚を有して、老人の到らむとする生長の段階を豫想し得。且又老人は一人として生長の段階を有するのみならず、人類として其水を有す。一社会の生長する類は一

伴の生長する類に似たり。人類は一団体を成す。個人を除いて固より人類ありず。然れども、人類全体を見ずして個人を解す可ふ。即ち人類は一団体としての生長を有するあり。社会の興敗、邦国の盛衰、文明の進歩あるもの、一言に云へば世界の歴史は人類生長の歴史あり。

は人類生長の歴史あり。

東京專門學校印刷部

Handwritten notes on the adjacent page, including the characters '新' and '史'.

目的の豫
想と進
歩の到達

夫人は如何に生長せむとするかは生長したる後には如何に完全にして之を知らざるを得ず。惟も桃子自らその腹に桃樹と成りおとすを知るが如し然れども夫人は毫も将来を思ひ及ばずして唯だ自然に生長しゆく者にあらず未だ到達せざる所の段階を臆測夢想して之に向つて進まむとする者あり夫人に於ては臆測夢想が生長進歩の一動力とある。夫人が無心識無自覚の生物と異る所あるにあり。彼を意味しては夫人も素より自然界の一物に外ならず。然れども夫人の目的の成就は少くとも其外は夫人自らの臆測夢想する所に懸る。草木禽獸の如くに唯だ自然の爲すが俤あらずして夫人は自ら其運命を作るとは是を言ふあり。

目的の豫
想と進
歩の到達

引り

豫想の過
誤と根本
の傾向

112

夫人は如何に生長せむとするかは生長したる後には如何に完全にして之を知らざるを得ず。惟も桃子自らその腹に桃樹と成りおとすを知るが如し然れども夫人は毫も将来を思ひ及ばずして唯だ自然に生長しゆく者にあらず未だ到達せざる所の段階を臆測夢想して之に向つて進まむとする者あり夫人に於ては臆測夢想が生長進歩の一動力とある。夫人が無心識無自覚の生物と異る所あるにあり。彼を意味しては夫人も素より自然界の一物に外ならず。然れども夫人の目的の成就は少くとも其外は夫人自らの臆測夢想する所に懸る。草木禽獸の如くに唯だ自然の爲すが俤あらずして夫人は自ら其運命を作るとは是を言ふあり。

桃の種子を土中へ下せば或一定の傾向を以て生長せむとする。然れども他物の如くする所とあり生長の諸段階を経ずして已むとあり。夫人有自覚の生物に於ては然り。殊に夫人の生長はその将来に於ておとする状態を豫想するを以て少くとも其外は懸るが故に其豫想の過誤は生長に影響を及ぼさずばあり。現に夫人は豫想の程小くが故に本来の目的の存せざる方に向つて動く正あり。夫人のまた引りざる段階を不完全ある新機として臆測するが故に其臆測の程に陥るを

東京第四学校原稿紙

112

114
115

この書は、社会の進歩と個人の幸福の関係を論じている。社会の進歩は個人の幸福を促進するが、個人の幸福は社会の進歩を妨げない。社会の進歩は、個人の幸福を促進するが、個人の幸福は社会の進歩を妨げない。社会の進歩は、個人の幸福を促進するが、個人の幸福は社会の進歩を妨げない。

114

社会理想の形骸

臆測理想とするの性質あるによる。禽獸草木と異なり若く見生長の段階を臆測理想し見豫想する所を目的として生長し、彼等も亦道德的生物たり、彼等も亦理想を有し、心を有するあり。老人の所謂理想あり、若くは本来の目的を豫想するに生し、而して未來の目的を豫想するに至るは蓋し老人には法界の一物としての細しとは生長進化する活物としての目的の素より具はるありて而して此目的の成就に向つて進み行く根本的傾向衝動の存在は此に在り。未來の目的に達せざるは老人は常に其處を得ざるが如きの思ひあり、彼も能く磁石に心は此にあり。未だ之に附着せざるが如く、子の親を慕い尋ねて未だ之に會はざるが如きの思ひあり。此の思ひに對し、是れ即ち老人が理想に向ひ行く心算なり。

社会の他は老人が生活の理想を實現せむとする者、百態の制度風俗習慣皆老人が見て以て生活の理想とする所を實現せむとする者、百態の制度風俗習慣皆老人の生活の理想が形骸を取りて現したる者ありと云ひつゝし、新制度は形骸理想は見種類あり。而して新制度の变迁は正しく理想の变迁あり。一旦理想

115

Handwritten text on the right page, including the characters '風俗' (customs) and '理想' (ideal).

理想の進歩の由

111

Main body of handwritten text in a grid, discussing concepts like '理想' (ideal), '習慣' (habit), and '風俗' (customs) with various annotations.

東京専門学校印刷部

110

右の如く、理想を以て、去人の生活を統御するは、臆説(法則)を以て、物質的改造を其中に包
合統括するに似たる所也。例へば、存続の法則の如きは、物質界又或く之は
一切の出来事を其中に統括する者なるが如し。如何にしてその如き法則を以てたるを
と向へば、之と個々の出来事に接し之を踏襲として、其他の出来事及見他の出来
事を統括するの臆説を思ひ及けたるに外ありず。故に因果律は老人の臆説したる
個々の出来事を踏襲するの臆説たるを記述したる者なり。因果律は老人の臆
説したる個々の出来事には全くは合さず、全くは其中に発見さる可らず、老人の
向ふ所如し、たゞ部分を有せり、老人の意見せざる出来事を、網羅するのあり
而して是れ老人の自ら附加したる要素を有する規律か、果して實在界の真相と相合

理想と
物理性
の
法則
の
整同

老人の不足を以て、老人は右云ふ他動の層、満足を感じたるの途を探つて進み行く
而して其途を探り人には今迄踏過せし路を起るとせざる可らず、その水を踏敷とせ
ざる可らず。新理想の旧理想に根して生ぜざる可らず、根を掘り樹木が其種子に根
ざして生ぜざる可らず、かゆし新理想は旧理想を破壊すると共に又その水を己れ
の内に涵養せしむる者なり。

156

東京專門學校教授 藤村

111

するが否かは、實際と現律を諸般の出来事に適用し、行の中に於て証明せらるゝの
 外あり。そのを應用し、行き、益と説明の上に満足を感じ、そのに反する出来事に遭
 遇せざるによりて、現律は証明せらるゝの外あり。然るが故に、現律の証明
 は完了せらるゝ、正あり。要するに、現律は老人の如く、應用する隠なり。そ
 のを應用して可なるが可あり。若し老人の遭遇する事象の説明に於てそ
 のが満足を感じ、そのが笑へざるかによりて決せざる可らず。老人の生活の理想も亦
 此の如く、現律の状態を起念としたる而も、其状態を起念したる者に於て、其
理想の完不は、其が果して老人の生活の衝動、即ち老人の本業の目的に向ひ
 く衝動の永く満足するが満足せざるかによりて決せざる可らず。故に理想は実在
 を踏段とあさる可らず。亦全く実在に合する小至るにありず、其上に出づる所
あり。故に現律には老人の意見する所々と老人の附加したる部分の合する
 が如し。是れ理想の理想たる所に於て、実在の進行すべき標的、その改造さるべき方
 向の指針とあり。然るが如く、其は其如く老人の生活を統御せむるに、老人の生
 活を進せむるに使用する現律にして、老人の之を使用して可あるが否かは、實際之

東京專門学校原稿紙

の中に於て、其が果して老人の生活の衝動、即ち老人の本業の目的に向ひ
 くる衝動の永く満足するが満足せざるかによりて決せざる可らず。故に理想は実在
 を踏段とあさる可らず。亦全く実在に合する小至るにありず、其上に出づる所
あり。故に現律には老人の意見する所々と老人の附加したる部分の合する
 が如し。是れ理想の理想たる所に於て、実在の進行すべき標的、その改造さるべき方
 向の指針とあり。然るが如く、其は其如く老人の生活を統御せむるに、老人の生
 活を進せむるに使用する現律にして、老人の之を使用して可あるが否かは、實際之

兩者の
差異

理想
の
不
断
の
改
造

を供用するにありて満足に生活し得るの存にありて決せざる可らず。而して
一理想の永遠に夫人を満足せしめざる可きは既に此にあり。夫人の生活の理想
を改定するを要するは、常に観察の範囲の廣くあるに依りて不完全なる理想を改定
するの要あるが如し。約言せば理想は夫人の生長進化せむ為に供用する理想と
りといひて可なるべし。

然れども理想は物理的現象を説くため、理想と前方に異なる所なくばありず。物
理の理想を改定するに必要は夫人の観察の範囲の廣くあるに依りて、生長進化にありて
説明すべき客観的事實の變更によりて生ずるにあり。例へば、**運**行を説明
せむ為の理想なり。此の説明を以て生ずるに依りて、客観的事實即ち天体の運行には、**運**
動は、他人の観察の及ぶ範囲に於て客観的事實に連関する主観的**知**識の變更によ
りて、理想を改定する必要を生ず。然るに生活の理想は夫人に取りての理想にして
て、而してその夫人の自らその自身が変化し行く。物理の理想を以て説明すべき客
観的事實は変化せず。生活の理想を以て指導するに夫人自ら生長進化し行く。夫
人自身に生長進化する衝動傾向を有す。生長進化の一段階にある夫人に取りて

東京專門学校蔵

此の理想は夫人の生長進化せむ為に供用する理想と
りといひて可なるべし。
然れども理想は物理的現象を説くため、理想と前方に異なる所なくばありず。物
理の理想を改定するに必要は夫人の観察の範囲の廣くあるに依りて、生長進化にありて
説明すべき客観的事實の變更によりて生ずるにあり。例へば、**運**行を説明
せむ為の理想なり。此の説明を以て生ずるに依りて、客観的事實即ち天体の運行には、**運**
動は、他人の観察の及ぶ範囲に於て客観的事實に連関する主観的**知**識の變更によ
りて、理想を改定する必要を生ず。然るに生活の理想は夫人に取りての理想にして
て、而してその夫人の自らその自身が変化し行く。物理の理想を以て説明すべき客
観的事實は変化せず。生活の理想を以て指導するに夫人自ら生長進化し行く。夫
人自身に生長進化する衝動傾向を有す。生長進化の一段階にある夫人に取りて

Handwritten text on the right page, including a vertical column of characters and some red annotations.

(二)理想の實在變更力

Main body of handwritten text on the left page, discussing the relationship between ideal and reality, with various red annotations and marginal notes.

東京専門学原稿紙

Handwritten notes on the right page, including the title '理想と良心の諸作用' and various annotations.

理想と良心の諸作用

Main body of handwritten text with extensive red annotations and marginal notes. The text discusses concepts like '理想' (ideal), '良心' (conscience), and '衝動' (impulse).

此所の丁附一枚飛びてある

東京専門学校原稿紙

Handwritten notes on the right page, including a circled section at the top right and various vertical columns of text.

理想の
自覚の
本質の
開示

Main body of handwritten text on page 162, enclosed in a red border. The text discusses concepts like 'ideals', 'self-awareness', and 'essence', with several words highlighted in red ink.

神の考証
純理格
定上
神格

を知らし居るにあらす、又は神託の如くに妙に天上より突然吾人に降り来る
しうにあらす、或は吾界に於て、或は生物の界に於て、或は人間の社会に於て、種々の経験
を積み往々の境遇に臨して、彼れ所謂人類の進化あるものを経過する間に漸く吾
人の心識に発現するあり。吾人は譬へば眠より起たんとする者の如し、既に全く
覺めて白日の光に照らし、我本来の目的を自覚し居るにあらす、寧ろ漸く之を
自覚せむとするあり。而して此自覚は此世界の境遇と相離れて生ずるものにあら
らば、寧ろ人生の種々の経験に教へらば、幾多の過誤を教へ、此為す中に於りて漸次
に明瞭の心のあるありし。

予の今向陳したる所を讀んで、或は頭を振りて是れ既に莫大なる純理格上の假
定を考したる事あり、是れ吾人の確實なる経験を超越して、臆説想像の境に入る
ものあり、此之は竊に有神論を假定し居るもの、如しと云ふ人ありん、然れども
予の上に出したる考証は必ずし有神論を假定し居りず、吾人の本来の目的と
云ひ、又此世界の自然の構造と云ふも、心も有意の神の存在、即ち通常所謂有神論を假定し居るにはあら
ず、但だ此法界の成り立ち又轉變に目的の存するを假定するのみ、其目的は今後

予の考証
純理格
定上
神格

を知らし居るにあらす、又は神託の如くに妙に天上より突然吾人に降り来る
しうにあらす、或は吾界に於て、或は生物の界に於て、或は人間の社会に於て、種々の経験
を積み往々の境遇に臨して、彼れ所謂人類の進化あるものを経過する間に漸く吾
人の心識に発現するあり。吾人は譬へば眠より起たんとする者の如し、既に全く
覺めて白日の光に照らし、我本来の目的を自覚し居るにあらす、寧ろ漸く之を
自覚せむとするあり。而して此自覚は此世界の境遇と相離れて生ずるものにあら
らば、寧ろ人生の種々の経験に教へらば、幾多の過誤を教へ、此為す中に於りて漸次
に明瞭の心のあるありし。

予の今向陳したる所を讀んで、或は頭を振りて是れ既に莫大なる純理格上の假
定を考したる事あり、是れ吾人の確實なる経験を超越して、臆説想像の境に入る
ものあり、此之は竊に有神論を假定し居るもの、如しと云ふ人ありん、然れども
予の上に出したる考証は必ずし有神論を假定し居りず、吾人の本来の目的と
云ひ、又此世界の自然の構造と云ふも、心も有意の神の存在、即ち通常所謂有神論を假定し居るにはあら
ず、但だ此法界の成り立ち又轉變に目的の存するを假定するのみ、其目的は今後

此の考証は必ずし有神論を假定し居りず、吾人の本来の目的と云ひ、又此世界の自然の構造と云ふも、心も有意の神の存在、即ち通常所謂有神論を假定し居るにはあら

心識の存在を解する為には、^無なくして、^心その心識の存在を以て見る事、
 外にその^看取するの道なき^中は、^外純理哲學若しくは倫理學の手段に属する問
 題にして、^ま先に^ま論じ及^まる可^まあり。免に予輩は右陽ぶる倫理哲學上の思
 考を許容せずば、良心てふ心識の起原は決して説明し得べからずと考ふるあり。
 予輩が此良心起原論の攷究を始むるにハ、先づ吾人の普通の心識に包含しあるも
 のを求むるを以て、^初第一歩と^初し、^初即ち経験を以て予輩が攷究の起點と^初したる
 し、^初其心識に包含しある事相の存在を^初理解せん^初ハ、^初究竟する處、^初倫理哲學上
 の思想を^初作り^初来らざる可らずと考ふるあり。若し其如き倫理哲學上の思想を^初備ふ
 るの^初ありば、予は^初更なる^初向てハ、^初其如き思想なくして良心の起原を^初別に説明せし
 むを^初請求するの^初外、^初予が^初此論の^初決する^初途論述したる所を^初先く^初了解
 したるものにして、^初若し予が^初茲に提出する考説と^初果して全く倫理哲學上の思想を
 備^初へざる考説を以て^初良心の起原を説明し^初了する^初有らば、^初予は^初直に^初予の^初説を
 擯^初りて^初更^初新説を取ら^初に躊躇せざるべし。
 今陳述したる予輩の考説は如何なる意味にて良心の起原を説明するものなる乎

東京専門学校原稿紙

150

心識の存在を解する為には、^無なくして、^心その心識の存在を以て見る事、
 外にその^看取するの道なき^中は、^外純理哲學若しくは倫理學の手段に属する問
 題にして、^ま先に^ま論じ及^まる可^まあり。免に予輩は右陽ぶる倫理哲學上の思
 考を許容せずば、良心てふ心識の起原は決して説明し得べからずと考ふるあり。
 予輩が此良心起原論の攷究を始むるにハ、先づ吾人の普通の心識に包含しあるも
 のを求むるを以て、^初第一歩と^初し、^初即ち経験を以て予輩が攷究の起點と^初したる
 し、^初其心識に包含しある事相の存在を^初理解せん^初ハ、^初究竟する處、^初倫理哲學上
 の思想を^初作り^初来らざる可らずと考ふるあり。若し其如き倫理哲學上の思想を^初備ふ
 るの^初ありば、予は^初更なる^初向てハ、^初其如き思想なくして良心の起原を^初別に説明せし
 むを^初請求するの^初外、^初予が^初此論の^初決する^初途論述したる所を^初先く^初了解
 したるものにして、^初若し予が^初茲に提出する考説と^初果して全く倫理哲學上の思想を
 備^初へざる考説を以て^初良心の起原を説明し^初了する^初有らば、^初予は^初直に^初予の^初説を
 擯^初りて^初更^初新説を取ら^初に躊躇せざるべし。
 今陳述したる予輩の考説は如何なる意味にて良心の起原を説明するものなる乎

予の業道
の意味

167
の業道
の意味

予輩は良心の作用ある可し可らず又善悪をふ心識を分析して全く他種の^種のものと
 ありの意味にて、其心識の起原を探求し得とは思はず良心^心の存在の根元
 を指摘するの意味にて、身起原を説明し得と云ふ^事あり。即ち右の考證に於ては道
 徳上或事を為す可し又は為す可らず善あり又は悪ありと云ふ心識を分析して他
 猶ほ第一^の別種の心識に帰したるにはあらずして、其心識の生起する根本を
 指摘したるに外ならず。言ひ換へれば吾人の本来の目的に對して吾人の有する関
 心^の我心識に現れておかしげ行為の理想を^一種の觀念を生し而して是に良心
 して予輩は他の意味にては良心の起原を説明し得るの道を知らざるあり。予輩は
 良心をふ心識を分析して全く他の^の心^の起原を説明し得るの道^を知らざるあり。予輩は
 ざら^の心^をふし得^るしとけ思はず。良心をふ心識には如何にそれを分析する^と又如何
 何に其未だ不完全あるの有様^に溯るも全く他の種類の事柄に分析し去るを得ざ
 る特殊の所あると云ふあり。

心は或はそれを外アウ^ンの考證と要要^に於ては

東京専門學校印刷部

予輩は良心の作用ある可し可らず又善悪をふ心識を分析して全く他種の^種のものと
 ありの意味にて、其心識の起原を探求し得とは思はず良心^心の存在の根元
 を指摘するの意味にて、身起原を説明し得と云ふ^事あり。即ち右の考證に於ては道
 徳上或事を為す可し又は為す可らず善あり又は悪ありと云ふ心識を分析して他
 猶ほ第一^の別種の心識に帰したるにはあらずして、其心識の生起する根本を
 指摘したるに外ならず。言ひ換へれば吾人の本来の目的に對して吾人の有する関
 心^の我心識に現れておかしげ行為の理想を^一種の觀念を生し而して是に良心
 して予輩は他の意味にては良心の起原を説明し得るの道を知らざるあり。予輩は
 良心をふ心識を分析して全く他の^の心^の起原を説明し得るの道^を知らざるあり。予輩は
 ざら^の心^をふし得^るしとけ思はず。良心をふ心識には如何にそれを分析する^と又如何
 何に其未だ不完全あるの有様^に溯るも全く他の種類の事柄に分析し去るを得ざ
 る特殊の所あると云ふあり。

三つ(笑)の
C. H. H. H.

この書は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

160
理想の
進歩と
情心の
作用
混同

敢て異る所をいしと思ふかも知るべし。少く注意して予輩の説を見れば、これと全ア異なる考説との間には甚だ明瞭なる差別あるに気附くべし。成程、吾人の性の傾向をいへば、一は衝動を説く所に於ては、兩者の相類似たる点なきにあらず。然し、其如何は老人の現實の有様が其本来の目的に向い行くの衝動ありと云ふが如き正は、予輩の悟りたる所あり。その如きを以て決して許容せざる所あり。且又、予輩は老人の社会的本能にのみよりて良心の教養を説明せんと試みて、之が爲に大に其説の根柢を狭隘にし、徒らに困難を加ふるの端ありしかども、予輩の考説に於ては、其如きの困難に遭遇せずと考ふるあり。要するに、予輩の考説は、ただ生物学上より良心の教養を説明せんと試みたるべし。予輩の之に反對して主張する所は、必ず多少新理哲學の上に踏み入らざるべし。老人の本来の目的は、法して夢幻の妄想にあり、其法界の自然の構造に於て存在する根柢を有するものあり。予輩の考説は、数十年を以て其界に生活する個々の人は、未だ全くは之に到達居らず、未だ之を實現し得ざるあり。老人の考

予輩の考説は、必ず多少新理哲學の上に踏み入らざるべし。

根柢

有するものあり

到達

同

東京専門学校校報

152

24
目的の
中
に
依
る
用
を
混
ぜ
る

あり

来の目的は法界の**實際**より見れば、**最も真実なるもの、實有**なるものに相違あり
 此の世の個人と人となりて共に生かぬる者人欲とに取りては、未だ實在とありて現
 存せしめて、此の理想として觀つれば、**今茲に法界に眞實なる法を掲げし**
 が、此は純理想上の大問題にして、**實に其法を得ず**に於ては、**一一般の陳述**
 は不充不十分ざるを得ず。
 今云ふ如く法界の自然の描述に基ける夫人の本来的目的として、**夢**して夢の
 妄想にありしと雖も、**夫人は既にそれを全く了了し去るにはあらず**、又それは神託の
 如くに**地に天上より**、**突然**夫人に降り来りしものにあらず。此は**世**に於て、**此生**の界
 に於て、**此人**の社会に於て種々の経験を積み種々の境遇に接して、**彼**の所謂人
 類への進化**なる**ものを経過する**同**に、**漸々**夫人の心識に**反映**し来りあり。夫人は**未**だ
 白晝の光に照りして、**我**の本来的目的を**観**るの段階にあり、**然らば**曙光の薄**く**なり、**以**
 てそれを**茫然**と窺ひ得るのみ。夫人は既に全く覺めたるにあらず、**また**半ば**睡眠**の中
 におりあり。**口**
 今云ふ如く夫人は此世界の狭く之に於て夫人の社会の境遇を化して離れて、**我**の本来的

東京專門學校原稿紙

最も真実なるもの、實有なるものに相違あり
 此の世の個人と人となりて共に生かぬる者人欲とに取りては、未だ實在とありて現
 存せしめて、此の理想として觀つれば、今茲に法界に眞實なる法を掲げし
 が、此は純理想上の大問題にして、實に其法を得ずに於ては、一一般の陳述
 は不充不十分ざるを得ず。
 今云ふ如く法界の自然の描述に基ける夫人の本来的目的として、夢して夢の
 妄想にありしと雖も、夫人は既にそれを全く了了し去るにはあらず、又それは神託の
 如くに地に天上より、突然夫人に降り来りしものにあらず。此は世に於て、
 此生の界に於て、此人の社会に於て種々の経験を積み種々の境遇に接して、
 彼の所謂人類への進化なるものを經過する同に、漸々夫人の心識に反映し来り
 あり。夫人は未だ白晝の光に照りして、我の本来的目的を観るの段階にあり、
 然らば曙光の薄くなり、以てそれを茫然と窺ひ得るのみ。夫人は既に全く覺め
 たるにあらず、また半ば睡眠の中におりあり。口
 今云ふ如く夫人は此世界の狭く之に於て夫人の社会の境遇を化して離れて、我の
 本来的

Handwritten text on the right page, including a vertical title on the right edge and several columns of cursive script.

1176 言世字 上の記 此の記

Main body of handwritten text in cursive script, enclosed in a red border. The text discusses philosophical concepts such as '心的作用' (mental action) and '附随' (concomitance).

東京專門學校原稿紙

いへば、隠微の理を詮究する所亦きにありず。故に其政究は吾人の道德的觀念の關係に關し、**亦**幾分の光を添ふる所亦きにありざる也。或言詰字者の説く所によれば、**倫理**のロメーニズム著メニエン、エゴリニニコニコニマニニ第三百四十

Moral education in Japan
 六頁(十八百八十八年版)を参考せよ。

表示する言辭は、**善**と**道徳上**の意味を合まざるものより、**善**と**道徳上**の觀念を意味せざりし言辭をば後に**善**としたる**道徳的**觀念に比喩的に應用したるものありと。此言詰字上の説に従へば吾人の道德的心識の生起に先づ既に吾人の言詰の**善**を生じたりして、而して其言詰は既に其時に於て幾分の進歩を遂げたりとのことは詔するを得ざるなり。然れども吾人の**道德的**觀念は素と毫**道徳的**要素を合まざる觀念より生じたりとの見解を單に變化したるに過ぎざるべし。吾人**性**質に於ては敢て異る所のなきものありとのことは詔するを得ざるなり。如何と云ふは、後に生じたる觀念は全く新しき要素を合むものある場合に由るに附する名稱は從**用**して吾人の言詰の中より擇びて**比喩的**に應用するを得べし。新しく生じたる觀念には、**今迄**使用し來りし言詰の**通**の意

東京專門學校原稿紙
 比喩的の語を今
 用する

いへば、隠微の理を詮究する所亦きにありず。故に其政究は吾人の道德的觀念の關係に關し、亦幾分の光を添ふる所亦きにありざる也。或言詰字者の説く所によれば、倫理のロメーニズム著メニエン、エゴリニニコニコニマニニ第三百四十

...
...
...

...
...
...

（...）

病的に起る

生起すし... 観念を分... 起原の考... 三は不... 展りざる可... 深を見て... ざるの甚し... 瘋癲白痴の... りとの事... ば爾か女... 矢下**最初**... 山の即ち云... 目的を理想... 於ては最後...

観念を分**枕**せば全く主... 起原の考**説**に從へば... 三は不**至**如き心識の生起するに先ずて... 展りざる可**り**... 深を見て、三輩の考説を論破するに足るの... ざるの甚しきあり。

起原の考**説**に從へば、固より始末より良心てふ心識と老人の明に遠く全れりとは

三は不**至**如き心識の生起するに先ずて、老人の**精神**的發展の既に取程に近きし

展りざる可**り**... 展りざる可**り**... 展りざる可**り**... 展りざる可**り**...

深を見て、三輩の考説を論破するに足るの... 深を見て、三輩の考説を論破するに足るの... 深を見て、三輩の考説を論破するに足るの...

ざるの甚しきあり。... ざるの甚しきあり。... ざるの甚しきあり。...

瘋癲白痴の有様に陥る者が概々損失する所は道德的若しくは宗教的心識ありとの事**理**し、亦毫も三輩の考説に**反**するもの**に**あり或却つて三輩の考説に從へば爾か女**ら**べき答と考ふる。何と云ふば吾人の精神が病的状態に陥るに當りて

矢下**最初**に潰壊し来る心的作用は最も高等**後**に生起を達したる

山の即ち云はば其位地の未だ是た堅固ありたりものあり可なりは老人の本来の

目的を理想として心識するが如き**複**雑等ある精神作用は老人の心識の発達に

於ては最後に現したるもの故に又最も**潰**壊し易きものありとのをば奪は性しむ

後

後

東京専門学校印刷部

157

（植るはきはは所往するへ備ふ事）

凡そ習慣の結果は違ふ事あり唯だそれより流轉しゆく者外なき事あり

はその個々のリ マルテノノ一年の如きは斯く論ずる一人亦く氏は人間以上に

作用に於ては 有心有意の才能者なくば、吾人の義務を不觀念は全く根柢なき

変化し行くに のとならんと云ふ。然れども、^{今迄}年を同陳したる予の吾説を真ふくと

のに相違ふ事 せば、マルテノノ一々の提出する諍議よりしては、決してその如く

れども、良心て に秀小の心要あかるべし。マルテノノ一々の説は神学者輩の學

ふもの、ある に好んで主張する所ふれども、予の見所にては、それはオブリゲー

根柢の^{原由}は、^{熱の字面に}こゝにある。拘泥するの識りを免れざるか如し。マルテノノ一々の

吾人ニ對して 蓋タノマスオウ、エシカル、シオリ、山茅、三母、芽、白、四、夏、以下、千、八百、八

法界の成り立 十六年放を見よ。

ちに於て定まる目的ありて、而してそれに向つて吾人の進まんとする處にある

が故に、良心の根柢は法界の成り立ちに於ては、^元真実ある。又吾人に取りて最も

高貴なるものにありと謂つべし。善悪義務の心識を個々の事物に應用する類に於

ては、時と處とによりて、^元变化差別ありと云ふ。唯だ、^元变化差別のみありて、^元是れ其根

柢に於て一定せざる所のなきにあらざる。何と云へば、真心識の生起は吾人に取りて最

に於て一定せざる所のなきにあらざる。何と云へば、真心識の生起は吾人に取りて最

東京專門學校印刷部

植るはきはは所往するへ備ふ事
凡そ習慣の結果は違ふ事あり唯だそれより流轉しゆく者外なき事あり
はその個々のリ マルテノノ一年の如きは斯く論ずる一人亦く氏は人間以上に
作用に於ては 有心有意の才能者なくば、吾人の義務を不觀念は全く根柢なき
変化し行くに のとならんと云ふ。然れども、^{今迄}年を同陳したる予の吾説を真ふくと
のに相違ふ事 せば、マルテノノ一々の提出する諍議よりしては、決してその如く
れども、良心て に秀小の心要あかるべし。マルテノノ一々の説は神学者輩の學
ふもの、ある に好んで主張する所ふれども、予の見所にては、それはオブリゲー
根柢の^{原由}は、^{熱の字面に}こゝにある。拘泥するの識りを免れざるか如し。マルテノノ一々の
吾人ニ對して 蓋タノマスオウ、エシカル、シオリ、山茅、三母、芽、白、四、夏、以下、千、八百、八
法界の成り立 十六年放を見よ。
ちに於て定まる目的ありて、而してそれに向つて吾人の進まんとする處にある
が故に、良心の根柢は法界の成り立ちに於ては、^元真実ある。又吾人に取りて最も
高貴なるものにありと謂つべし。善悪義務の心識を個々の事物に應用する類に於
ては、時と處とによりて、^元变化差別ありと云ふ。唯だ、^元变化差別のみありて、^元是れ其根
柢に於て一定せざる所のなきにあらざる。何と云へば、真心識の生起は吾人に取りて最
に於て一定せざる所のなきにあらざる。何と云へば、真心識の生起は吾人に取りて最

は、^元变化差別のみありて、^元是れ其根柢に於て一定せざる所のなきにあらざる。何と云へば、真心識の生起は吾人に取りて最

良心の裏
義の意

良心の裏
面或性質

凡そ又最も高貴なる者が本来の目的に根據するものなり。□□
 手摺の序述に於て良心の隱微根本の性質を鏡い得と云ふ。裏に前論
 に於て開陳したる所は寧ろ更表面との性質にして、今茲に予輩の考説によつて去
 人も本来の目的に對して有する關係に良心を心識の生じたりとのを知ら
 に於て始めて良心の重層の性質を認め得たりと云ふ。予が云ふ此重層の性質が
 而りしを必ず其隱微根本の性質とす。
 今茲予輩の考説を開陳したる所に於て予は尤も良心は如何なる意味にて進歩
 するものなるかの問題も明にするを得ん。夫も老人が本来の目的を見るに
 の正しくあるに從ひ、我良心の爲すべし爲すべし可かすわと命し、善あり悪ありと判す
 るを正しくあるべし。即ち良心作用の對境の正しくあるに、眞進歩完達の存
 するに於て次に老人の本来の目的を見る範圍の廣くあるに從ひ、良心作用の範圍も
 亦極つて廣くあるべし。未だ曾て良心作用の及應せざりし事極に也。その作用の
 範圍の廣くあるに從ひ、及應するに至るべし。是れ亦夫の良心の一面なり。次に又良心の
 全く及應せざるには、未だ及應の程度に至つて微弱ありの存極が漸々強く

東京專門學校原稿紙

良心の裏面或性質
 凡そ又最も高貴なる者が本来の目的に根據するものなり。□□
 手摺の序述に於て良心の隱微根本の性質を鏡い得と云ふ。裏に前論
 に於て開陳したる所は寧ろ更表面との性質にして、今茲に予輩の考説によつて去
 人も本来の目的に對して有する關係に良心を心識の生じたりとのを知ら
 に於て始めて良心の重層の性質を認め得たりと云ふ。予が云ふ此重層の性質が
 而りしを必ず其隱微根本の性質とす。
 今茲予輩の考説を開陳したる所に於て予は尤も良心は如何なる意味にて進歩
 するものなるかの問題も明にするを得ん。夫も老人が本来の目的を見るに
 の正しくあるに從ひ、我良心の爲すべし爲すべし可かすわと命し、善あり悪ありと判す
 るを正しくあるべし。即ち良心作用の對境の正しくあるに、眞進歩完達の存
 するに於て次に老人の本来の目的を見る範圍の廣くあるに從ひ、良心作用の範圍も
 亦極つて廣くあるべし。未だ曾て良心作用の及應せざりし事極に也。その作用の
 範圍の廣くあるに從ひ、及應するに至るべし。是れ亦夫の良心の一面なり。次に又良心の
 全く及應せざるには、未だ及應の程度に至つて微弱ありの存極が漸々強く

Handwritten text on the right page, including vertical columns of Japanese characters and some red markings.

義務の
念
期
の
本
質
何
れ
か

後いその小に**傾**意の心識も亦明にある**傾**意の心識も亦明にある
 の意とは云ふなり
 予輩の提出したる考説へ説明は既に略ぼ其要領を悉くしたりと信ずれば
 夏考説より生し来る結果として一二所要なる問題の掃すべきあり第一の**問題**は
 夫人の義務の感覺又觀念は終に消滅すべきかとの**是**なり二は主として
 スペンサーの主義の主張する考説にありて**喚起**されたる論題あるが予輩の考説に
 是れば極く簡明なり スペンサーは夫人の外界の強迫の結果を脱して只た行為の
 軍ふる解答を 自然の關係に着目して其行為を爲す據にあるに在り夫人の義務
 爲し得べし即ち 心識は漸く消滅し去るべしと論ずれば予輩は如何なるか其如
 ち夫人自身の 義務を爲したるの**性**をばあるべし何と云へば其の説によれば
 目的を**究**らせ ば義務の心識は外界の刺激によりて生したる強迫の心持のみよ
 ざら向はその りしに成るものにあらずして猶ほ他に一要素を含有し居ればよ
 性に向つて在り 二は即ち**概念的**感覺が他の感覺の上に在る**權威**あり外界の

東京専門学校原稿紙

心論

人が心の衝動
するその止む
は亦かるべし
故に貝間は美
務の心論の痛
減する正亦か
るべし。成程老
人、日常経験する所に止れば、最初には必ず義務の心論（即ちねば、おらぬと之ふ心
論を）^浮て為したる事柄も、後には更だ心論を致すべし。極く容易極く
に所謂「意」の如く、心論する所に從つて、為すに至る事あり。生れども、或事柄に
於て其如き有様に至らば、作りに（来たる人への目的を）^完せざるは、他人新しき
事柄に於て更に義務の心論を發起し来るべし。即ち第一歩に於て、他人の理想と其
際とが合一し下るには、却てそれが刺激となりて、今迄は気が付かずし痛は高
き處に於て理想と實際との對峙を^覺知し来るべし。蓋し老人の目的は常住不変の

人が心の衝動
するその止む
は亦かるべし
故に貝間は美
務の心論の痛
減する正亦か
るべし。成程老
人、日常経験する所に止れば、最初には必ず義務の心論（即ちねば、おらぬと之ふ心
論を）^浮て為したる事柄も、後には更だ心論を致すべし。極く容易極く
に所謂「意」の如く、心論する所に從つて、為すに至る事あり。生れども、或事柄に
於て其如き有様に至らば、作りに（来たる人への目的を）^完せざるは、他人新しき
事柄に於て更に義務の心論を發起し来るべし。即ち第一歩に於て、他人の理想と其
際とが合一し下るには、却てそれが刺激となりて、今迄は気が付かずし痛は高
き處に於て理想と實際との對峙を^覺知し来るべし。蓋し老人の目的は常住不変の

人が心の衝動
するその止む
は亦かるべし
故に貝間は美
務の心論の痛
減する正亦か
るべし。成程老
人、日常経験する所に止れば、最初には必ず義務の心論（即ちねば、おらぬと之ふ心
論を）^浮て為したる事柄も、後には更だ心論を致すべし。極く容易極く
に所謂「意」の如く、心論する所に從つて、為すに至る事あり。生れども、或事柄に
於て其如き有様に至らば、作りに（来たる人への目的を）^完せざるは、他人新しき
事柄に於て更に義務の心論を發起し来るべし。即ち第一歩に於て、他人の理想と其
際とが合一し下るには、却てそれが刺激となりて、今迄は気が付かずし痛は高
き處に於て理想と實際との對峙を^覺知し来るべし。蓋し老人の目的は常住不変の

東京專門学校印刷部

117 良息徳 用の花

情態に於て一時に現れずして一の有様を完了して次の有様に移りゆく即ちその
 成り行きに於て現る、或る一言に於ては在るに現れずして成るに現る、或る若
 し六の在ると成るとの関係を餘りに極端哲學的思想に過ぐると思ふ者あらば
 今姑くその如き思想は措いて観みざるも予輩の考説に於て見れば老人は彼い
 一の事柄に於て義務の心識を失ふ也他の猶ほ高き事柄に於て更に其心識を覚
 し来るべきは明かしく而して此の如く義務の心識の一の能く見上の段に移り
 行くの進行は何の時に其終局に達して遂に全く停止するに至るべき予輩は之
 を知らざれば鬼目角老人が其生身變化の現象界の一部分とありて此の如き地
 上に生息する向は老人は永く理想と實際との對峙の有様を脱し得ざるべし然
 といふ老人は進歩の終極の目的は夏西者の何れまで此相對峙するにあらざりて其
 家に居一するにあり據て其目的の衝動のその目的に向つて何時まで此傾向
 するの有様にあらずして是早其目的と老人の實際の情態とが一致をなし無上
 の満足を得たるの有様にあらずと云ふべし。

東京專門學校 櫻井 録

然るに其の如き事柄は予輩の考説に於て見れば老人は彼い
 一の事柄に於て義務の心識を失ふ也他の猶ほ高き事柄に於て更に其心識を覚
 し来るべきは明かしく而して此の如く義務の心識の一の能く見上の段に移り
 行くの進行は何の時に其終局に達して遂に全く停止するに至るべき予輩は之
 を知らざれば鬼目角老人が其生身變化の現象界の一部分とありて此の如き地
 上に生息する向は老人は永く理想と實際との對峙の有様を脱し得ざるべし然
 といふ老人は進歩の終極の目的は夏西者の何れまで此相對峙するにあらざりて其
 家に居一するにあり據て其目的の衝動のその目的に向つて何時まで此傾向
 するの有様にあらずして是早其目的と老人の實際の情態とが一致をなし無上
 の満足を得たるの有様にあらずと云ふべし。

目下は... 理想の境先に何って進み行くの外なし。又常に人は善悪正邪の判断に惑ふとあるのみありて往來久しく人生の理想に居るべし。認め得たる事柄をば後に知見の同くするに往ひ、其理想は居せざるべし。と看破したる時、痛は其事柄に反對して行ふをば多少心おらず思ふの気味あるとあるにあらざる。即ち此知見に往つて、**右方**に就くべし。と見定めたる時に、**痛**は**何**と云く左方に就かば亦さぬ如くに思はるゝとある。是れ蓋し良心の久しく或一の**方角**に向つて働き居たるの**痕跡**あるにあらざる。即ち良心の働きは**實**は既に他の**方角**に向ひ居るにも拘らず、往來の久しき**慣習**の鉄索が猶ほ我々の**痕跡**を心に留め居るによるある。然る勿論に新知見の明にふるに往ひ、其**痕跡**は自然に消滅し去るある。且又**吾人**の良心は各自皆獨立の明に依り、**別個**に依り、**實**にあらざりて却て多數の人々に拘りて往來社会の一般に於ける良心の働き方に、**若しくは或少数の極く上達したる人々の良心の働き方**に依り、**或る**良心の働きの生きたるにあらざる。彼等の他に、**或る**良心は**只た**外界の強迫良心の作用を倣定せざる所の**創意**より生きたる**鉄索**にはあらざる。矢張り彼等たる良心たるを免はば、今日の社会に於ては、**小兒**の良心を尊重せしむるに於て、**父**

乙理想の境先に何って進み行くの外なし。又常に人は善悪正邪の判断に惑ふとあるのみありて往來久しく人生の理想に居るべし。認め得たる事柄をば後に知見の同くするに往ひ、其理想は居せざるべし。と看破したる時、痛は其事柄に反對して行ふをば多少心おらず思ふの気味あるとあるにあらざる。即ち此知見に往つて、**右方**に就くべし。と見定めたる時に、**痛**は**何**と云く左方に就かば亦さぬ如くに思はるゝとある。是れ蓋し良心の久しく或一の**方角**に向つて働き居たるの**痕跡**あるにあらざる。即ち良心の働きは**實**は既に他の**方角**に向ひ居るにも拘らず、往來の久しき**慣習**の鉄索が猶ほ我々の**痕跡**を心に留め居るによるある。然る勿論に新知見の明にふるに往ひ、其**痕跡**は自然に消滅し去るある。且又**吾人**の良心は各自皆獨立の明に依り、**別個**に依り、**實**にあらざりて却て多數の人々に拘りて往來社会の一般に於ける良心の働き方に、**若しくは或少数の極く上達したる人々の良心の働き方**に依り、**或る**良心の働きの生きたるにあらざる。彼等の他に、**或る**良心は**只た**外界の強迫良心の作用を倣定せざる所の**創意**より生きたる**鉄索**にはあらざる。矢張り彼等たる良心たるを免はば、今日の社会に於ては、**小兒**の良心を尊重せしむるに於て、**父**

可なり

東京専門學校原稿紙

Handwritten Japanese text on the right page, including vertical columns of characters and some red annotations.

Main handwritten Japanese text on the left page, enclosed in a red border, with numerous red annotations and corrections.

東京専門学校校印

論考
の影

餘論
倫理學上の論の價値

予は此論の緒言に於て既に云ひし如く、良心起るゝ何處にあるかは倫理學上の第一の要問題に更に關係する所ありと思ふ學者のあきにあらず。然れども此處に就いては、上を陳述したる所によりて既に充分予輩の所見を推知し得ざる、亦らんと信する故に、茲には只た簡單に論し終らんと欲す。

或事を爲さねば亦らぬと覺知し又は善し悪しと覺知する心識は、只た現在の心識として、その起るゝ如何によりて敢て変更するものにあらざるべし。義務を尽さねば亦らぬと云ふ心識は、素と如何にして生じた小ばとて、今は矢張り今の心識(即ちねば亦らぬと云ふ心識)と異なるに相違なし。然れども、その如き心識の存在するに當りて然る理由あるか否か、又其心識の對境と異なる書柄(何れか)の如何かは、差違を與へずと云ふ可らず。例へば予が本論に於て最初に非難したる予説の如くに、良心の作用を全く外界の強迫より生じたるものと見れば、其外界の強迫の現に伴はざる書柄に對して良心の作用を覺ゆるは、是亦寧ろ一の書柄と謂はざるを得ず。故に今述は、外

良心の作用 倫理學上の論の價値

東京專門學校原稿紙

予は此論の緒言に於て既に云ひし如く、良心起るゝ何處にあるかは倫理學上の第一の要問題に更に關係する所ありと思ふ學者のあきにあらず。然れども此處に就いては、上を陳述したる所によりて既に充分予輩の所見を推知し得ざる、亦らんと信する故に、茲には只た簡單に論し終らんと欲す。

或事を爲さねば亦らぬと覺知し又は善し悪しと覺知する心識は、只た現在の心識として、その起るゝ如何によりて敢て変更するものにあらざるべし。義務を尽さねば亦らぬと云ふ心識は、素と如何にして生じた小ばとて、今は矢張り今の心識(即ちねば亦らぬと云ふ心識)と異なるに相違なし。然れども、その如き心識の存在するに當りて然る理由あるか否か、又其心識の對境と異なる書柄(何れか)の如何かは、差違を與へずと云ふ可らず。例へば予が本論に於て最初に非難したる予説の如くに、良心の作用を全く外界の強迫より生じたるものと見れば、其外界の強迫の現に伴はざる書柄に對して良心の作用を覺ゆるは、是亦寧ろ一の書柄と謂はざるを得ず。故に今述は、外

Handwritten text on the right page, including the number 41 at the top center. The text is written in vertical columns within a red grid.

この^見切に取つてしまふのありと云ふ^大のは知^了し得^るあり。本来の目的と云ふ語は固より以て倫理の大義美徳の標準の何たる表示するには^十乏かあり。然れども^見非^見に^見よ^見て以て其大義美徳標準の求め得らるべき方向を知れり。こゝを^未得^未べし。譬へば倫理界に於ける^未針^未盤^未を得たるか如く^未或^未だ^未見^未鍼^未の指示す。處に如何あるものあるかは知らざれば、^未兎^未に^未角^未を^未指^未す。^未其^未方^未角^未に向つて研究を運ばせ得るあり。而して其方角に向つて研究を運ばせて倫理の大義美徳の標準の何たるかを察するは、^未是^未小^未倫^未理^未學^未の本^未領^未に^未属^未する^未問題^未あり。

無意の動 意の動 意の動 意の動

附録

良心作用の對境たる動機、意趣並に行為

此附録に於て論せむとする所は、吾人の如何なる動作が良心作用の對境とあるか、
揆言すれば、吾人の教養なき動作の中に如何なる性質を帯びるものに對して、吾人
は良心の不心的作用を發起すべしと云ふ問題なり。

今例へば悪意なくして過つて人を害したりと想像せよ。其人に對して気の毒に思
ひ又我所為を見ては、是れ其人に苦痛を與へしめざるを以て、多少不快の感覺を備
ふるありし。然し其場合に於て、先方の人に對し又我所為に對して備ふ心識は、予輩
が良心の作用と名くるものとは同しからず。何と云ふれば先方の人へ為に悲しむ、
我所為を顧みて之を哀れむか、おとと思ひ又其人へ為に死すべく其珍貴を憐れし
とは、然るる。我心を責めたる心識は起らざれば、如何にして豫防し得らぬ
ざりし誤差を悲しむ時の心識として、はあらぬと知り、おがら一作動を為し、時の
心識とは決して混同すべし。のにあらざり。後者は予輩が良心の不安と名けらるる
ものにして、右云ふ如き場合には、良心の不安を、お作用は起らざるあり。然らば

良心の作用

良心作用の對境たる動機、意趣並に行為

東京專門學校印刷部

作動

Handwritten notes on the right page, including a large circled character '作動' and various vertical lines of text.

此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。

胡蝶

自心が他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。

其の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。

此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。此の如くして、他人の苦痛を感ずるに、自らも苦痛を感ずる。

東京専門学校印刷部

心よりして其意趣の結果ある已此の行為に對して覺ゆる不快の感とは決して同
 一のよへにありず。我作動をば計らざる外界に現したる他人の苦痛の原因と見
 して、己此に對して不快の感覺を催すと、其動作を我意趣(他人を害はんとする意趣)
 の結果と見て不快の感覺を催すとは大に相異り。今一動作を惡み貶し、さげしむ時
 一心識を省々に、其心識は必ず意趣ある動作に對するものありをを知る。我動作に
 ちつて計らざる他人の苦痛を惹き起したる時に、之を気の毒に思ひ、又我作動を
 らずしかおと思ふ心は、意趣より出で、其人を害ひし時に、其作動を乞ふしと擲
 せる心と決して同一のものにあらざ。故に善惡の褒貶は意趣ある作動に對して
 するものにして、計らざる起りたる動作又其動作の結果に對して奪するものには
 あらざ。則ち善惡の識別感別の邊より云ふ以上に掲げたる場合に於ては、良心の作
 用おしと云はざる可らず。猶ほ今陳べたる意を明にせんが爲に、三般の例を設
 けて之を説明せん。

三般

例一は今人あり故意おとして豫め防き得べき危険おとして他人を害したりとせ
 ば、先づ之を見るもの、心には被害者を見て気の毒に思ふの同情的作用を起すべ

東京專門學校原稿紙

右記したる三般の例は、他人を害するに當りては、其意趣の結果ある已此の行為に對して覺ゆる不快の感とは決して同
 一のよへにありず。我作動をば計らざる外界に現したる他人の苦痛の原因と見
 して、己此に對して不快の感覺を催すと、其動作を我意趣(他人を害はんとする意趣)
 の結果と見て不快の感覺を催すとは大に相異り。今一動作を惡み貶し、さげしむ時
 一心識を省々に、其心識は必ず意趣ある動作に對するものありをを知る。我動作に
 ちつて計らざる他人の苦痛を惹き起したる時に、之を気の毒に思ひ、又我作動を
 らずしかおと思ふ心は、意趣より出で、其人を害ひし時に、其作動を乞ふしと擲
 せる心と決して同一のものにあらざ。故に善惡の褒貶は意趣ある作動に對して
 するものにして、計らざる起りたる動作又其動作の結果に對して奪するものには
 あらざ。則ち善惡の識別感別の邊より云ふ以上に掲げたる場合に於ては、良心の作
 用おしと云はざる可らず。猶ほ今陳べたる意を明にせんが爲に、三般の例を設
 けて之を説明せん。

し又以同感より反射し来りて、其者の苦痛の原因たる為害者の動作に對して、不快の感を感じたり。然れども、此の場合に於ては、不快の感^は外には出て来るべし。 試に、

右の場合を以て、
 受して為害者
 に於て被害者
 を害ふの悪意
 ありし^比想像せよ。然らば、此場合に於ては、右云ふ不快の感に加へて、為害者の意趣^其並に、
 其意趣より出でし行為を惡み嫌ふの心あり。是れ即ち善惡を識別感別する良心の作用に出でたるものなり。 又更に、此場合を以て、他人が為害者にあらずして自身が為害者、
 悪意ある為害者たりしと想像せよ。此場合に於ては、右二段の場合に於ける心的作用、
 即ち同感より生ずる不快の感^並に、善惡の識別感別の外に、自分^はかしては、亦らぬと思ふを為し、
 と云ふ心識に伴ふ所の自ら責め答むるの心あり。是れ即ち、
 義務の念に隨従して起り来る良心の作用、
 此場合に於ては、良心

の感情を起し来るをふきにあらず。例へば、
 常々其被害者を心よからず思ひ居らば、その者の害は、
 水しを假し、其者の罪にはあらず。或は、
 疑わぬかよひ気味と思ふの心地あり、
 是れは、
 等は今論には、
 關係なき事柄とせば、
 是れは、
 者きて云はず。

東京專門學校印刷部

174

Handwritten notes on the right page, including a large circled character '心' and other vertical text.

の法軍の思ひ	訂けたる	を為す心構	をば意趣と名	くるふ。且又	思ひ設けたる	動作並に更思	い設けたる	軍の中は敏	しぬみたる	のみあらず	時としては敏	しぬまわら	のいあるふ
--------	------	-------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------

若し新の如く行為てふ語の意義を限るを不當とせば思ひ設けたる行為と思ひ設けたる行為と別して其別を表せんが爲に更に二個の言語を撰み来りて各々に命せざる可らず。

(一)ちあけ)

凡て作動の思ひ設けたる法軍に對しては良心は是非の判断を下すをふ。做い下すが如く見ゆる場合あるもそれは直接に下すのみ例へは曾て爲すべき事をば知りながら心あらずし忘れたる等のをありて更念りの爲に今思ひ設けたる不齊の法軍を棄したるが如き場合には良心は其場合の思ひ設けたる法軍にハ是非の判断を下すをあらん。外小なり。此は更法軍を爲に思ひ設けたる作動より生ぜしむる見ゆるふり。即ち間接に是非の判断を下すに近きあるふ。若し獨りに心づきふから為さざりし等の原因なく即ち全く得下す白分の際あるし。生したる法軍に對してハ假し更法軍か思ひ設けたる作動に追従して来りしとする也。

良心は是非の判断を下さず。法律の同小所とはあるも、道徳上良心の同小所とはある也。

此の法軍の思ひ訂けたるを為す心構をば意趣と名くるふ。且又思ひ設けたる動作並に更思ひ設けたる軍の中は敏しぬみたるのみあらず時としては敏しぬまわらふのいあるふ

若し新の如く行為てふ語の意義を限るを不當とせば思ひ設けたる行為と思ひ設けたる行為と別して其別を表せんが爲に更に二個の言語を撰み来りて各々に命せざる可らず。

(一)ちあけ)

凡て作動の思ひ設けたる法軍に對しては良心は是非の判断を下すをふ。做い下すが如く見ゆる場合あるもそれは直接に下すのみ例へは曾て爲すべき事をば知りながら心あらずし忘れたる等のをありて更念りの爲に今思ひ設けたる不齊の法軍を棄したるが如き場合には良心は其場合の思ひ設けたる法軍にハ是非の判断を下すをあらん。外小なり。此は更法軍を爲に思ひ設けたる作動より生ぜしむる見ゆるふり。即ち間接に是非の判断を下すに近きあるふ。若し獨りに心づきふから為さざりし等の原因なく即ち全く得下す白分の際あるし。生したる法軍に對してハ假し更法軍か思ひ設けたる作動に追従して来りしとする也。

良心は是非の判断を下さず。法律の同小所とはあるも、道徳上良心の同小所とはある也。

有心識と
世心識と
この動機

人例一は多人
 教を授けん為
 に止むを得ず一人の困苦を見棄つるが如き場合には其一人の困苦を見棄つるに
 は思ひ設けたる事柄には相違おかれど欲し好みたる事柄にてはあらず而して作
 動
 動機
 動機
 のこゝろが其行為の動機なるに言へば是れが行為の動機の一部を成す事あり
 凡そ行為の動機の中には明に有心識にして且つ自ら多少制禦し得うるもの、
 又自ら無心識身は殆ど無心識なるもの又有心識なるも自ら制禦し得らざる
 ものあり。吾人の行為を為す時の心を観るに如何なる感情如何なる傾向
 如何なる動機が其行為を喚起せしか否かは辨別し難き場合甚だ多し。而して無心識なる若
 しは全く制禦し得らざる動機は良心の間ふ所とはあらず。動機に有心識
 無心識の別あるを明にして而してそれと良心の作用との関係を詳に世人が為
 に次に一例を掲げて説明せん。
 例一は花に逢行く一婦人ありて可憐なる小児の路傍に苦悶するを見て之を救助

東京專門学校印刷部

人例一は多人
 教を授けん為
 に止むを得ず一人の困苦を見棄つるが如き場合には其一人の困苦を見棄つるに
 は思ひ設けたる事柄には相違おかれど欲し好みたる事柄にてはあらず而して作
 動
 動機
 動機

良心は是非の判断を下す。法律の間ふ所とはあるは道徳上良心
 の間ふ所とはあらずある。

196

したりと想像せよ。然るに於て其婦人の行為を動かし起したる動機を尋ねれば決
 して一にして是らざるべし。第一其小児の苦痛を取り去らんとするの欲求ありて、
 此小児の苦痛を以て其婦人の行為を喚起したる動機の中にて最も著しく心識に現
 し居る此の点に於て然るに此の点も亦此の点と共に半ば無心識に僅く動機も亦此に於て
 らん。例へば小児の苦痛を見らんとするの同意の作用にて自身に感受する苦痛が動
 機となりて其自身も苦痛を脱せんとするの動作即ち此の場合にては其苦痛の原
 たる小児の苦痛をば取り去らんとするの動作を起すの趣亦此に於てあらざるべし。然
 れども之を起すの趣は多きは半ば無心識の境界にあるべし。身学者は右第一の
 動機即ち小児の苦痛を以て自身を取り去らんとするの動作と小児の苦痛を見て同意
 して覺ゆる其苦痛を脱せんとするの動作とを混同して前者は畢竟するに後者に
 劣りて動かさる、此の点此に依りて存在するものに外ならずと云ふは其兩
 者の相俾て存在するを見てその性質を全く同一視したるの謬見なり。其苦痛
 を脱せんとするの動作は小児の苦痛を取り去らんとするの動作と相俟して其小
 児を救助する行為の動力を殊にあらざるはあるべし。然るに此の西者請して同一の

東京府立第一中学校

此の點に於ては其苦痛の原たる小児の苦痛を以て自身を取り去らんとするの動作と小児の苦痛を見て同意して覺ゆる其苦痛を脱せんとするの動作とを混同して前者は畢竟するに後者に劣りて動かさる、此の點此に依りて存在するものに外ならずと云ふは其兩者の相俟して存在するを見てその性質を全く同一視したるの謬見なり。其苦痛を脱せんとするの動作は小児の苦痛を取り去らんとするの動作と相俟して其小児を救助する行為の動力を殊にあらざるはあるべし。然るに此の西者請して同一の

のにあらざる。其中の一は全く他に依りて存在するものとハ言ふ可らず。故に同感に
 ようて感受する苦痛より小一層甚しき苦痛を受けて此其小児を扱はむとするを
 のあるあり。若し小児の苦痛を取去らんとするの動機は夏小児の苦痛に對して同
 感して經る我苦痛を脱せんとするの動機に全く同じき此の若しくはそれ完全に全
 然りて存在する此のありば今之小兒を扱はむしてあり得べからざる。加之我苦
 痛を脱せむとするの動機は右等の場合に於ては多くは殆ど無心識に傷くものに
 して而して又能ひそれか有心識に傷く場合に此其小兒の動機は小児を扱はむして
 此に夏小児を脱れんとするの能取とこそあれ又僅少の勞力によつて夏小児の苦痛の
 原因即ち小兒の苦痛を取り去らむとするの能取とこそあれ自身は如何ある苦痛
 を受けても猶更小兒の苦痛を取去らんとするの欲求とハ決してある可うざる
 あり。夏小児の苦痛を際き去らむとする欲求の強弱は同感に於て感受する苦痛
 の多少と夏小児の苦痛の同感に於て例へば夏小児の我が生みし子あり時ハ
 夏小児の苦痛の至る僅少ある場合に此其を際かむとする我が欲求は甚だ大なるべ
 し。是ハ一は採子ある時は夏小児の僅少ある苦痛は猶よく採に取つては同感的作用

東京專門學校印刷部

採子ある時は夏小児の僅少ある苦痛は猶よく採に取つては同感的作用
 夏小児の苦痛の至る僅少ある場合に此其を際かむとする我が欲求は甚だ大なるべ
 し。是ハ一は採子ある時は夏小児の僅少ある苦痛は猶よく採に取つては同感的作用
 夏小児の苦痛の至る僅少ある場合に此其を際かむとする我が欲求は甚だ大なるべ
 し。是ハ一は採子ある時は夏小児の僅少ある苦痛は猶よく採に取つては同感的作用

によりて大きく感せらるゝが故あるん。然れども此若し其の故のみあらば、欲求の強
 弱と同感の苦痛の強弱との間に比例の立たざる場合も是れ多し。然らば何故その如
 き場合に自身の子を助けて下さる欲求の大さかと思はるるに、是れ蓋し自身の子
 に對してのみ存在して他人の子に對しては存在せざる關係、他動性習等のあるあ
 りて、此れが自身と同感の苦痛の大小に拘らざる我をして、其子の苦痛を取り除く
 とせしむるが故あり。其子を助くるの行為を喚起するは、同感の作用のみせしむ
 る所にあるにして、却て他動性習ありて始めて同感の作用をしてその効力あらし
 むる場合に是れ多し。子に對する親愛等の情ありて始めて其子に對する同感の作用
 が効力ありし。即ち實行を喚起するは、此れありあり。
 親愛と同感とは此して同一物にあらず。例へば情人が其戀ひ慕ふ人に對して抱く
 る愛情の如きは、右二者の同一物にあらず。斯るを云ふ好意例あらん。若し其情人の
 苦みを見れば其の毒に思ひ、其毒を見れば嬌しく思ふのみが相互の情會あらば、
 此れ程愛相ある愛慕はあらじ。慈むおけると云ふと云ふ何處にありや。君の爲には
 百年の命惜しからじと云ふと云ふ何處にありや。
 且又且又右云ふ婦人の情會に

(ニ) (ニ)

179

然るに其の苦痛の強弱は、同感の強弱に比例する。然れども此若し其の故のみあらば、
 欲求の強弱と同感の苦痛の強弱との間に比例の立たざる場合も是れ多し。然らば何故その如
 き場合に自身の子を助けて下さる欲求の大さかと思はるるに、是れ蓋し自身の子
 に對してのみ存在して他人の子に對しては存在せざる關係、他動性習等のあるあ
 りて、此れが自身と同感の苦痛の大小に拘らざる我をして、其子の苦痛を取り除く
 とせしむるが故あり。其子を助くるの行為を喚起するは、同感の作用のみせしむ
 る所にあるにして、却て他動性習ありて始めて同感の作用をしてその効力あらし
 むる場合に是れ多し。子に對する親愛等の情ありて始めて其子に對する同感の作用
 が効力ありし。即ち實行を喚起するは、此れありあり。
 親愛と同感とは此して同一物にあらず。例へば情人が其戀ひ慕ふ人に對して抱く
 る愛情の如きは、右二者の同一物にあらず。斯るを云ふ好意例あらん。若し其情人の
 苦みを見れば其の毒に思ひ、其毒を見れば嬌しく思ふのみが相互の情會あらば、
 此れ程愛相ある愛慕はあらじ。慈むおけると云ふと云ふ何處にありや。君の爲には
 百年の命惜しからじと云ふと云ふ何處にありや。
 且又且又右云ふ婦人の情會に

あつては同感のみが行為の動機にあうぞるを、母親の本能と名くる此のを見て
 も、^知らるるべし。此本能は母たる婦人を、我子へは勿論他人の子へも、^引き近づる一
 種の強大なる動力たるあり。其子の苦痛は假り僅かあるも、婦人に取うては夏^子が
 未だ乳を吸ふ嬰児あるの故を以て、^其苦痛を倍き去うんとする欲求は大なるべし。
 □□然らば則ち、^其婦人の場合にありては同感的作用に於て我感受する苦
 痛を^免せんとするの動機と相混す可らざる種々の動機あるを明かすべし。而して夏
 中には有心識の欲求とあり、^心心に心に浮び居るものあれば又殆ど無心識にして有
 心識の^心の相合して暗に行為の動力を強め居るものもある也。
 右疎ぶる如く行為の動力とあるものは決して一にして足らざるが、其中良心の向
 ふ所とあるは唯^心有心識にして且多少制禦し得べきもののみあり、^無無心識ある若し
 くは全く制禦し得べからざる動機は、^機同様に向ふ所とあるの場合に際しては決し
 て良心の向ふ^心所とあるべからざるあり。故良心の向ふ所とある有心識にして且多少制
 禦し得べき動機は、是れ普通の言語に人の心根と稱するものにして心根の^心なるべし。
 亦と言ふは、^心心根の^心なるべし。此動機は、^心心根の^心なるべし。此動機は、^心心根の^心なるべし。

東京府立第一中学校蔵

此の動機は、^心心根の^心なるべし。此動機は、^心心根の^心なるべし。此動機は、^心心根の^心なるべし。

意趣の先
非と
全体。

良心の同不所とあるは右云ふ有心識の欲求にのみ止らず動作及其結果の中欲し
 亦いざるものあるも若しそれを逆知の上にて為すの心構あらば其心構は亦良心の
 同不所とある。而して凡て欲し厭むを又欲し好まざるを其に思ひ設けて為す
 の心構をば前に此既に云ひし如く意趣と名け、其意趣の外界に現したるものをば
 行為と名く。故に意趣と動機とは身範同決して同一のものにあらず。意趣は必ず有
 心論あるもの、動機は必ず然かるにあらず。意趣は既に決意に到達せるもの、動機は
 未だ決意とはなり得らざるものあり。蓋し取事を欲成するの動機ある時も必ずし
 もそれを實際成就せんとするの決心のあらざるあり。又取事を為さんとするの心構
 は欲求とは異りて、欲し好む事柄にのみ對せずして、欲し好まざる事柄にも對せし
 例は日上に掲げたる例に於て若し小兎の危急を救はんが爲に他人と約束せし時
 刻を後々、此事ありば其時刻を後々、事は決して欲し好む所にあらず。約束に
 違ふと言ふことが左の場合に於ては決して行為の動機とはならず心を動かして行
 為を東方の心的因縁とハおらざるあり。然れども約束に違ふ心構即ち其意趣は充
 分存在せり。而して其意趣の全体を總括して良心はそれには是非の判別を下す。且又

東京府立第一中学校

良心の同不所とあるは右云ふ有心識の欲求にのみ止らず動作及其結果の中欲し
 亦いざるものあるも若しそれを逆知の上にて為すの心構あらば其心構は亦良心の
 同不所とある。而して凡て欲し厭むを又欲し好まざるを其に思ひ設けて為す
 の心構をば前に此既に云ひし如く意趣と名け、其意趣の外界に現したるものをば
 行為と名く。故に意趣と動機とは身範同決して同一のものにあらず。意趣は必ず有
 心論あるもの、動機は必ず然かるにあらず。意趣は既に決意に到達せるもの、動機は
 未だ決意とはなり得らざるものあり。蓋し取事を欲成するの動機ある時も必ずし
 もそれを實際成就せんとするの決心のあらざるあり。又取事を為さんとするの心構
 は欲求とは異りて、欲し好む事柄にのみ對せずして、欲し好まざる事柄にも對せし
 例は日上に掲げたる例に於て若し小兎の危急を救はんが爲に他人と約束せし時
 刻を後々、此事ありば其時刻を後々、事は決して欲し好む所にあらず。約束に
 違ふと言ふことが左の場合に於ては決して行為の動機とはならず心を動かして行
 為を東方の心的因縁とハおらざるあり。然れども約束に違ふ心構即ち其意趣は充
 分存在せり。而して其意趣の全体を總括して良心はそれには是非の判別を下す。且又

別物
行為
執行
の外部
の外部

行為は外部の妨によりて行為に現れざる場合には良心の向ふ所とあるは
左様にして所執せず非善の痛は明にして留くべき問題あり。即ち良心の是非了る所に
亦互は有心識にして多少制禦し得べき動機即ち心根と意趣とに止まる辨持其意
趣の外界に現したるもの即ち行為にも及ぶ非と云ふを是非と云ふ。通常の言誌にて
は良心は正に行為の是非善悪を判別するものと見做す可也。其の行は是あり。非
あり。其の爲したるをハ善あり。悪あり。亦と云ふは是非即ち通常の言誌に於ては
良心の判別を行為の上に及ぶものと見るの證にあらざる也。併し或学者は良心の是
非する正當の教境は意趣又ハ心根にありて行為にあらざると思へり。成程意趣亦ハ
作動には良心は是非の判定を下さず又意趣亦ハありば外部の作動亦くと良心
の向ふ所とある併し亦がら。それ故に意趣ある作動即ち行為は良心の向ふ所の範
圍の外にありハは推論し得ざるなり。却て良心の是非の判別が行為の上に及ぶは
意趣無しに足らざるをにあらざる也。若し意趣あるのみにて行為あり時にハ良心
の向ふ所とあるは當然の事にあらず也。抑ハ意趣と行為とは全く別物にあらず寧ろ
同一物の両面と見るべきものあり。即ち外界に現したるの證に於ては行為と云

行為は外部の妨によりて行為に現れざる場合には良心の向ふ所とあるは
左様にして所執せず非善の痛は明にして留くべき問題あり。即ち良心の是非了る所に
亦互は有心識にして多少制禦し得べき動機即ち心根と意趣とに止まる辨持其意
趣の外界に現したるもの即ち行為にも及ぶ非と云ふを是非と云ふ。通常の言誌にて
は良心は正に行為の是非善悪を判別するものと見做す可也。其の行は是あり。非
あり。其の爲したるをハ善あり。悪あり。亦と云ふは是非即ち通常の言誌に於ては
良心の判別を行為の上に及ぶものと見るの證にあらざる也。併し或学者は良心の是
非する正當の教境は意趣又ハ心根にありて行為にあらざると思へり。成程意趣亦ハ
作動には良心は是非の判定を下さず又意趣亦ハありば外部の作動亦くと良心
の向ふ所とある併し亦がら。それ故に意趣ある作動即ち行為は良心の向ふ所の範
圍の外にありハは推論し得ざるなり。却て良心の是非の判別が行為の上に及ぶは
意趣無しに足らざるをにあらざる也。若し意趣あるのみにて行為あり時にハ良心
の向ふ所とあるは當然の事にあらず也。抑ハ意趣と行為とは全く別物にあらず寧ろ
同一物の両面と見るべきものあり。即ち外界に現したるの證に於ては行為と云

東京專門學校印刷部

自他動
作動定
の前の
後如行

此等の行為は... 意趣の有無... 行為の是非... 意趣の善悪... 如何にして知り得るか... 云ふに他人... 行為の是非... 意趣の善悪... 如何にして知り得るか... 云ふに他人... 行為の是非... 意趣の善悪... 如何にして知り得るか... 云ふに他人...

自他動
作動定
の前の
後如行

い内界に在るの邊に於ては意趣と云ふ未だ意趣の行為に現せざる時に、外物の障礙さへなくば、必ず行為に現するものと見て、良心は之を是非し、又行為に現したる後には、その行為を意趣の外界に呈現したるものと見て、之を是非するあり。上未論述したる所によつて見れば、良心が是非の判別を下すの動境は、心根と意趣と行為とにあるを知らず、
有意趣の動作即ち行為が良心の向ふ所とあるは右の論述によつて明らしくは、其行為に又自他の差別を爲して、良心の是非する所とあるを、他人の行為とあるが、唯、在自身の行為とあるか、と問ふを得ん。此向に答へて、良心の作用は他人の行為を是非するが初にして、後に之を自身の行為に移すと考ふる学者、亦きにあらざる。此れは、此の論の所を以て、敢て見るに難からざるべし。意趣なき動作は良心の向ふ所とあるが、意趣ある動作のみ、是の是非する所とあるとは上に論したる所とある。か切ると、意趣の有無、又その意趣の善悪は如何にして知り得るか、と云ふに、他人の動作に意趣あるか、亦かは、直接には決して知り得らざる。其人の言語又外形の動作によつて之を推知するの外、亦し、即ち自から得て、此れ、
の言語を吐き、此れ、

東京専門學校複製紙

く、**意趣**を爲したる時は、**意趣**ありき又は**無**かりきと知れる。我経験より推し
 て以て他人の**意趣**の**有無**を察知するに外ならず。他人の**意趣**の**有無**のみならず、其
 意趣の何たるを知るも亦固より先づ自らの**意趣**の何たるを自覚せし上よりざる
 可らず。蓋し**意趣**の**有無**と其何たるとは味して全く別々に知るゝものにあらず、
 意趣を以ての、何たるを知らずして如何にして彼の人々の**作動**には**意趣**あり其の
 人の**作動**には**意趣**ありと云ふを得んや。然らば別々の理由ありて**意趣**の**善悪**の
 自らの**意趣**に就いて判別するに先ずて他人の**意趣**に就いて判別すと云ひ得
 る。予輩は**實踐**に徹するは**意趣**の何たるに徹する。味して其理由を自見せざる
 あり。先づ自らの**意趣**の**善悪**を知らずして他人の**意趣**の**善悪**を知ると云ふは、**怖**も
目もおくして見ると云ふに似たり。帝に**意趣**の**善悪**にあらざる**意趣**の**實現**したる行
 爲に就いて、**其**是**非善悪**を判別するは他人の爲したる所より、**姑**めて而して後に
 自身に及ぶと云ふの理由あるを見ず。行為の**善悪**は**意趣**の**善悪**と相離して判別し
 得るものにあらず。行為と**意趣**とは前に云へる如く同一物の両面と見らば、**其**の
 ありはあり。若し良心の作伴ある是**非善悪**の心識に就いて云はずして、**其**水と

東京大学理学部編

209

意趣の何たるを知るも亦固より先づ自らの意趣の何たるを自覚せし上よりざる可らず。蓋し意趣の有無と其何たるとは味して全く別々に知るゝものにあらず。意趣を以ての、何たるを知らずして如何にして彼の人々の作動には意趣あり其の人の作動には意趣ありと云ふを得んや。然らば別々の理由ありて意趣の善悪の自らの意趣に就いて判別するに先ずて他人の意趣に就いて判別すと云ひ得る。予輩は實踐に徹するは意趣の何たるに徹する。味して其理由を自見せざるあり。先づ自らの意趣の善悪を知らずして他人の意趣の善悪を知ると云ふは、怖も目もおくして見ると云ふに似たり。帝に意趣の善悪にあらざる意趣の實現したる行為に就いて、其是非善悪を判別するは他人の爲したる所より、姑めて而して後に自身に及ぶと云ふの理由あるを見ず。行為の善悪は意趣の善悪と相離して判別し得るものにあらず。行為と意趣とは前に云へる如く同一物の両面と見らば、其のありはあり。若し良心の作伴ある是非善悪の心識に就いて云はずして、其水と

